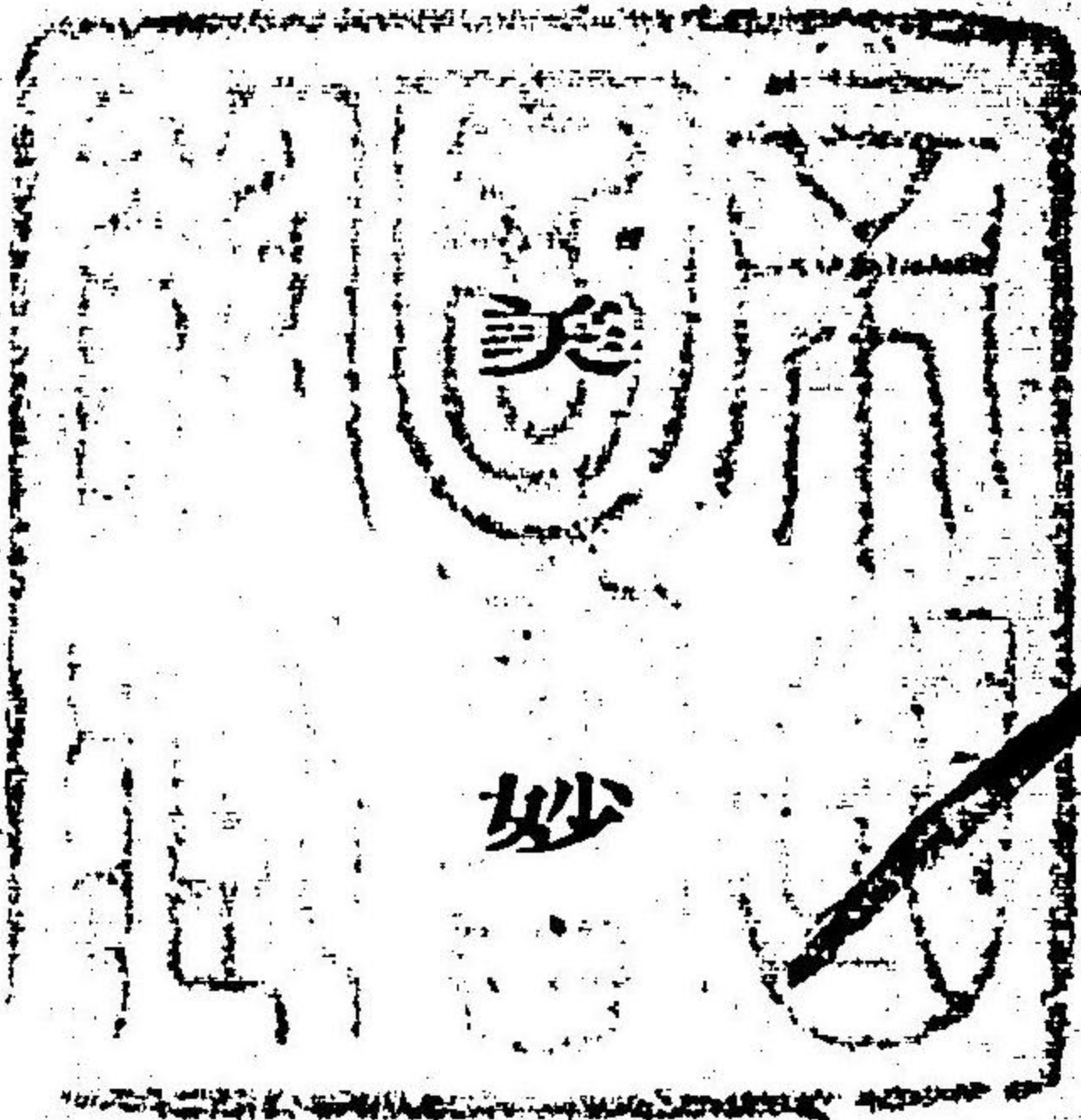


29-357



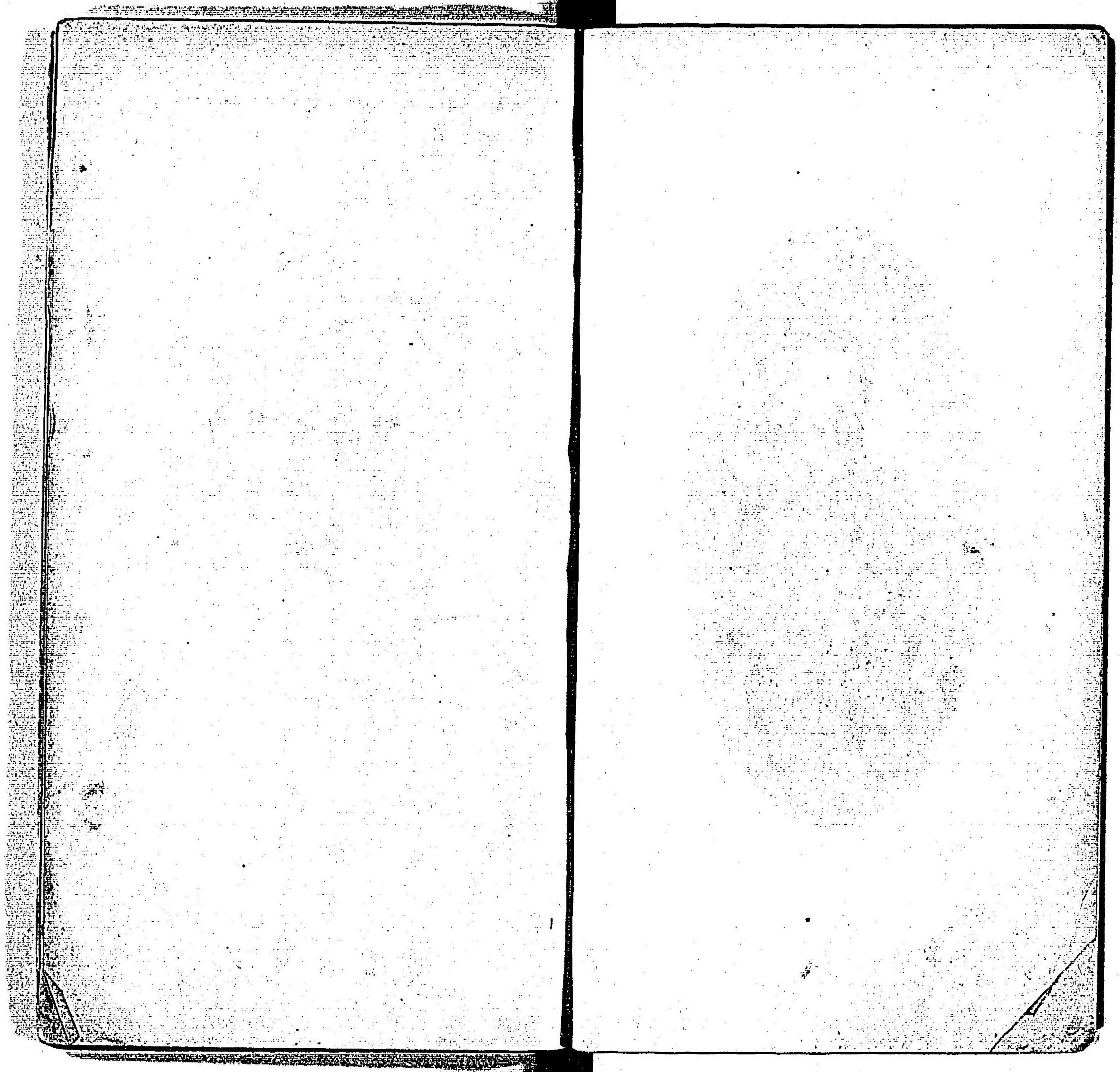
集

明治  
43.12.21  
内交

美妙集目次

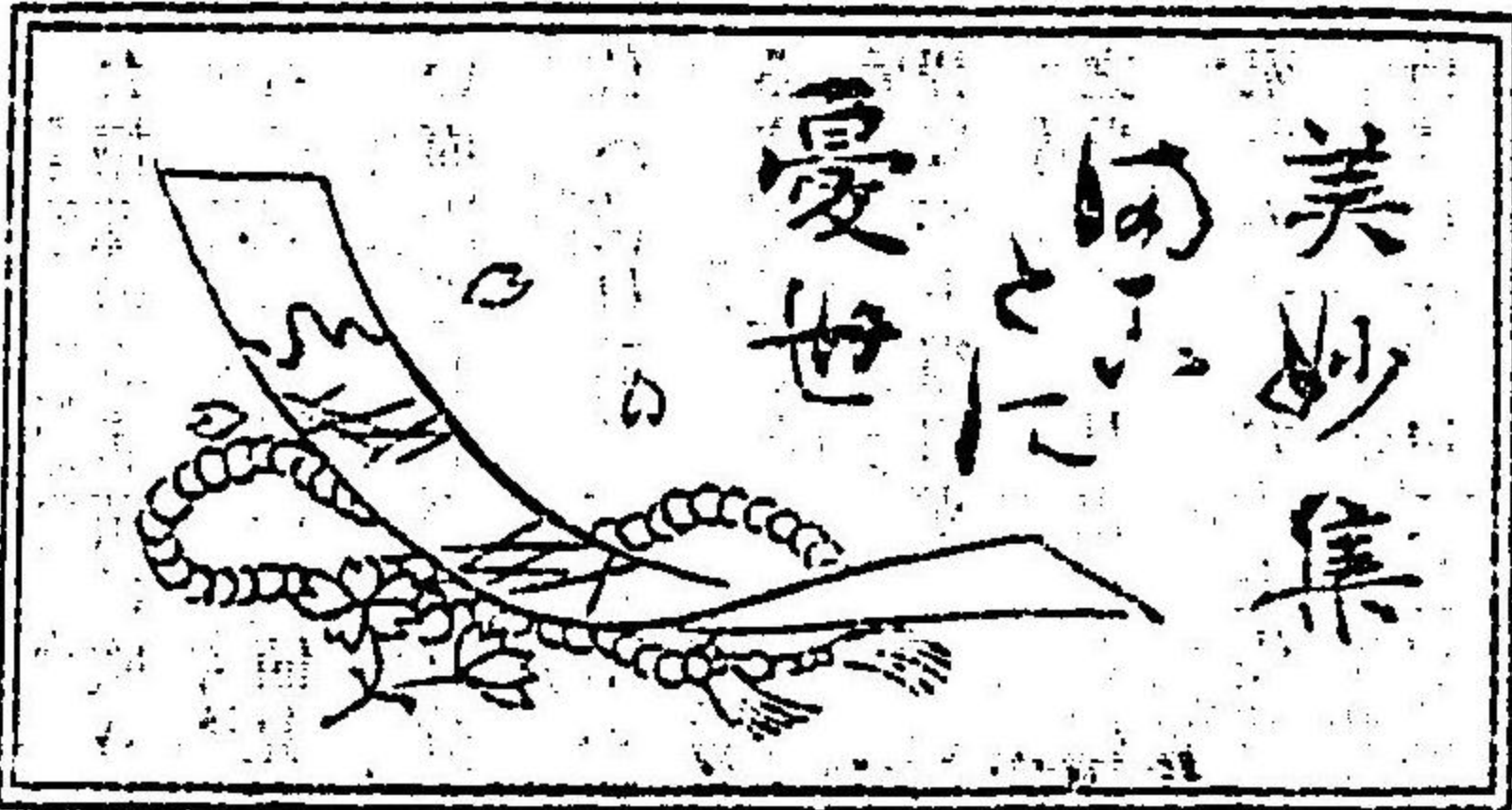
まことに憂世？	三
横澤城	九
まつのしたつゆ	101
丸二つ引新太平記	117
可憐狂	111
猿面冠者	115
嗚呼廣丙號	124
ばけぐりす	105
小宰相局	117
猿と駝鳥	111





美妙集

憂世



山田美妙著

第一 第一  
 「糾へる繩」とも言へば「憂き世」とも亦言ふ、どれが本當かと眞田の六文錢見  
 るやうに先生の前机に立ッて、思ひ迷ひの眉を寄せれば我より年上の半白が其  
 實は分からぬ顔付き。得て勝手おのれの境遇を自安とし、試金石とし、それに因  
 つてどうとも言ふ、思へば驛の無い物です。但し退いて考へれば幾分か下馬評も  
 入らなくは無し「憂き世」とは必死究迫の泥田に全身を埋没して泥より外に知り  
 ぬ言ひ分、併し「糾へる繩」は些し變はつて、同じ泥田には落ちたにしろ、千年古  
 の材木に巡りて引つかかりか沈み果てもせず、また足も抜き切れず、花と刺と  
 を一途に見て密殺を折るなら手を刺すぞと双方を觀じた言葉、もしも何かと撰む

まことに憂世

日には寧ろ前のを避けたいもの。くさくさすると顔をしかめて大息を、好い面の皮な、しよんぼりと侍座した精棟の妻香苗に吹き掛けた二人の男は大西吳之助といふ武士でした。年は三十八、刀痕か小鬘四分斗りが目に立つ勇猛の價值見せ顔に剃げ光つて、額には骨まで研り込んだ大疵も爛れつき顔立ちの割には味味の深い面體でした。其身分を言へば雲州尼子の浪入で、主家の廢滅に木から落ちた猿となりさすらへで此今の土佐へ流れ着き、長濱の片田舎に見すばらしい庵を結んで面白くも無い日を送つて居ました。ことし廿八に至るまで是ぞと言つて生命に熨斗をつけて進上する程の主君に逢はず、才氣は兎に角、正直は戦國に珍らしい程ながら辯口がわるいため登用されず、千慮の一失か、尼子一家の命を幅二尺の背に背負つて立つた山中鹿之助にさへ見出だされず、快々として居る内に主家は終に没落し、それを幸ひとして實は此土佐へも渡つて来たのでした。土佐其頃は亂麻と亂れてどれが全権を握るか分らなかつた物の、さすがに、毛錐は革袋にも掩はれず、中で長會我部が一等とは自から世の風聞にもありません。妻の香苗といふのは小武士の孤子で、その天地只一人の兄と言のは長會我部の端物で、一つはそれをも縁に遙々と志して来て、さて来て聞いて

駭きました、目ざした人は射死して跡には縁もゆかりも残らず、戦場で其血に肥えた草そののみが紀念とばかり。亂離の世の常、燦々には方らぬもの、香苗が流石にほろりと爲れば吳之助も拳の背にいくらか涙を味はせて、さてはたと又當惑しました。目射した長會我部に取つて入る手廻も絶えては土百姓に爲り下るゝり仕方無し、懷中が黄白に冷えるやうならば何にも爲る、それさへ叶はぬ事とて哀れ十人力と誇つた身が世途の轉變にはしほくとして、坐るに其邊飛まはる雀迄が染まれました。けれど腮、腮の乾る乾ぬは胸く間の事、どうにかと途方に暮た其矢先、うなだれて往來を歩いて居るところで、見れば自分の方へ向つて馳せて来る人の様子、何かと屹と目をすえる、其跡から引き繼いで追つて来た老爺が有つて、姿て見れば正に百姓、聞けば其呼び聲は「ぬす人」といふ様子、はたと力筋を腕に寄せて、賊と言はれた男を捕へてやれば、老爺は追ひ付いてそして涙をながして喜んで、自分の身分を打ち明けました。身分は長濱の漁夫、兼百姓、可なりに手廣くくらすのを知つてか、眞世間押しをつよい奴が忍び入つて包みにして置いた黄金を掠めて逃げたので、それで追ひ掛けて来たとの老爺の言葉、而も黄金はそっくり其儘蛙にも爲らず手に戻つて、美事

吳之助の器量は一段方もあがりませんでした。何が縁になるか分からず、これが吳之助の身の落ち着きを終に定め  
た際となり、身の上の薄命を聞くよりも老爺が獨り大車輪で田地を割いて之に與へ、若者などにも手傳はせ  
て、膝を容れる草履も結ばせ、料らず吳之助も其儘に長流住ひの身と爲る事が出来て、以來二、三に五年の間  
は一家たいく平和と言ふだけ、大浪も打たなければ大魚の獲物も無く、僅に近隣の若者に弓劍を指南する  
位で其日くと送つて居ました。

それ程ゆゑ草履といふのは實以て樹の蔭にやゝ優るといふ丈で、雁を宿した淵を刈つて手づから筵に織る  
ぐらゐなもの、時に凡夫の身とてさて愚痴臭く無い吳之助も折り／＼は溜め息して呟き出すことも有りまし  
た。よし一分にしる、一厘にしる、折りと名の付く折りが有る物ならば、それを階梯にして長曾我部の手の  
者と爲らうとは常に思はぬて無いもの、さて其折り、それが不思議に頬かふりして吳之助に向つては一顧  
の笑顔も見せず、見せぬと思へば猶見たく、こぢれて來れば胸のみ嘆いて、全く以て、眞實此世は憂き世と  
とづり出しました。但し要る香苗と言ふのは夫に比べては一段ばかり究厄には困しまぬ方、憂き世と思ふの

は見とこるによい、前に尼子から落ちて來て始めて兄の死を聞いた時は何さま憂き世と思つたもの、料ら  
ず老爺に助けられては此世が又いゝ世と爲つたやうなもの、今は又悪く爲つたも又後によく爲る日が有ると  
いふ兆かも知れぬとばかり、寒霜の跡を言ひ直したやうに慰めれば、さすが四十男がさて可愛らしい、如何  
にもさうだと點頭きも爲る——運を待つて見上げる上に牛僧や牡丹餅の落ちさうな釣棚も見當らぬとは！  
替らぬ愚痴がやうやく斂まつた處ろて吾等も臥床にをさまろうと輕口の香苗の言葉に今啼いた鳥もさすが笑  
つて、吳之助もやゝ身を起す、その途端忽然として耳を貫いたのは人の諸聲、戸外が俄にざわだちました。  
目を見張る、同時聞えるのは鯨波の聲！ また劍戟の噛み合ふ音！ 慌て、押取り刀に爲る良人に先立つて  
香苗は隙から戸外を見れば折よく月も冴え亘つて、あり／＼と見えしました。入り亂れた人数は十五六人、白  
鉢巻が十人ばかりで、具足打扮が五六人、一目にも夫と知れる、白鉢巻と具足方が火水と揉み合ふ處でし  
た。良人を制して一生懸命  
「亂軍！ 御出やるな！」

「た……た……たれぢや? 暗打か?」

鷹は眠つて、小鳥の羽音を聞き洩さず、そのために鍛え上げた鐵腕は劍戟の音に呻りました。月の節穴を専有する香苗の顔をもち放して、身をふるはせて外を眺めて、只見る間、尻端折る——これはと駭く香苗を睨めて、精一杯の小聲するどく、

「出世の小口ぢや。」

「何御爲やるツ?」

問ふ間も無く身をひるがへして脊戸の口、香苗は流石氣も揉める、

「御出やるか?」

「今は音へぬよ。隙が惜しい。」

同時脊戸口を蹴放して——あなやと香苗は空を掴む——はたくと大足踏み鳴らして柴垣を繞つて敵の中へ走りこんで大喝一聲、——

「おどれら、逆賊!」

言つた言葉は唯是ばかり、引き續いて出したのは岩も裂けるとの掛け聲ばかり。ふりかざした三尺六寸、大業物に月色を照らして白鉢巻を目掛けて手當り次第、五六合わたり合つたと見る間も無く、二人を即座に研り伏せました。意外のところから意外の助太刀、具足方も勢附く、さて白鉢巻の口惜しさ。

「何奴か、名のりも居らぬツ!」

白鉢巻も唯これだけ、殘兵を引ツくつて反動の勢ひこれも亦すさまじく四人總がよりて奥之助を中心に取り込めれば、それ味方を殺すなど具足方もそれへと集まる、亂麻亂糸がまた一層。さて仔細を知らず、出るにも出られず、空しく身もだへして隙からのぞく香苗のつらさ、悲しさ、胸ぐるしさ! 常は剽悍でも無

い良人、いづれ思慮は有らうと思ふ、それながらもし万——あの刃では身は膽! 弓矢八幡大菩薩! 今

この一刻の勝利のためには香苗の命も召し取つて——しッ! それ、夫は血で沁つた! 「やつたぞ」と掛け聲するどく白鉢巻の内一人が奔電と馳せ付いて奥之助の腰の番ひを——ふり下す刃の





瓜二つと速断ながら胸をすえた、それが外れず、あゝ有り難い。

飛び退つて會釋をする——相手は、しかし、さう然せず、殿と言ふ其人がそれではと差し止めました。

「申すも恥かしい程なれど、まことに吾々主従には二世ならぬ和主の厚恩かならず忘れて爲らうもの——」

るにても和主の御名は——見れば見も知らぬ人と見ゆるに——吾々は由縁の有る人てがな御ぢやるかの?」

「由縁全く無くもおぢやらぬ。これは大西呉之助とて雲州に居つたもので御ぢやつて……」

跡を引き續けて言はうとする、其口を中途で奪つて前紹介に出た男が會釋して割り込みました。

「しばらく——御待ち下され。御名唱りさへあればそれで最う重燃の至りておぢやる。夜陰と言ひ、如此な

處に斯うあるは如何であらうか再生の恩人の和君なればさして苦しうも御ぢやるまい、一先館まで來まして、

それより委しう御物語りを承はらうすると某は思ふ、方々は如何ておぢやる?」

仲間聞いた答へも待たず、主君は直に同意しました。

「其事、々々、それ可からう。大西刀禰とやらん、苦しうは御ぢやるまいか?」

道端の草も薄、砂も彈丸と心許せぬ亂世の常、この思案は素より至當何が苦しい處が有らう。ましてや出

世の小口も開き掛けた、こゝ見失へぬ好機會、今こそ折りが笑顔を見せた、それ何うして見失はうか! 只

しかし雲の事、女々しいては決して無いが、今斯う戦ひが終つてさへ常の訓へをよく守つて戸一枚を堰とし

てこゝへ現在出ても來ぬ、其哀れな、愛らしい胸、それに云々と一言の挨拶ぐらゐ言はないでは。それと明

かして許しを乞ひ、門口に立ち寄れば、まだ呼びもせぬ聲より先、さて苦勞辛氣に埋まつて待ち焦れても居

てくれたか、最早と思ふか、向ふからして力まかせ、戸を開いて

「御怪我は?」と只一言!

流石のせはしい夫の體、さし寄れば肩には鮮血、武士の妻とは言ひながら、扱女氣、ぎよつとも爲る……

「香苗! 長曾我部の殿ぢや、これ。はした無い體は見ぐるしい。」

聲をひそめて、

「殿の御感に與かつた。是から御館へ御伴して仔細を言上する處ぢや。」

聞いて香苗は涙もさしくむ、夫を見上げて歎息し、さて其良人の言ッた言葉は一句も落さず吞み込んで、嬉しさは小さな胸に中々包みも切れぬほど、それながら花の心、うなづいて、

「愛てたう御ぢやツた。なれど疵をば……」

「これッ！」と顔をぐツと睨めて、「疵なんど——あッ、女々しい！ 出世の小口が胸には落ちぬか？」身もだえをして、

「……これ、白湯一つ早う君へ——心付かぬか、う……うるたへッ！」

叱られてきつと思案、畏つて直立つ姿を後から見送れば、今までは目にも入らなかつた玉襟に腰の二刀

——良人の危急の工合によつては研て出る覺悟の記念！

湯を一同に一巡すゝめて、さてびざと計り尾に跟いて、其儘と言はれた儘失禮御免と服をも換へず、打ち連れて長曾我部の館の方へと足を向けてきて二三丁ばかり行けば忽焉として一つの不思議が呉之助の胸に響りました。長曾我部の館は在り、それで主従の向きは右、しばらくは我慢もする、また一二丁となつて

もう堪らず、紹介した武士の袖をひかへて問ひかけました。

「あなたが道の向きて御ぢやるか？」

但し相手は騒がぬ體、

「なか／＼。道は是て御ぢやる。」

ては左様かと争ひ難ねて、又跡に従ひました。従つて五六丁、いざ取う館と言ふ言葉に夜目ながら透して見れば、何さま目の前に一掃への城——さア不審は闇より濃くなる。

「長曾我部どの、御館は、無禮ながら、あれで御ぢやるか？」

たゞし相手は答へもせず、先きに立ツて門まで馳着き、何か一言二言言ふ間にぎり／＼と門は開きました。

此方へと磨かれていよく此方は迷ひました。現在々々自分吳之助は今日始めて土佐へ来たても無し、長曾我部の館も知る、が、この城は誰あらう、長曾我部の城どころか、長曾我部に取ツては一の敵、山倉左衛門と云ふものが久しく踏み座ツて居る城なのか——人、面妖至極！

重ねてまた、

「御城は、長曾我部どの御館が、これにて……して御ぢやるかッ」

「氣を許して思はず知らず門内へ入った處、見れば身の前後に許多の警固、無念！ あざむかれた！

「山倉どの、館で御ぢやるぞ」。

第二

「欺くとは、おのれ、奇怪な、人にも因らうに。生命——生命も危かつた厄難を救つて貰つたのを恩とも思はず——大斎生どうして呉れやう！」

「腹の中は蒸えくり返る、みりくくと刀の柄を碎けるばかり握りつめて——さて何て言葉がまとまるもの！ 武者ぶるひに雲へ動いて凄まじい目を見張りました。

無念、残念、疎忽、心外、どうしたら此鬱憤！……但し吾ながらわが目も憎い、さて何うしたこと、如何に何とて畏を欺いた月魄の其下で、人、馬鹿々々しい、長曾我部と見違へた！ 憶ひ出す、久しい前嘗て枯れ野を歩いた時其道で鷹狩の長曾我部を餘處ながら民家の蔭でかいまみた、夫、それ、その顔に生うつしな、それが案外、山倉とは！

くやしい。併し夢に夢を見る鹽梅、身て身が身て無いかのやう、冤に撲たれて邪念は燃えて思慮がほとんど纏まらぬ程、たゞ四方を睨めた儘千丈の黒松がここに古根を据ゑたかの體、身動きもせず、其目先きへ一足前に行き抜けた例の紹介した武士矢間小八郎が戻つて來ました。

「吳之助どの」。

まづ一言呼び掛けて、落ち付いて、畜生、微笑を含むか、打ち解けた口氣で側へ寄る、己れ、今一言！ 今一言ほざいて見ろ！ 今一言の工合に因つては寧ろその事の傷め次手、いゝ加減に齒も齧れた腰の秋水、折れるまでも鋸だ！

「相手はしかし腰をかゝめ、敬禮に於ては一分も透さず、さし寄つて氣の毒がほ、

まことに憂世

「真會我部と詐つて外ならぬ恩人を欺き申した無禮の所以詳に申さいては——無禮は唯それがしから宜しな  
に聞しめて下され。所以をしばらく聞こしめて」

この期になつて未練らしい、誰がなめく聞いて居やうか。怒氣紛々と毒をも吹いて、

「いはれとは……なごまた前に仰やられんだ。なぜそれがしを欺きやつた？」

「その事く、たゞし和君はわれくを何として御救ひやつた？」

ふたしび禮を施して、

「御腹立ちにさる事で、殿もいとう心ぐるしと仰せられて御ぢやる程——いかてく其子細聞し召した上御  
心が猶あき足らざば其時こそは如何にとも……」

馬鹿な事なといよく無念、

「おろかな事を仰せやるよ。それがしの中へ取り込めては如何にとも方々の心まかせぢや御ぢやらぬか？」  
小八郎も當惑して流石言葉も究して来た體、見る儘に屏列ぶ兵士も手に手に汗を握りました。奥之助に於

ても最う覺悟、あはや畜生、言葉も究して、それ今刃に手を掛けるか。掛けたら最期、仕方は無い、今日ま  
での命とあきらめる、花々しく思ひの儘に——畜生、非理の鈍刀が食ひ込めるこの身體と思ふか——熱氣に  
總身も呻り出す、鏢際を握りつめる。

さすが相手の小八郎も別段に悪意は無いと見え殺戮しやうとの氣色も無い、ところで双方が暫時は無言、  
つくぐと思案すれば扱又吳之助の身に取つても別の思案が湧かぬでも無し、よしや何うじやうが、もう早  
身は瀼の鼠、ここで死ぬのも山倉の面前で臉になるのも死ぬ段は双方一つ、その位なら逆もの事、因套に落  
ちたら肉をも啖へ、山倉の前で屠られて、間違つて運よくば欺かれた怨みの刀をその、その肉にも試みやう  
と決心が目先を換へれば、噪いだ膽も据わりました。虎穴に入らずんば虎子を得ず、獅子に逐はれば谷を  
も飛ぶ、あるひは機よくてこの城を取る事と爲るかも知れず、かまうものか、奥へ踏み込め！  
きはめて簡單に、そして甚だしく改まつて、

「いはれ承まはらうするにて候ふ」。

今降つた村雨にはか晴れ、小八郎も荒肝を散々に挫かれました。耳に知覚の無い顔付き、  
「御出でやるか、書院まで」。

くどい事と言ふ體で吳之助は思々しきからこしらへ出させた身體の反身、

「いづく迄もまいらうぞ！」

相手は、しかし落ち着いたもの、言ひ甲斐あつて満足する體、みづから先導として、先へ立つて、四邊の  
兵士に目くばせすれば、七八人の兵卒が同じくこれら飲み込んでか一禮をして従がひました。城中へ入つて  
二三町、右左りと路を迂回して、考へるところ離れの館と思はれる處へつれられてやがて書院にとほりまし  
た。

書院の大床の口まで来れば、禮服に改まつた七八人の武士が整列して出むかへました。さても思ふに優し  
て鄭重なと案外に「先吳之助も据ゑた肝ながらこづかれて、それでも流石それとも見せずつか」と進む目  
の前にまた前後三人ばかりの具足打扮があらはれました。晝よりも明るい銀燭に透かして其者をきつと眺め

れば、見忘れもせぬ其中には長會我部と前見遊へた山倉が立つて居ました。

すはやと轟く胸よりさきに山倉はまづ禮を爲しました。

「よう御出でやつた、恐悦々々。改めて御禮述べうとて御足を煩はした。いざ、あれへ」。

上座を指されて迷惑しました。さては野心も無かつたものか。と思ふだけ氣の毒さ。よし何にもしろ、禮  
は禮、匹夫が上座とは高過ぎる。迷悟ふたつの道ひ分け道で、今は挨拶も頗る妙、答禮をして辭退すれば、  
向ふはいよゝゝ勧めました。小八郎さへ口を容れて、

「殿の仰せて御ぢやる程に、大西刀禰辭退は却つて——殿もまゐるて御ぢやらうに、とう／＼あれへ御わた  
りやれ」。

しかし石か、金かの本性、何で吳之助が動くもの、——

「仰せまこと忝なうぢやる。御志しは拜領いたした。たゞし下耶の身で御ぢやる、上座は恐れ多うて——  
くどく仰せられても動かせぬぞ」。

怨むやうにしてさへ言はれて、由倉もさて力無く、それならばと上座に就いた前後只厘毛の禮儀だけ、それながら其厘毛が烈しく奥之助の胸中を強酩で揉んで仕舞ました。欺かれた一刻前の無念も是ていくらか消える、おのづと心も落ち付きました。

席が各々定まつて小八郎は列を出て殿に代り一伍一什、そも／＼始め長曾我部と作りを言つた仔細をねんごろに訊くのを開けば、何さま一應の理も有りました。

木にも草にも心の置ける世の中、何しろ暗雲に救はれて一度は心に訝りもし、さてそれからの照氣に因り、こゝは却つて長曾我部と言つた方がよささうとてそれから許はつたとの事でした。

素より此類の計略は戦國の常として珍らしくも無い、それながらどうして自分の意中相手を長曾我部と思つたと悟られたかは猶わからず、不審を凝らして詰り問へば、先方は得意の體でして。

「外の事でも御ぢやらぬが、恐れながらこゝの殿は御面立ちに於て仇敵の長曾我部に瓜二つと言はう斗り最よう肯て居らせられて、和君の救ひもさるからに其邊かと料りました」。

「違へたと御料りやツた?」

「されば只ならさうかと思ふても御ぢやらぬが吾々に所り掛けたのが長曾我部のものである故」。

意外千萬、やれ／＼不思議な。さては其敵として自分が現在切りなびかせた一群れの白鉢巻は長曾我部の手であつたか、長曾我部——かつて遙々心を寄せて尋ねて来た當の君、しかも身寄りがそのために一命をさへ捧げた當の家、意外といふも愚な話し、さて全身は汗にもなる。

小八郎は語を續ぎ、

「たゞし吾々が長曾我部と申したのも元より口のまゝで御ぢやツた。御身と君の答によつては又言ひあらたむる胸でもあつて、さて口の儘が外れも得せぬに、即ち肝をすまいた。われ／＼を御救ひやつた忝なきはこゝに何と言ふべうも御ぢやらぬ。したが、是は餘の事として承りたいものでおぢやるが、御身と君は何事かの因縁長曾我部にありしたため進んで救ひに御ぢやつたげな。吾々を御救ひやつた御恩の程も御ぢやるか、吾々も無禮はいたさぬ。無禮はいたさず、御望みならば此儘にも御かへし申すてもおぢやらう。したが一

應の頭末は承はりたい者で御ぢやる。

一句くが胸へこたへる、思へば由無い物敷寄した。長曾我部の味方と思へば、山倉方は此方に對して髪の毛ほども心を弛さぬ、そののみか仔細をさへ——問はれて今更の事ながら吾と吾身がにくくも爲る。畜生、何のために付いた目か? 嘸疎忽と笑はれる事、と思へば穴へも入りたし、列座の武士も此方を見詰めて、氣のせいか、冷笑するやう、無念が牙をかへつて耻辱が込上げる、生るか、死ぬかの氣持ちでした。

第三

生るか、死ぬかの氣持ちながら、思へば自分吳之助も腰に大刀の硬肉を造つて假りそめにも武士と言はれる一人、耻ぢを掻くは刀の手前闘ぢに遇つて死ぬよりも否、ましてもう此場合ひ、城ならば夕陽落城と言ふばかりの切處に當り、詐りを吐いて未練と言はれ、眞を掩つて卑怯と笑はれるは敵兵の土足に掛かるより無念な話し、何も何も時の運星、長曾我部と思つてメメたと喜んだ快樂も矢張り瞬間の夢と爲つて引つゞくは唯滿身の苦痛ばかりと諦めめてさへ仕舞へば何も苦で無い、どうとも爲れ、包まざる言はう。

肝と共に居長高に身を据ゑて、つまびらかに胸中を開きました。御覽のとほり既に小皺も目尻にしほり寄つて四十に最う手の届く身であり乍ら伯樂が無いか、駿馬が無いか、吾ひとり駿馬と相場を付けても、繋がれて板敷きを踏み鳴らす運に出遇はず、思々しさのあまりだゞく時機を吾から作る心で頼まれもせぬ喧嘩に立ち入り、一六勝負をやつて見たのも其實は身寄りの縁も有ることとして長曾我部に氣も有つたゆゑ、思ふ事はいすかの縁、逆茂木の雁木と廻轉つて今更何の思案も無いところ、殺すとも、活かすとも勝手にしてくれとばかり思ひ切つて述べました。中々に肝はすわる、自分ながら充分落着いた氣、凜然と言ひ放つつもりの下、さすが殺意が充分はらんで、知らぬ間表面にもあらはれました。言葉に艶は無いものゝ一氣骨はたしかに有る骨柄、ことには太刀を振り翳して白鉢巻を研りなびかせた其時の風采を思ひ出せば、元より山倉に於ても内心は一つ有つての事、落魄を極めて居ると聞いたのを好い機會とつけ入りました。もはや小八郎の口は待たれず、つくぐと聞いて嗟嘆する體、殿の山倉は膝を進めて吳之助を呼び掛けました。打ち付けては有る、唐突極まる、併しながら思つた事は言つて見て諦めやう、もしも今の隠倫に飽き、

些しは陣頭に千んて兵馬を叱つても見たいとの思召しが有ることならば——小屋に大人の腰は休すまるまいが——慰みに山倉の家の者と爲つて憂鬱を消しては何うかと思ひ切つて氣色を見て胸を殘らず打ち明けました。小身の身の悲しさ、長曾我部に及ばぬと見くびりわ爲れまいか、鷹はとまるにも枝をえらむ、何の備上など此方の望みを冷笑して受けはしまいか、何と言ふか、どう出るかと思ひ入るだけそもく打ち出した身が却つて打ち出された身よりも強面くて、同時列座の武士どもさへ咳一つ爲なくなりました。有とも無とも定めて答へる——其の答への工合に因つては——もし否とても言つたら最後、思へ、それを此世の名残り、思は有るが、武士の意氣地齒から外一旦出した申し條を所以無くさせては置かぬ。ことには天晴器獄の勇士、たゞ歸すのは眞實惜しい。また況して長曾我部へやるのは口惜しい。一刻、返答の一刻が生死の境！この大床に血を降らせるか、降らせぬかは今——今の間——よしんば鬼であらうが、神であらうが、身外に味方は無い釜の魚、おのれ胸に刻めなくつて！

覺悟した山倉の顔、つくつくと見上れば、扱吳之助の胸もどきつく、成る程返答の工合ひに因つては座を

立たせぬといふ決心か？

死、それが怖くは無い。熟思すれば狗死にが極めて口惜しい。思ふ存分切りなびかせても、料るところ、高は狗死に！

たゞし折り入つて襦袢を厚く頼み入る山倉の厚情それも考へものとした。

考へて見る、さて自分吳之助が長曾我部の家に對して、三世までの堅い縁をまだ繋いで有るても無し——思ひ迷ひもしました。主君に取るには長曾我部と會て風聞から思ひ付いた其むかしは昔として、今見れば珍らしくも山倉も亦士に下る器量の天晴有りさうな體、或ひは斷然思ひ切つてこゝへ仕へて見やうかとは流石備す考へてした。

躊躇して首低れる、答へを待つ山倉方は扱煮られるかの思ひでした。すはと言つたらと腕を撫つて列座の醫固は口を怒らせ、主君と吳之助とを等分に見る、風も呼吸を偷んで外も靜に、しかも夜更、戦馬も眠つて嘶かず、書院の中に物といふ物の音も全く死に果て、一方に射す片光りの落月の色さへ血染み、このとこ



る書院の廣間に充ち満ちた殺氣の朦朧。

考へれば世の中は誠に不如意で持ち切つた物、不如意とは兄弟分の案外がいつも付いて回る物、氣も扱や  
すまつたやうて休まらぬ、思へば毎まで纏つたとして事は最う同じものと呉之助も決心しました。どう爲るの  
も逃、仕方が無いと諦ちめて、特には薄々の酒も茶湯にまざる心も爲れば、一座たちまち席を這つて山倉の  
前に平伏しました。平伏した其姿、すはやと激動も座中に傳はる、言葉までは最う「呼吸、――  
」怒な仰言、身に過ぎた事では御ぢやるが。」

御ぢやるが——「が——その「が」の意味?  
さては己れ——この刃が鞘を脱げるも、もうく暫時の間かも知れぬ!  
御ぢやるがと言葉を切つて姑らくは躊躇もする體、飛れて再び又慇懃に禮をして、

「身に過ぎた仰言ではおぢやるが、尾羽打ちからした瘦せ武士却つて當りがたう御ぢやる。」  
落ち着いた只の二三言、さりながら書院全體數十の肝も胸もその二三言で美事くぢける、さても案じたよ  
り産むが安くて——思ひ設けたやうながら山倉も扱てまごつくばかり、もう見得もなにも無く、

「この方の手に御なりやる?」  
飄輕に首へば、また禮して、  
「當り難いとこそは思へ、願ふても無い事でおぢやるを。」

つまり談判の落着は大抵こゝらで付きました。山倉はさて嬉しく、嬉しさを包みかかれては男に似ぬまでの  
千言萬語、さすが能を尙んで儀式張らぬ世の中とて主従朋輩の打ち解け方が瞬く間の事でした。兎角する間  
に夜は明けかゝる、醫ひの金打に付け加へて腕の血も吸り合ふ、こゝに形ばかりの酒と下物とを取り揃へて  
三世の固めも成りました。

誓つたからには、最早一體、暫時の間と暇を貰つて、夜の曙際城を出て、あはれ一夜をさぞくく苦勞

て明かした妻の許を音信れてやる心持ちは吳之助が臍の緒切つて始めての味でした。地位を得ぬ昨日、其朝までは羨んだ村雀の友さへづりも千代々と聞き做されて、遠音に傳はる練兵の陣鉦もやがて吳之助其様に拍つて買ふぞと名唱りかけるやうにも聞える、今朝に限って朝日もよく昇る、鳥も飢ゑには啼かぬやう、伴に付けられた二人ばかりの雑兵に動もすれば應對の問禮をも鄭重に行はれて、何悲しい事は無いが、涙が、治生！ さしぐむやうな。

住み馴れた吾家の門口、さて久しく他郷に流寓して後慈母嚴父の棲息する故山に歸つた心もち、しかも晝間の鐘を着て——やれ、それ、香苗はどうして居るか？

つツと案内も無く戸を引き開ければ、「何者」と咎める聲、聞きも忘れぬ妻のそれ。

「香苗か？ 今かへつた。」

飛び出して良人を一目、きつと見ただけが關の山、我知らずへつたりと踏まつて——無念、うれしさに口もわななく！

「お……事無う……」

はらくと湧く涙、武士の妻に似氣無いと笑つては下さるな、眞身眞實、なに此なみだを更々見せたい氣でも無い。たゞし、昨夜の今朝、顔を見れば思ひ出す、——

「御疵は？」

「疵はよし、まづ安心させるだけが中よし、

「これ、香苗！ 吳之助は世に出たよ。」

きつと見上げる妻を見つめて、

「世に出たよ、思ひのまゝに。奉公の身となれた。」

たゞし痲痺に水、妻には分からぬ、鈍！ それ程でも無かつたにと我知らず急ぎ立ちもする、——

「昨夜たすけたのは山倉の殿であつて、それをたよりに世へは出た、山倉の手のものとなつた。」  
常の口重が常に似ぬ快辯に言葉を跳ね飛ばして弾力の心いさみは色にも見える、何か様子は分からぬもの

「香苗もさて其分からぬ嬉しさに胸もとどろく。良人は如何にも得意な體、子路は親を養ふため藜藿の實を食して碌を擇ばず仕へたと言ふ、それと是と場合ひは多少ことなる物の世途數年の荒浪に揉まれた身は碓礮の磯でも渴望しました。詳に昨夜來の顔末を其やさしい人の耳に傳へて、涙含む相手の實意にいと物語りに張りも加はる、付き秘無く反り身になつて、

「香苗、世の中は回るものぢや、嗚呼！」

第四

香苗もいそ／＼として耻かしい素湯では有るが心ばかりと待ち合せの雑兵にさへ酌んで出して勞ふ其下、或は立つたり、また座つたり、却つて具足打扮で登城した方がいゝといふ良人の言葉に逆らはず、具足櫃を取り出して來るにさへ俄にいつもより力も出たやう、譯も無く持てました。武士は零落の身と爲つても必ず具足金をば貯へて萬一の用に備へるのが世の慣ひとて、具足櫃にも一領の具足の外、蓋を開けば直目に付く白紙の一包み、それ見る胸、それも亦奇妙でした。何と言つていゝか分からず、思ひ出すのは毎年の虫干

しに其具足を日に曝して、見ればさて嗚呼此具足を終に用ゐずに済む事かと其都度不満の口惜涙を緘の糸にそしぎ掛けた其日、その時。がさつかせて夫は着る——ても惚れ／＼する天晴れ武者ぶり！ 右から眺め、左から見、前へまはり、後へ立ち、まだも辛苦粒々の經營慘憺、うれし涙の玉を繰る目、見られるは恥かしもの、さてたまらず、今泣いた目を我知らず大笑にまた絞り無くす其埒無さ。結んでやる忍の緒がまた堅くて手を離せばでんぐり返つて無手々々と振り戻る、それら其詰らぬ物までが扱をかしくも爲るかのやうで、笑ひこければ相手もたまらず、つね苦虫を食ひ潰す良人までが今日に限つてとろけました。それでは是から城へ行くから跡の始末をよく付ける、いづれ其内には城からも沙汰が有るであろうからと吳之助は似無無いばかり細々と言葉を残し、いざと出掛かつた其途端聞けば戶外の方に當つて人聲が殖えました。おやと心をつける間も無く、門口に立つて音なふ聲、香苗が出て應對しました。

應對して聞けば、何さま／＼良人が心をひるがへしたのも所以の有る事、さても懇ろな山倉様！ 立ち戻つて香苗が取り次ぐ言葉によれば、あまりに手薄な伴のものゆゑ別に武者二十人差し添へたゆゑ、決してくまことに憂世?

御辭退無く、それを引き連れて城に来てくれとの趣きで、而も心付けて乗馬をさへ一頭率かせたとの事でした。

無論かたじけ無いと拜謝する。この上時刻の移るのには却つて上へ對しての恐れと思へば、いと城へも急ぐ氣になり、暇を香苗に告げたまふ意氣揚々と門へ出れば、其處には馬をも据ゑてあつて、而も奥州種の逸物とて乗るからが氣もはづむ、こゝ賊に幾年ぶりて手綱をさげく心うれしさ、ことには敬し敬される快さ！ゆる／＼と月外へ打たせて出れば顔にあたる山おろしも冷つく計に涼しくて！眞實これが羽化登仙の二三丁ばかり行つた處は極めて込んだ杉林で、何心なく其處へかゝると、忽然として路傍から三々五々連れ立つて雑兵がさまより出ました。

身の側の雑兵を見返つて、あれも味方かと尋ねれば左様であると答へました。凄まじく付く警衛と不審しながら夫れとも言はず其儘にして打たせて行つた、やゝ其林の果に掛つた、追ひ分け道、右へ行く事と思ひの外、先へ立つた雑兵が譯も無く左へ曲る體、不審はこゝて混みました。

「道がちがふ」と一聲叫ぶ、それを誰も耳にも入れぬ、同時後の方にあたつて何やらん騒ぐ様子、これはと奥之助もふりむく途端びたりと其騒ぎは絶えました。

「何ごとぢや。それに道が違ふぢや、これ」。

注意をするか爲ぬ間、意外、前後の警固の中に聞えたのは號令の聲でした。同時士卒の足はとまる——訝

「卒隊ではおぢやるが大西どの、吾々は山倉の手では御ぢやらぬ。」

「何を！ 山倉の手では無い？」

「長曾我部の手で御ぢやるが……」

見る／＼面色の變はる奥之助、此方は一歩さがつて禮して

「仔細われ／＼は知りませぬが、館よりの御証で御ぢやる。欺き申すは異な事ながら苦肉の計で御ぢやる。」

首尾のわからぬ音ひ草に呉之助も急ぎ立ちました。

「何言はれるか、心得られぬよ。方々は長曾我部か？」

「なか／＼」。

「今朝それがしに付いて来た山倉の二人のものと方々は敵でかのか？」

「なか／＼。館の御詮をそのまゝに今朝まるつて二人をも欺きました」。

「欺いて今こゝに——何れに？」

「見まはす顔な冷笑ふやうに相手の雑兵はじつと見上げて、

「今の間、撃ち取りました」。

雑兵は撃ち取られた？ 身の周囲が悉く敵？ ても扱も餘りな欺されやうと呉の助は夢の中を全く迎る

やうでした。離離！ あゝにつくい世！ 昨日長曾我部と思へば山倉で、今日山倉と思へば長曾我部——

人、意地わるい、あんまりな。且は呆れて言葉も揃はず、逆上して目も血走つて、而も盤石のやうに身動

きもせぬ體、しけ／＼と眺めて雑兵も流石薄氣味わるくも爲つたか、些ばかり後へ下りました。いくらかお  
ぢるといふ體で、

「斯う爲れば罷御ぢやらぬ。とう／＼館へ御出やれ。御繩まるらするは知れたれど、無禮は爲などの館の御  
駈で斯うたい守りまゐらせる。」

半ば聞いたゞけて扱堪らず、目を見張つて、

「だまれ、敵蚊！」

すはやと色めく雑兵をさも憎さうに睨み付け、

「それを己れに聞かうかい。館へ行くとも行かぬ共指圖を己に聞く身で無いわ！」

武者聲鋭く言ひ放つて、いまは覺悟を定めました。もう早大西呉之助は浮萍の浪人でも無い、しかも血さ

へも吸り合つて山倉と主従三世の縁を固めた、もはや是非無い、長曾我部は矢張り敵。敵に圍まれて、最早

主君の山倉の名は耻かしめられぬ。どう爲るも逃、仕方が無い、とても逆も無くなす命、命かぎり、魂かき

り、三十年來幾つた腕ぶしの研えた處を思ひ入れ見せてそれを名残りに……

さすが、思へば、如何にも長曾我部は敏捷きはまる。よく知つて欺いた。それには殆んど舌も捲く、其舌を捲くだけに憎らしさ、口惜しさ、思々しきは胸先きを衝いて込み上げる。坊主と袈裟、につくい、雑兵！雑言はたく。其舌の根を——見る手並を！

手綱をきり／＼引きしほり、一跳ね馬に飛びを入れていざ蹴てやれと用意する、その手元を目敏く認めてあわやと言ふ間一方は飛び退きました、すはこそ荒れ出した、脱落るなと目に餘る敵衆が忽ちにとよめき出す、心得たと拳を固めて吳之助は馬を打つ、それと而も同時でしたさて重ね重ねの不思議、雑兵はすぐ逃げ出す。

「逃げるとな、卑怯なものども」

たゞ一聲思はず叫んで、さすが又氣もやし抜けた、其目先へ突然と横合ひからあらはれた騎馬の體、おのれ、やれ、天晴武者ぶり卯花蹴しとは究竟な。睥をさだめて信と見る、それより先に向ふから

「はやまられたな、大西どの。」

聲と同時に人も知れた、兜は目深に被つたものゝ、間違ひも無い小八郎、山倉方の矢間でした。「矢間どののか？」

「小八郎」

前後を見返れば敵兵は逸くも逃げて一人も残らず、はるか向ふに集まって此方を見逃める體、吳之助もや氣は落ち着く。

「矢間どの、御見なされたか、それがしは今……今……今……無念、長曾我部の奴原に……」

「心得ました、頭末のこらす。その事につき小八郎、それがしが首を捧げて今和君の御胸を承まはりに差し出さるつた。」

「而妖な。その事のまに？ 和君が、いかに、御首を？」

「されば今の敵兵はそれがしの手段で御ぢやツた。打ち付け極まつた事ながら誠は某の眼くらく、猶も和君を試さうとて今の如くに計らひました。」

「さては今度も亦虚か? 人、呆きれもされぬ。腹も立つ。」

「金打までしたそれがしな、血まで吸つたそれがしな? ...」いつか眼を睨らして。

「御怒りは道理で御ぢやる。それ故にこそ某が首を捧げて明かすて御ぢやる。殿は何とも仰せられず御ぢやツたなれど、さて某がひとり胸に——この身は神でも御ぢやられれば一目に人の胸は知れず、よし兎に角金打しても盟ひを破るが有る世の中とて由無い事まで疑ひました。」

「思ひ切つて言ふ有り樹、一應は扱道理も有る、鬼神を生やさせた荒者の眼中にいつか催ほす至情の涙、それ見れば流石呉之助の火と燃えた怒りもや、靜まる、さて左様いふ忠義のためかと次第に感ずる處も有る。いよく、身體は五里霧中に彷徨つて居るかのやう。」

「さては長曾我部の風させて某の心中を御試しやつた事でおぢやるか?」

聞けば相手は氣の毒さう、

「全く以てさうて御ぢやる。申すは甚だ無禮ながら今が今に無心腹も無う知れまいた。この上げ某が行ひました無禮のほど何とでもいたしなされい。さらしく苦しう思ひませぬ。」

「さては實情の奥の奥、あざむかれたのは口惜しいが、事が分かれれば誰が何うして! 淡泊な胸が撲ちなやされて、あゝ忠義、感心した! 腹の中でひとり言、

「いゝ武士を持った殿ぢや。」

### 第五

金打までした者を試すとは稍水臭いと思ふもの、それも忠義の一途と見直し、今の前まで敵と見た雑兵に譲られて城へ還れば歡呼の聲で迎へられました。いよくそこで改まつて主君山倉左衛門との對面も濟み、一方の細頭を拜命して騎馬二百人までは預る身と爲りました。素性もほとほと知れぬ斗りの浪人に對しては心の宏い取り扱ひと呉之助の感佩も斜て無く、城中の空館を所有として始めて其處へ妻の香苗をさへ迎へま

まことに憂世?

した。これが一先腰が休まる、禍福はこの世のまはり持ちとは備々夫婦も思ひ知つて「是からは究命しても今迄の事を決して忘れず、悲しみも爲す、愚痴も言ふまい」と扱まじくとして良人が言ふ、笑つて香苗が「當にはならぬ、またさうなれば自分ひとりも貧乏神の申し子でも有るやうにぶつくさ言ひ出す事であらう」と年にも似ず嬉しさいましの元談口、氣が勇めば良人も笑ふ、妻も亦た吹き出す、いゝ若夫婦に立ち返つて飯事の狂言でも爲るやうてした。

さて此山倉といふ一家の素性をあらまし摘んで書き記せば、主君の左衛門といふは今年まだ三十には爲らぬ身分で、才氣のある人物でした。生まれは然したる蛆虫でも無く、元弘の楠木の末のもので、親は名のみの郷士とやら、累代紀伊の浦邊で衰れに世を送つて居ました。左衛門は即ち其子で、武術に長けては居ぬもの、不思議に親も舌を捲く奇才が有り、十四歳の時運わるく時疫に両親を殺されたそれを門田の名残とし、一人の妹を心づよくも振り捨て、便船を以て土佐へわたり、長曾我部元親の親、其頃は當主人の覺世の手の雑兵と爲り、いつの間にか身を抜いて飄然と反旗を覺世に向つて押し立て、年の若いに似ぬ手の内、四十五

十の髯白の獅子狼をさへ旗下に付け手際よくも城さへ構へて、天晴一方の大將と爲りました。それ迄の經歷の素早さ、偶然に見れば妖覺の業とも言ひたいやう、楠木の末葉といふ處を名に言ひ立て、恩と威とを巧みに行ひ、今この呉之助を手を邀へた頃は大分土地をも切り取つて城三ヶ處ばかり、地所二十里ばかりを所有として居ました。

配下に對する山倉の慣用手段は身を謙ることでした。才に克つ人は得て人に親しまれぬもの、山倉は其才をむしろ配下に向つては弄せぬ、それが人望をつなぐ基でした。つまりは手の者もそれに慣れて、權變の奥の權變、むしろ權變とは見えぬ處を特色として用ゐました。最初呉之助に對して幾度も許りを行つたのも其故で、また呉之助に對する山倉一家の待遇が鄭重であつたのも同じく是でした。

其後もそれ故山倉は呉之助をよく取り扱ふ、而も主君のみならず、一家中の古參のものまで百年も馴染んだやうな親しみ方に呉之助夫婦の者も臍の緒切つてこれが始めて、始めての極樂に座りました。おはれ今までこそは埋もれて伯樂に逢はなかつた身が今は折りを得て飽食煖衣さへする上は此命は最う主君のもの、や



がて進上する時に誰がそれを惜むもの、熨斗をも付けるとの意氣込みは自然夫婦にも催しました。誠實を表面に粧って其實は権謀策畧を頼みとする事、そも／＼それは小を以て大に對する時の必要、と思ひ做せば呉之助も肌合ひはいくらか違ふもの、疎みもせず、同じくいくらか其渦に巻き込まれやうとの氣に爲つて、つくづく又自分ながら境遇に心の移されるのを内心には感じました。主君には昔草といふ奥方が有り、四歳になる妙姫といふ姫も有り、その下に江守といふ當歳の若君も有る、それら姫や若君が成長した。曉には武術指南は吳之助其許に頼むなど末の事までしんみりとして物語る折り／＼の山倉の腕上手はいつも退出してから後家へ歸つて夫婦目さへうるほすばかりでした。日々の吳之助の任事は一寸出仕して、其上は原へ出て練兵を觀るだけで、其外には折りも無く、奉公以來忽ちの内に二年の星霜は送つても他と矛を交へた事も無く、脾肉が空しく増大して腕ばかりが呻りました。勿論山倉に取つて第一の敵は長曾我部、それと山倉の支城との間には絶えず戦争も無くはない、その度毎乞はれば根城から救ひを出すぐらゐな物、新たに形つた城だけに根城の固めの肝要なそれらの件に迫られて實吳之助も小八郎も門外不出と爲つたのでした。

それで二年の星霜が安らかに譯も無く過ぎ去つたもの、其安らかといふ處は戦ひの無いと云ふ丈でした。山倉に取つては非常な厄年、悪病にはやられて武士を二割方も殺して、百姓も欠けて物の價も昂騰した矢先も矢先、長曾我部は俄に大量して支城の一つに掛つたとの風聞、而も精兵との趣きで城からの援兵請求は火の付いたやう、手勢百人ばかりを血の出るやうな中から算段して送つてやつた其甲斐は全く無く敵は拔目爲く要撃して食ひ止めて壓殺にして仕舞ひました。

援兵が壓殺されたとの便りは支城が落ちたとの報導と一所に來ました。それ程とも實は思ひ付かなかつた意外の珍事、山倉の一城内は熱湯と沸え立ちました。三ヶ所の支城が一つ落されて、残る二つの様子を探らせれば此方は寂然として居るもの、潜かに敵を待つ覺悟は整つて居るとのこと、其方はまづ一安心と思ふもの、差し迫つて本城の面々がいづれも胸をついたといふは軍勢の少ない事でした。點檢すれば、情無いこと、精兵といふのは千に足らず、驅り集め連を數にすれば三千には上るもの、何やらん長曾我部の物始めの手際よさに聞き怯ぢして臆病風も手傳ふ體、齒痒くばかり思ふだけ思慮は迷ふだけで纏まりが容易で無く、

時を撰まず始める軍議の席はいつも喧嘩で持ち切りでした。

場合ひは面白く無いながら物に以て吳之助には此度の戦報が天晴面白い眠氣さまし腕試しの好機會と思はれました。欠かさず軍議に出席して深く役争ひは爲ぬもの、物々と發動する勇氣は面色にも現れて、而も亦山倉一家の者いづれも幾許か之に向つて心強くも思ふところ、吳之助だけの役分は南門の固めとして兎に角は決まりました。が決つたのはそれだけでした。やがては敵も押し寄せるといふ其盜賊を捕へた矢先きが柳を縛ふやうな大評定、敵を邀へて撃てともいふ引寄せて防げともいふ果はぐづぐづすれば激論が沸騰して味方同士が鎗を削り掛けぬいきほひ、唯埒も無く混雜した、それも何も意外の戦報に入れられたばかりの邪覽で、味方の手薄といふのが彼是躊躇逡巡ことにより大事も誤らせる賦評定の原でした。兵は兎角戒めて油断させぬだけ、其夜も其儘で終りました。

評定も終つて兎に角私宅へ下つて来た吳之助の姿を見れば香苗は一心問ひ掛けました、軍議の始末は何う爲つたと。戦國の世の中に而も優柔な女性が、噂を外事に容れる事、後から見れば案外な姿ながらまこと

實際その世に爲つて見ればむしろそれ程の事は無かつたもの、淀君や大政所が同じく夫等の手本でした。それに又香苗と吳之助との交情は征途幾十年の苦樂を併にしたけ有つて融膠漆の中で、痕跡のたゞれついた顔、それは鬼も恐れる斗りの凄まじながら夫婦團圓の席のみは小兒も懐くといふ程、つまりは主の上、夫の上と香苗が待ち焦れて聞き正すのも胸に充ちた、至誠のあまりでした。聞かれては脱き示すのも怒るで、自分だけは南門の固めを言ひつかつた趣きを大方詳に説き聞かせて、其外は評定のまともらぬの眉をひそめて照りました。

「あゝては大事を誤まるよ。この期に及んで似非評定ほど忌々しい物は無いに、いづれも由無く争ふのみぢや。己などの思ふには己の手に一手をもらつて花々しう討つて出て、来る途で一あふり肝挫いてやるが、いと思ふが、いづれも手勢の少きに心ばかり小さう爲つて閉ぢ籠るより外をば知らない。殿はいつもの御胸に似ず、思ひ迷ふてあられるぢや。どう爲るもさて時の運で、勝つ時は勝つものぢやうよ。己も始めはいくらか言ふたが、口重ゆゑ詮は無い。兎に角に南門をあづけられたが身の徳ぢや。天晴みんごと防ぎ遂せて

「香苗、これが腕だめしぢや。」

身を入り込ませて物語る言葉の間、如何にも勇氣は充ちたるものゝ、隠然として内部には不如意の色を合  
んで居ました。さとも香苗はそれと察する、さア千思萬感に婦人の身とて湧き立ちました。口こそ言は  
れ、死なば決した夫の體、無論武家として唯呼吸が絶える位な死ぬといふ事、それ恐れるては無いものゝ餘  
波をしく無くは無い、つまりは始終を聞き訖つてゑぐられるやうな胸にも爲る、しばらくは默然となりまし  
た。

「不祥な事申すは無禮ながら勝ち軍でおぢらうか。」

千思萬感、實はそれ残らずが封じ込められて凝つた言葉。女々しくは悪びれぬから勝敗の末あらかじめ知  
らせてくれると云はぬばかりにして夫を見れば、果たして正に察しのとほり、しばらくは答へに當惑しまし  
た。程經つて付き穂無く、

「勝ち軍とは望むのぢや。なれど勝たれば何とも言へぬよ。」

意味は知れた哀れな一言、其哀れなだけ、覺悟した夫の涼々しさも一段の品をも上げて、尊くもあり、ま  
た情無くも――

「天晴防ぎとめて見せるよ。何の死ぬ氣ならば大事あるまい。己はいさしうて腕がうなる！」  
晴天の霹靂突然から／＼と大笑して、更に香苗を見詰め、

「香苗、泣くか、なぜうさうぢや、うれし涙で、嗚！」

### 第六

安居の樂しみは久しく續かず、戦報は日に日に心細さを傳へるばかり、長曾我部家では覺世に代つて其子  
元親が梟雄の資をこゝに現はし、東西を蹂躪する勢ひは破竹と形容した昔の言葉その儘、山倉の城中はたゞ  
空怯えに怯えました。さすが綱りの付かなかつた軍略も濫々とまとまり、味方は少數ゆゑ防守が一の手段と  
爲りました。支城の中の残る二つから援兵を求めるのは早馬で日に幾度か知れず、貸せぬと斷つて居る内に  
無残や二つながら落ちました、部將はいづれも敵に降服して。

かり爲る事とは素より知つた、いたづらに敵を待ち、手を束ねて敵勢を加へる愚物かどこの國に有るものかと今更軍議に負けた連中からの不平の聲は城中にひびき直る。いよ／＼人心が沮みました。南門を引き受けたもの、爲す事も無く、徒らに敗報を聞いて居る呉之助の身のくるしき、但し防守の論を主張して一歩も譲らぬ矢間小八郎の身の憎さ！ 畜生、大事をあやまつ。物語りに聞く白川御殿の公家評定の當日も思ひ合はされる。たまらなく爲つて切かに小八郎に膝を突き付けて跪いて見る氣になりました。夜深く爲つて微行して城中の様子を探れば、一般が自分呉之助に向つても陰口を言ふ「呉之助がわるい、殿の御感ふかい小八郎を恐れるげな、小八郎と争はず聖人めかいて口を噤み居る。居ながら負けるを念とも爲をらぬ。山倉に人は多いが、權勢をさ／＼小八郎と張り合へるは只々呉之助なるべいに、推舉されたが忝ないか、眞珠の木兎と澄まし居る」。これを聞けば借聞き敗、一應の理が有るだけ小八郎に言ふ氣に爲る、憤然として或る夜ひそかに身を擡いて面會を求めました。

些し折りが無くて兩三日は打ち絶えて顔を見合はせなかつた處今て面會に出た相手を見れば、心勞に瘦せた顔が見違へるばかり骨立つて短髪に横から照られて、むしろ瘦くも見えしました。席が定まつて左右を過ぎ、膝を進めてさし寄れば、思ひかれたか、向ふから先一言が出て來ました。

「大西殿、御たがひに心無いことで御ぢやる。はかない運に爲つたことぢや」。

當惑の様子で言ふだけが扱面白くも無い、何の女々しい事を、はかない運とは！ それだからこそ命も死すと音はぬ斗の顔付てした。

「わるい便りばかりで御ぢやるの？ この末何うと思しめす？」

詰り掛ければ唯默然、首を低れて一言も無い、人！ 國の一大事と言ふ場合ひに。稍急ぎ込んで目を怒らし、

「矢間どの、今宵それがしが参つたのも御胸の隈無い筋を、無禮ながら、承はらうためて御ぢやるよ。かう手を束ねてやみ／＼と敵に勢を付け行くが好き謀とおぼしめすか？」

まことと憂世

かう爲る事とは素より知つた、いたづらに敵を待ち、手を束ねて敵勢を加へる愚物がどこの國に有るものかと今更軍議に負けた連中からの不平の聲は城中にひびき直る。いよ／＼人心が沮みました。南門を引き受けたものゝ爲す事も無く、徒らに敗報を聞いて居る吳之助の身のくるしき、但し防守の論を主張して一歩も譲らぬ矢間小八郎の身の憎さ！ 畜生、大事をあやまつ。物語りに聞く白川御殿の公家評定の當日も思ひ合はされる。たまらなく爲つて傍かに小八郎に膝を突き付けて既いて見る氣になりました。夜深く爲つて微行して城中の様子を探れば、一般が自分吳之助に向つても隘口を音ふ「吳之助がわるい、殿の御感ふかい小八郎を恐れるげな、小八郎と争はず聖人めかいて口を噤み居る。居ながら負けるを念とも爲をらぬ。山倉に人は多いが、權勢をさく小八郎と張り合へるは只々吳之助なるべいに、推舉されたが忝ないか、眞珠の木兎と澄まし居る」これを聞けば借聞き腹、一應の理が有るだけ小八郎に音ふ氣に爲る、憤然として或る夜ひそかに身を擡いて面會を求めました。

些し折りが無くて兩三日は打ち絶えて顔を見合はせなかつた處今て面會に出た相手を見れば、心勞に瘦せ

た顔が見違へるばかり骨立つて短髪に横から照られて、むしろ凄くも見えました。席が定まつて左右を適さけ、膝を進めてさし寄れば、思ひかれたか、向ふから先一言が出て來ました。

「大西殿、御たがひに心無いことと御ぢやる。はかない運に爲つたことぢや」。

常惑の様子で音ふだけが扱面白くも無い、何の女々しい事を、はかない運とは！ それだからこそ命も死すと音はぬ斗の顔付でした。

「わるい便りばかりで御ぢやるの？ この末何うと思しめす？」

詰り掛ければ唯黙然、首を低れて一言も無い、人！ 國の一大事と言ふ場合ひに。稍急ぎ込んで目を怒らし、

「矢間どの、今宵それがしが參つたのも御胸の隈無い筋を、無禮ながら、承はらうためて御ぢやるよ。かう手を束ねてやみ／＼と敵に勢を付け行くが好き謀とおぼしめすか？」

まことに憂世

「まだ和主までさう仰せ……」

たまらず、

「和主までもと仰せやるが、是よりは日々／＼に味方の土地も狭うなり行く——その上どう御爲やると思ふ眠る時では御ぢやるまいッ」

「おんでも無い事、だれが眠らう。和主迄がそれがしの策略を女々しいやうに思し召すか？」

凜然として逆捻ぢに賭られて、むしろ願ッたと言ふ有り様、

「無禮ながら女々しいとそれがしも思ふで御ぢやる。たいこの城一つ控へて敵を待つ、これ程はかない事は御ぢやらぬ」。

「甚無いと仰せやるが、味方は小勢で御ぢやらぬか？」

「それは某も知つて、御ぢやる。したが、長曾我部も白痴では御ぢやらぬ。戦をひかへて楯籠つてのみあれば小勢とは事も無く察すて御ぢやらう。一あふり切つて出ていづく／＼か今一つ足だまりを拵らへるが一つ

は敵の察しを避け、又一つは呼び合ふて支へ行く手段で御ぢやらう。それも多くの人は入らず、餘人が好ま

ずば某でも……二百騎ばかり御授けあらば……」

半ば聞いたゞけて妨げました。

「二百騎？ 二百騎？」

驚いた體で二三回つゞけ、「すぐり立てたのをそれほど仰せらるゝ？」

「おんでも無い事で御ぢやる。死地に入る者で無うては。二百騎が過分ならば百五十騎でも大事御ぢやらぬおめ／＼と敵を寄せ付けて最期の軍をするばかりが軍の道では御ぢやるまい」。

「そればもとよりのなれど其の百五十騎で、和主は何處へ御わたりやる？ 御見立てやつたところが御ぢやるか？」

「昨日落ちた城で御ぢやる、そこへまゐる心で御ぢやる。何。一城の小敵を——美事蹴散らして溜まりに溜

つた鬱憤晴らいてくれうづものを? 其の外の謀計は過言ながら、某の胸に御ぢやる。口を酸くした、それにも拘はらず小八郎は猶依然として更に動かず、暫らくは苦り切つたまゝ口を閉ぢて俯向いて居て、やがて幾度も返事を催促されて見れば、しッ? 目には涙、顫動を帯びた聲でたゞ一言、

「小八郎は心得ませぬ?」

岸角にしがみ付き、食ひ付いて一寸も揺がぬといふのが松の操とは言ふものゝ、それも時と場合に因る、理も非も無く根をさだめて變通を知らぬのが帷幕の臣の能でも有るまい。道理を分けて是れほどに言ふそれがまだ分からぬか、年にも似ぬ奴。辯に得ぬだけ吳之助の心中は焼け火箸で炙ぐられる鹽梅、小八郎の胸中も扱何と無く怪しまれても來ました。まさか馬鹿でも無い、それで分からぬ所以は無さう、それで自説を頑に守るこれには仔細は無いかと思ふ、すると、兎に角疑ひも爲る、どうしても只ては無い、此奴大野心が有るては無いか、敵にいつか内應してその用意をするのでは無いか。疑ひ出した處でそのために産み出した推察は夫から原因と爲つて疑念の枝に葉をも茂らせる、やがて小八郎に向ける目はありくと憎みの色

を合んで來ました。

邪推は不思議に獨立せぬ物、一方に邪推をふくめば必らず一方にも含むもの、吳之助と同じ念は小八郎にも催はしました。吳之助が新參者とは小八郎の胸にいつもく蟠る考へて、ことには其最初長會我部に志しを寄せたといふのが先入の主に爲つて邪推を孕む思案でした。時節がらことには新參、決して氣は許せぬと思ふ下、精兵二百騎を貰つて城を出やうと言はればはては流石をかしく思はぬても無し、こいつ此城の附甲斐無いのに秋が來て長會我部に降るのでは無いか、肝心の精兵二百を無け無しの中から抜き取られて其儘左様ならと言はれた日には一も二も有つた物ぢや無い。と思ふと理が非でも抵抗するといふ氣にも爲りました。既に双方が互にうたがふ、さう疑るところで夫からは双方の一言一句が何れもいゝ疑念の種とも爲る、目眦に怨恨を含んで互に睨め合ふ心中には扱どうして遣らうが一杯でした。逆賊め、心がはりして反應をする所存か? 賊子、精兵を抜いて恩を空にする胸算か?

充分く堅固な此城に頑張つたら、よしや長會我部から鬼神を土足に掛ける猛者にしろ、決して踏みやぶ

れた物では無い。ことには探る處長會我部の今度の軍は元親が空馬鹿つかつた昔に引きかへ、是程に爲つたぞと實は本見させたさの餘りに爲たばかりの算段、而も國も違はぬ土佐の内、此方で物價が高ければ彼方も高いわけ、永持ちのする相手て無い、それを嘆ぐいはれは更々無いに、思へば見下げはてた血氣の吳之助村雀どもと一途に爲つて而も輕薄にも逃げ支度する——畜生、その惡念を透させやうか？これが小八郎の眞實の胸でした。

つまりは吳之助と小八郎と論點が第一違ふ、それも何も双方が夢中でした。其實いづれにも邪念は塵一點ほども無い、それだけに思々しく、口惜しく、にくい、齒がゆく、小ぢれつたく——邪覺をしてやれとは雙方が秘に貯へた思案でした。しばらくは睨めつくらで一言も無ければ一句も無く、夜更けて何かで塞いだやうに静かな四邊をいたづらに空しく聞き過ぐして居る内に胸は熱し——熱していよく堪らず、吳之助は思ひ切つてきツぱりと詰め寄りしました。

「是では事も纏まらぬ。矢間どの、詮無う御ぢやる、殿の御前で對決いたさう。それがしが思はくは今申したま、見すく思しいと知りつ——心得ぬ言葉には従ひませぬを——殿の御前で兎も角も事さだめて御ぢやらうが。」

聞きも罷らす小八郎は同じく憤然となりました。

「殿の御前で？これは如何、殿の御前で評定して折籠ると既に決まつたこと、そもく和主は御忘れやつたか。さほど女々し事を言ふ和主とは知らなんだ？」

賢り言葉には眞ひ言葉、

「女々しいとは——何おひやる。己の女々しさ得も見えて？」

「過言！大西ッ！」

小八郎はすつくと立つ。己れ、やれ、又傷する氣か？其氣ならば逃げはせぬ。吳之助も腰の物をやゝ反らせた切迫の際——あく、扱だれも仲裁せず——私怨に公務を忘れた兩人！意外！憤怒に繋ひた二人の耳かたちまち貫く城中のけやくしい太鼓の音——さすが研り付け掛かつた手も休む、同時聞える鯨波の聲



すはや椿事！ たいては無い。

長廊下の宙を飛ばして間の襖をはたと蹴放し、雑兵が一人駆け附けました。

「敵！ 敵！ 敵が寄せました！」

第七

親子相争ふ矢先にも盜賊が入れば抜き掛けた刃を直ぐに其賊に向けるのが世の中の情、流石小八郎と呉之助との間の不愉快も敵が寄せたとの注進で晴れるとは無し只々一時をひかへました。言ひ合せたやうに刃を引く……」

「すはこそ御見やれ、矢問どの！ 争ふて居る時では御ぢやらぬ。」

「中々く。何れは後に——和主は和主の……」

「南門守らうづー」

手ばしこく應答して、濟むや否や呉之助は一散に戶外へ飛び出しました。飛び出して見れば戶外は早大混

雑、士卒が左右に馳せちがふ、呼びとめて敵情を一寸聞く、聞ても更に埒は明かず、さア氣ばかりは急ぎました。

南門の屯までは繩張りにして四町ばかり、ぐるく回れば彼此十町、其十町を飛んで行く間、それまでの

士卒の騒ぎはどう有らうか？ 頭人の留守、さぞ混雑もするであらう。逃ふ士卒ごと呼び駐め、敵は何處へ

かいつたと聞く——さア椿事！「南門と見えまいた。」

奉仕以來はじめての合戦にわが成る處を落されて何の面目がそもく有らう、畜生、ぬかつた事を爲た。

無駄な談議に陣を明けて——身も世も無くなりました。

出逢つた一人の雑兵の馬を奪つて、何ものと咎められても返答どころか、鐵拳を握り固めて力まかせに馬

をはたけば馬は殆んど虚空をかける、小堀、井桁のやうな障害物に出遇ひ次第に飛び越しました。

駆け付けて自分の陣所、その近くから何さま信實、耳も聳ひる計りの人馬の諒解！ 轉げるばかり馬を騎

り棄て、「どうぢやない」と「連げさまに呼ばりながら陣所の構へに飛び込みました。見れば陣所の中の紛擾

混雑、血こそまだ一點も無い、その姿は口にも言はず、目が眩んだか雑兵さへ呉之助を見て気が付かぬ體。それでも破られぬだけが命。あら／＼しく雑兵の一人を掴み駐めて

「大炊はどうした？」

大炊といふのは呉之助の下について大抵は代理もする編將でした。問はれて呉之助の顔を見てはじめて雑兵も心付く。飛び立って、喜悅満面といふ氣色、

「お、大炊刀彌は今敵ふせてー！」

やれ／＼安心、防いで居るか。ならばまだ破られなかつた？ あゝ有り難い、弓矢八幡大菩薩！

飛び立って表口へ駆け付ける、跡から雑兵は跟きました。呀えかへった勇んだ聲。味方をはげます大音に「頭人どのが御歸りやツた！」

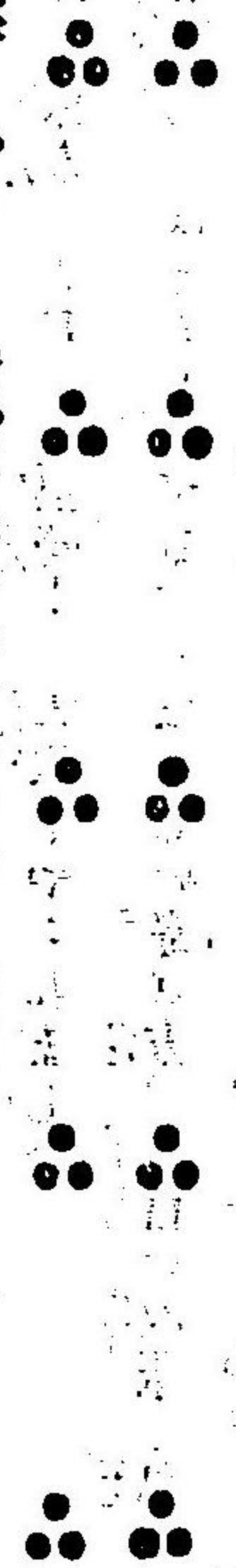
群集填塞する雑兵の中を分けて行く姿を何れも見認めると同時、且は前の雑兵の呼び聲に注意されて一同が歡呼しました。雨と降る矢玉の下をかいくぐつて、ひら／＼と土手へ駆け登つて遠見をする呉之助の姿の

勇ましき、半ば頰れ掛けた兵氣が危いところを引き立ちました。

遠見て測れば敵衆はやうやく二百騎、たゞし遠方半里の先きには硬まじい數の遠か／＼りが／＼と燃え列なる、さても其處には幾萬人？ さすが剛氣の呉之助も驚としました。但しそれはまづ人事、南門にかゝる二百騎は中々の猛者と見えて侮れぬ勢でした。いや接戦！ 見受けるところ、どうした事か、門は粉微塵にこぼれた有り様、すはや大事と呉之助は化轉する、ころげ落ちるやうに土手を飛び下りて、始めて吹つ切る大銅鑼聲、身を反らして號令を掛けました。五十人を止めて後詰とし、一列に煉り固めて一步も動かさず、餘衆を叱り突まして門の口を防がせる、こゝぢや、破れと勢込んで押しかへし、押しかへされる敵の人浪。はや堆く爲つた屍骸を踏み躪り、飛び越えて面もふらず争ふいきほひ、さすが敵衆も半分は既に損じた、それだけに味方もまた…無残！ 大炊もやられました。

敵の勇氣には呉之助もほと／＼感ずる、しほらしい寄せ方、面白い奴輩と思ふにつけて、汗か、油か、じと／＼と總身の毛穴を衝いて勇氣は烈火と燃えました。もう見て居る處で無い、已等肝をすへて待て！ 後

詰の五十人を二つに裂て、自身真先馬をも用わず大身の槍を脇挟んで「そおれ、兵ども、茲が先途ぢや。」



こゝに平日の鬱氣を洩らして縦横に薙ぎ立てる魔王の一心さすが物はじめのわるかつた狂瀾も危いところ  
で既倒に回る、兵を損じたのが無念ながら兎に角成り遂せは爲ました。やれ嬉れしやとほつと呼吸、さすが  
氣になつて再び土手へ駆け上つて見渡せば、あゝら今度は大手の方へ遠かどりがちら／＼動く、すはや敵は  
口をかへたと見る間も無く、城中また俄にさわぎ立つ體、耻を切つて見かへれば大手にあたつて上る火の  
手もはや天も焦げる勢。

さては裏切りが有ると見えた。無念、この城は今落ちるか? 半ば頷いて骨ばかりを残した櫓にさら／＼  
と攀ぢ登つて火元をたしかに見究めれば、紛ひも無い奥の館につゞいた遠侍ひ、素より敵の火箭の届くべ  
き處で無い、全くの裏切りが有つた事とは知れました。暫時潜んだ疑惑の念も今が時刻と頭を擡げる、己れ

やれ、小八郎、果して推察あやまたず敵の奴隷に爲りくさつた。骨髄をひしぐばかりの無念、殘念、身は口  
惜しさに煮られました。さぞ／＼奥は混雜すること、それを見す／＼見ては居られず、とは言へ軍法、自分  
の持ち場より外に一步も足は移さぬ成規、しばらくは魂が中有に迷ひました。

猛火はます／＼味り立つ、石も飛び山風が暴威を助けて車輪のやうな炎も飛ぶ、そして見れば敵は此一口  
と精を大手に集めた氣色、矢叫びの音、鯨波の聲はあり／＼其方から傳はりました。かへり見れば南門には  
打ち退けられた限り一人も寄せぬ、その空位をおめ／＼守つて、やがて大手を落されて戦死するも愚な話  
し……

「かまはぬ! 何の軍法!」  
此期に及んで軍法どころか? 見す／＼危い大手を、實に見す／＼危い館を、實にまた氣に爲る主君の御  
先途迎も／＼傍觀しては居られぬ。ことにはにツクい矢間づら、あはれ股肱の身を以て道を知らぬ内應三昧  
その、その、獅子身中の虫武士、恩を仇の犬武者を切めて斬ッ跳してもくれやう。

「兵ども、大手が凄まじい。助けにぢや、来い。已と。」  
 朋締めを一締めぐつと締め直し、陣幕をつんざいて早速の針巻、目の釣るばかり頭をついで飛び出すや否や電光石火、喘ぎく雑兵も従ひました。もはや騎馬では無い、船までは十町前後、氣の急くまゝ道にあたる家とも言はず、小屋とも言はず、足の向くまゝに飛び上り通り抜け、塀にあたれば忽ち蹴り越え、辛くして内添の廣場まで来掛つて、そこで始めて見かへれば従ふ雑兵は早四五人あとははぐて仕舞ひました。廣場には敵味方既にく入り混れて、かしく殺戮して居ました。目もくらむばかりの人数、炎々と燃え立つ火光に照らされて成は明るく、或は暗く、明暗二つに生死二つ、ほどばしる血汐をぬめらせていど火にも映れば劍戟が真紅の光りを飛ばせました。情無い、大手は早くも破られたか? さすがに城兵も必死となつて此處を先途と揉み合ふ有り様、その頼もしさに付けて又さて衰運の心かなしさ! たちまち此處、たちまち其處、曳々聲に拍手を刻んで雪崩を打ち、浪をうねらせ、火水になれと揉む體を姑らくは呉之助も眺めました。もう駄目! 恢復の望みもさて無さうと認めり付く、それにしても館の御身の上。その御先

途を見届けてから何う為やうとも遅くは有るまい。きつとして館の方を見わたせば門は開いてありまし

情無さに涙もしたる、その涙を拳で拭つて群集の中を潜り抜けさすが怪しんで切り掛ける相手をい、加減にあしらつて、辛く門内へ入りました。入つて一町とも行かぬところ、見れば雨霰と降り注ぐ火の子の下を昇いて行く負傷の姿、さし寄つて見れば、これは如何、其負傷は矢間でした。

「お、矢間!」

と言つたばかり、まこと小八郎の此姿は呉之助には意外でした。さては内應も爲なかつたか?

「矢間どの、深手で御ぢやるか?」

さすが正氣、横はつたまゝ目を見開いて、血みどりの身を用捨も無く右左に跳きました。

「大四どのか? むね……むねッ……無念で御ぢやるッ? ら……ら……落城した!」

聲を放つて泣き出されて、さて今が今の間まで疑つた身も幾分か氣の毒にも爲る、

まことに憂世?

「それと和主は？」

かぶりを振つて

「助からぬ？」胸を指して、「救かれたツ！も、も、望み無い。無いが、大西どの、折りぢや、好い。末期のたのみ、頼む、矢間が」。

血だらけの手をぶるくさせて何か聞いてくれとの言葉、氣は急ぐもの、従ひました。

「末期のたのみぢや、大西どの、」男泣きに泣きながら、「殿の御先途もう某には——御身、利主、是ぢや」。

手を合はせ、殿の御先途を見てくれとの願ひ、元よりそれは言はずとも。

「かしこまった、御心置かれな。さるにても館はどこに——内に御出でやるか？」うなづいて、

「今はもう内へ入らせられたらうず。とうとう参つて、大西どの」。

「さらば、よし、矢間どの、名残りは盡さぬが詮は御ぢやらぬ」。

素より急ぐ場合ひ、あはや杖を分かけるといふ切所、思ひ付いたか、小八郎はまたしばらくと呼びとめました。

「大西どの、無念、それがしが悪かつた。御身の言葉用たらば、此落城は、ちツ！無かつた」まこと「人の死ぬ時其言や善し！」

第八

章駄天ばしりに館の中へ飛び込めば半分は既に猛火で啖ひ盡くされました。長廊下まで突き抜け、うろたへて迷付く侍女に主君の御座を聞き定め、辛く奥の間まで行く其道筋さへ既にく、なみだ、全く亂服でした。美を盡くして描かせた杉戸も襖も物敷ならず蹴放され、踏み描かれたまま、常ならば奥殿に危いといふ太刀薙刀が其邊に投げ捨て、あるのみでした。

そればかりでもほろりと爲るに、まして奥の間の大悲劇！無残や主君の山倉は鉢金の白に目に立つ血潮

を滴らせ、千切れて落ちた袖のまゝ手槍を杖につき立てゝ居る、その側には夫人をはじめ二柱の姫と若君それに従ふ御附きの者が絶え入るばかりに泣いて居ました。鬼神を恐れぬ身ながら呉之助もはつと爲る。我を忘れて飛び込みました。

「館、呉之助で御ぢやる。」

鋭い聲に殿も氣が附く

「呉之助か？」

とは言つたものゝ、嬉しさに姑らしくは言葉も詰る、ふるへ出して、重ねてまた

「呉之助か？ 天晴れ武者振り！ いゝ所ぢや、よう馳せ付けた。や……山倉の運はもう無い。」

「七生までの無念で御ぢやる。さるにても、館、君には恐れながら御手紙を？」

「大手あやぶいと云ふことで己も自身防ぎに出たのぢや。出たけれど最う詮無い、畜生！ 何奴……」  
込み上げる口惜さにきりきりと齒を噛み鳴らして力足で床も抜ける！ 怨みに糸を引く聲で

「反應が……呉之助。」

「御道理で御ぢやる。何奴の所業か——哀れ、神佛は無う御ぢやるか。さるからに、聞こし召せ、館、もう落城も遠くは御ぢやら……恐れながら早う夫人若君とも……それがし此處に踏み止まつて、最……」

「最期の「戦」。」

手眞似を加へて落ちろと言ふ、しかし山倉はいつかな聞かず、二度三度頭を振りました。

聲するどく、目をいからし、

「血迷ツたか、呉之助、この山倉が恥を忍んでおめくと逃げられやうかい！ 運の末ぢや、詮無いことを。」

そゝそれよりも、呉之助、これ左衛門の必死の頼みぢや、奥と小供三人を……連れて……連れて……落ちて欲しい其許より外心をゆるせる者が無い。呉之助、山が裂けても其許は死なせぬ。」

涙のこぼれる主君の言葉に、さア堪らぬ。たゞし、それにしるゝ主君が見すゝ死ぬるといふのを振り捨て  
「？ 呉之助は飛び立って主君の足下にさし寄りました。睨めるやうに主君を視上げ、

「館、館、さてく館」

拳をかためて塵をなぐり、涙一杯になつて

「腑甲斐無う御ぢやる、ちッ！ 館！ 恐れながら呉之助は……呉之助は……」

主君はしかし赫と急ぎ立つ、

「繰言云ふなッ、呉之助！ 女々しい、それが武士の言葉か？ 生きる時は生き、死ぬ時は死ぬ、未練、其

許は婦人か、子供か？ 運さへ好くばどうか爲る世ぢや」。

情無い、それだと言ッて。

「早く御覚悟御爲やるのも、館、人の能ぢや御ぢやらぬ」。

いよく相手は急ぎ込むばかり。躍り上ッて齒を噛んで、

「ちッ、齒痒い奴！ 頼まぬ、もう。去れ去れ、去れッ、女武士！ 去りくさらぬが！」

罵り飛ばして睨み付ける——あ！何うしたら宜からうか？ 身は一つ心は二つ——やれ、それ敵も今に近

づく——一瞬の間が勇断の大切所、當惑してまた泣く目先きへ、ても勿體無！ これが無残で無くて何？

山倉は鎧投げ捨て、どつかりと床にかしこまり、呉之助の前に手を合せる、これはと見る前涙はらく

「呉之助、これぢや、拜むぢや、山倉を助ける心で奥と子供を護ッて御呉りやれ」。

ても、ま、主君の身分として——あ！此一つの胸のくるしさ。張り裂ける——描ける——ひしげる——む

しれる——たゞし、手まで合はされて——悲しいが聞き入れなければ爲らず——さすが躊躇ふ。

「どうぢや、呉之助、これぢやく」。

ちッ、また手か！ 弾かれたやうに飛び退り板床に叩頭して、

「呉之助は……悲……悲しう御ぢやる」。

實情の一句ふたたび浪も満座に亘つて一同からまた起る泣き聲。

岡行くも田行くも忠義は一つ、と知らぬても無いもの、逃げると言はれては流石困る、頼み入られて平

伏して一言も無い呉之助の姿に山倉も安堵した體、今はといふ有り様で、泣き沈む夫人の側へつかくと差

し寄りました。

「苦草、尊くは言ふまいぞ。」

あらかじめ決然たしなめて、身を入り込ませ、

「今聞きやつたまへじや、これ。泣くといふ折りぢや無い。呉之助が付く……大事無い。落ちて身を

忍ばせて——落ちて身を忍ばせて……たゞし幾らか辱もうるむ、——

「姫と若とを譲り育て！」

雨無三、聞く身は扶られる。満座一同から言ひ合はせたやう破裂する泣き聲。見れば、その女々しくする

など勤める人が、無残、兩眼をもしばたく——夫人も何か言はうとする、畜生！ それで舌は動かさず、た

ちまちにして鼓膜を衝くのは焦燥つた刀蘭の聲、

「折りが見えぬか、無念な！ 姫にも若にも支度させて——とう／＼これ、敵も寄るわ！ 己とてもま

ことは落ちる、足手まとひさへ無くば——苦草、呉之助！ 聞き分け無いかッ！」

それならばまた何故一途に落ちやうとは仰せられぬ！ 勵まさうとて言はれるなら猶さらまた其情の濃さ

——どうして心を鬼にして！

まして落ちるといふのは水物、運次第、たゞたゞ運命。これぎり永い別れとなるかも——「苦草」、「呉之

助」と言ふ御聲を聞くのも今日この一刻だけで有るかも——知れぬと云ふ處で、思ひ切つて秋わかつて！

武人の妻たる心得はかれてから知つても居る、其心得の切迫の處を今年今月今夜味はうとは今まで

夢にも——で悲しいとは決して言ふまい、口腐れ、未練は出さぬ、それながら今夜の心を他日さて憶ひ出し

た日には？ 主従夫婦の生別れは悲しいか、うれしいかと若しも人に聞かれた日には？

もしもこれが永別で、他日姫や若が成長した時今夜の様子を聞く時には？

武人の妻に未練は恥辱、忠義と貞操とに流す外愛着や煩惱には一滴でも涙は出さなと戒められた條々を背

くのが早もう未練か？

涙の無いのは石か瓦、夫婦生別れするといふ処所に臨んで武人の妻だけ石にも瓦にも爲るが道とは！



情の極度に身を怒らせて、支度を促がす殿の言葉——思ひ知ツた、睨まれて睨まれるだけ、罵しられて罵しられるだけいと懐かしく爲り優るのは人事千萬の中たゞこの時だけ!

簡界に慰めながら侍女共が寄ッて集ッて姫や若に支度をさせれば、幼いこととして頑是も無く「いやぢや」とすれぬいぢらしさ! 目に立つ上着を脱がせるその下、すりぬけて姫は年若、母の身に取り付いて、また父をも見てまはらぬ舌、

「母君何とて御泣きやる? 父君が御叱りやつてか?」

「たまたま両手に抱きすくめて——こみ上げて言葉は揃はず、跡にも先にも只一句、  
「よう父君を、これ見覺えて」。

肉血をわかつた親の身の思ひ、山倉も見る目も落れる、こゝに別れる胸中無限の懐ひの程を五寸の手の内、手鎗の柄に握りつめて、鐵棍もこれには砕ける? 石突きを壁につツぶり、愛着に萎える身を支へいく度も見かへツて、

「奥之助、頼むぞよ」。

火は早奥まで咎め及ぼして風に傳はる一種の臭氣が——而も昨日まで伽羅を焚いた——奥の間にもう傳はる、中々に遅くもあれと響る祈りたい。支度も出来る、

「それ、奥之助、早う行きや」。

「さア扱こゝが最期か、見をさめか? 何ごころ無い、見るからがいぢらしい姫と若とを父の側へさし付ければ、あゝ、やれ、父は涙の目で、泣きながら睨め付けて、こして掻き拂つて、

「苦草、未練!」

押し出された廊下口、主三人に従三人、奥之助に若殿二人が扈從して縁も、愛も、情も、思ひも廊下の踏切りと共に切れば、またしても又涙の種、心付ける殿の聲、

「搦手に敵は居ぬぞよ」。

第九

あはれ住み馴れた處を豺狼に蹂躪され、力の不足に無念を味ひ、おめ／＼と城を捨て去る心持ちは賢不肖無差別に想像も付く事です。口惜しがる其理の是非は措いて言はず、定まらず活き物には怨が有り、怨が圓滿を缺かれた日に俗は直世を不如意と観ずることとして吾物を奪はれる心中の残念は誰も思つて見て思ひ當れる事です。激變が駿耳に水と湧き立って前後目を瞬く間、人間の大笑歎、別離、醜辱、失敗、懸歎、怨恨其他さまざまの悪徳も一時に寄せて來て榮枯のはかなさに圖らずも迷ひ入れられた脱走の主従の胸中、そも何んな體でしたらう。是等主従の胸中には榮枯が偶然に寄せると思ふ、豺狼の打つて掛かる相手は豺狼と更に思はぬ、ひとり即も無い、無邪氣の羊に所以無く豺狼は掛かつたと考へる、身に省みる處は微塵一點も無いこととして、怨恨は身外にのみ向つて、従つてそれだけに胸中は亂麻と爲つて紊れること、思へば其胸狭さが衰れてした。運命の究迫したのは縱令兎に角それだけの原因の有つたこと、むしろ其方は衰れても無いこととした。俗に言ふ幸福は綾羅錦繡です。たゞし、それらは眼前を過ぎる雲か烟の幸福で、精神の堅固

といふ完全の幸福に比べては素より優劣は言ふまでも無い——あはれ、脱走零落の主従はたゞ此幸福といふ點から見ても滔々たる世の中に有りふれる哀れな人たちの一部でした。時機を偶然に逃くものと考へれば、つまり胸を廣くして究厄を切り脱ける手段も全く盛きて仕舞ひました。

吳之助の氣轉て厩から駿馬を牽き出し、それへ主人三人をば相鞍で騎せました。但し騎馬には馴れぬ主人、落馬の掛念も有ることとして打ち紐を取つて腰の邊を鞆壺へ結び付け、涙！ 袂依を被らせて天晴人目を避ける用意も整ひ、搦手に向つて出掛けました。搦手は風下とて火の子は雨のやうに降る中、一面に晝より明るく爲られて些便りは悪いものゝさすが敵もかゝらぬ體、早く／＼と掛け聲して、そしてまだ固く鎖したまゝの城門を打ち破るばかりにして開いてからくも忍び出しました。

まづは一安心と僅に一寸胸を安める、安めると同時に、口にはそれと言へぬものの、吳之助の胸に浮かんだのは妻の香苗の事でした。主人のため身を捧げて最早身は死んだも同前、夫婦だらうが、何だらうが、それら管らぬ未練は一分も出さぬと心て心に管をば呉れるものゝ、さすが人間、なほ殘骸には呼吸も有り、その下

からして浮かぶ考へは、そも／＼妻はどうしたらうか、逃げたらうか、殺されたらうか、生け捕りに爲つたらうかと、内心またいる／＼思ひ出さなくも無いところて、一寸また思ひ入れれば胸はどきまき顛倒しました。

目を瞑つてきつと観念、女々しいとまた心を叱つて胸の足掻きを急がせました。天運はまだ盡きぬか、敵もまた寄せて来ず、松風の颯々とするより外物音は一つも無い、この間に早く逃げなくては。大道は人目に立つ、案内を知つた間道から濱邊へと向けました。

人情、一步行き、三歩行き、泣き顔をあげて見かへる苦草、火は凄まじく猶も哮つて、半ば頽れた城樓が物哀れに黒ずんでも見える——あゝ是が見納めか？ 風につれて聞える踏聲、耳を澄ませばこやく／＼と宛も落人を嘲けり顔な、そも／＼あの聲の中には或は山倉の最期の叫びも交つては居は爲まいか？ 希くは足を駐めて焼け落ちるまでも見ても居たい。それ元より御尤、さり乍ら九死の境、とく／＼と急がせる吳之助もむしろ取は惜いかのやう、仕方なく／＼、でも無情な、人の愁へを知らず顔に得々として蹄を鳴らす駒を早めて、二里、三里、四里、また五里、いつか願れば城も見えず、兎角は夜明けといふ頃に長流の磯邊に出ました。

曉の紅を心あてに見當を押し測り、城の方を切てもと見返れば、白雲が空しく立て籠めて榮華の色も全く無差別、なまじひに風も静かな天地は呼吸絶えて死んだかのやうでした。

十里の果までも見えわたる磯邊を傳つて落人の行くのは危ふい話し、暫時馬に呼吸でもくれたなら早く小道に入つた方が宜からうとは吳之助を始めとして三人の若黨迄が何れも同じた訳でした。よしや暫時にしろ落人の身、手のかゝる結び目を解いて馬から下りるのは面白く無いものゝ、さすが時の用とて馬も大事、二町ばかり隔つた處にある松並木を究竟の休み處と目射して辿り着き、そこで一先苦草を始め姫と若とを馬から下し、氣が利いて一人の若黨が腰に付けて来た冷飯を勤めていくらか腹を養はせました。

苦草に従つた三人の若黨は何れも譜代を心に期した昵近の者でした。一人は高倉兵太夫とて年やうやく二十九歳一人は同姓兵馬とて即ち兵太夫の實の弟、是は其年二十二歳、其間には春葛と言つて其時二十五歳に

まことに憂世

なつた姉が有り、これは馬掛りの筒井何某といふ者の妻と爲つて同じく山倉に仕へて居たものゝ、素より落  
 城した事とて兵太夫も兵馬も春駒を見返る暇も無く、其儘にして落ちました。今一人は井出七郎とて當年  
 三十二歳の血氣の武士、妻も子も有る身ながら同じく賊忠の數には洩れず落魄しても従ひました。之に併せ  
 て吳之助、大の男がそれでも四人は従つたこと流石苦草の身に取つて心細さは更に無い、ところて扱胸につ  
 かへるのは落ちて行く先でした。苦草は常からして多病の身で、何事につけても果斷の無い婦人、温顔が其  
 徳とて人にはいつも愛されまた敬されました。苦草について言ふ事は唯是れだけとて、今から究迫の境にあ  
 つて武人の内君といふ丈の胸も無く、松並木で馬から下りて一休みするに付けても従者ばかりを當にしまし  
 た。

吳之助に向つて行く先をどう決めたと云ふ、但し素より魚肩の場合ひに唯々人氣の無い處を行く先として  
 來ただけの事、兎角の挨拶も爲りかねました。それから主従五人が膝を交へて評定とも爲りました。  
 或は土佐を出離れずとも宜からうと云ひ、或はそれでは危いとも云ふ、暫らくは彼是押擇したものゝ、終

にはどうか定りました。土佐に居るのは危いゆえ、阿波へても逃げるがよし、それには丁度阿波の西隅に小  
 粒ながら一旗樹て居る柏崎源左衛門、その人と一面の識は無いのゝ、菫は柏崎も長曾我部に怨みの有る  
 浮評もした處、轉げ込んで身を寄せたら眞逆懐中に入る兎鳥を殺すことも有るまいと唯推察だけで決しまし  
 た。

さうと決れば一刻も土佐の土を踏むもの否に爲つて、而も亦期日も充分昇つたところ、急がずばなるまい  
 と再び馬に支度させ、また前と同じやうに苦草等三人を騎せました。苛めしい身姿は吳之助等四人のものも  
 此時限り脱ぎ去て、全く常人の姿となり、いざと斗りに出立した頃は朝も卯刻を餘程過ぎました。

見直せば心無い身にも壯快な、切り開けた海の景色、さて見惚れる斗りでした。段々と消え掛かる空の根  
 の玉子色と入れ代つてあまり浪立たぬ海面が白珊瑚を次第に磨き、五六點の鮫を浮かせて餘所に見られぬ絶  
 景でした。意地わるく捻くれた松を處々のしよりに立たせて白砂十里の先きまで一目に見え、其他には思ひ  
 出したやうに可惜折りく、白布に黒點を打つ漁師小屋をはるか前から一つ二つと迎へて行くのみでした。さ

すが殿中で歎いた、それとは違ふ風の匂ひ、それながら伽羅のかをりは永く持たぬと思へば、磯奥の永久不變がむしろ懐かしいかの心持ち、しばらくは景色に紛れて落人の身がいづれもく何と無く胸を開きまし

た。磯づたひの何處からても見透せる處は忍ぶ身に便りがわるいと知るものゝ、さて別に道も無し、階道は又こゝらあたり長曾我部の繩張り内とてうツかりは踏め込めず、仕方無しに廣いところをぼつ／＼と辿つて行く向ふに方り、すはやー 敵か、見える人影。人影は二人か、三人、それながら落人の身の氣苦勞。吳之助たちも戒め合つて、わざとまた避けもせず、近づくまゝによく見れば何の！ 只の漁師でした。

ほつと一呼吸、行き過ぎ掛ける身の有り様を漁師はじつと眺めて居て行き過ぎる、我慢は爲てもつひ堪へず、不圖兵大夫もふり返つて、顔を見合せてはツと爲る、同時漁師は引きかへしました。立ち戻つて來て呢々しく

「方々は旅人て御ぢやるか？」

聞かぬふりを爲れば猶呼び掛けて、

「方々、いづくへ御わたりやるか？ それより先きの森の中には長曾我部が屯してなま／＼殿しう守つて御ぢやる。」

聞けば聞くて扱氣に爲る、吳之助もふり返つて

「和耶共は其處經て來たか？」

「經たばかりでは御ぢやらぬ、刀翻、昨夜から引つく／＼られて殿しく詮議されまいた、敵の忍びかと思つて、誰にもあれ、通る人を搦め捕るてふ事て御ぢやるよ。」

それは困ツたことだと主従が一同ひとしく胸を衝く、それと知るか、また知らぬか、漁師はさもく忠實に

「いづくへ御わたりやるか知られど、是より先は危ふう御ぢやる。御急ぎやらぬ旅て無くば路を御變へやつたが心安い事てがな御ぢやるべい。田舎者の親切、さて有無の返辭は爲ぬものゝ兎に角にはたと困る、吾知

まことに憂世

らず主従が互に顔を見合はせるのを漁師はまたじつと見て居ました。

さらばと夫から袂を分つた、其時が早主従には運の盡きと爲つたのでした。思ひもつかぬ、この漁師は誰あらう長曾我部の斥候のもので、故さらに言葉を変へて主従の人品を大抵は探つたこととした。あゝ逃げ出した甲斐も無い、主従五人の五つの命はまこと風前の燈でした。

第十

漁師とわかれて二歩三步主従も行き掛けて流石風聲鶴唳をも恐れる身、どうした物かと顔を集めました。或は其漁師どもが問者であるか知れぬとも扱全く思はぬても無し、さりながら夫と同時に問者で無いかとも思ふ、其思ひ迷ふだけに先は苦勞のみ湧きました。但し、とても斯くても土佐の國を離れなければ爲らぬ次第。よしや進まうが、退かうが、敵に遇ふは元より以て覺悟しなければ爲らぬ事でした。退いて遠まほりするよりも踏み切つていつそ進んで、どうかして言ひ理めて行く其方が何方かと言へば實には爲りさう、漁師の言葉は聊か胸をなやめたもの、兎に角押し切つて進む事と爲りました。咎めたら斯う言はう、あゝ言は

うと打ち合はせも何うか出来て、やがていざと歩き出して、行くこと凡そ七八町、弓形にうれる磯邊づたいに曲り角に差し掛かつて見れば扱何さま眞實、小具足に白鉢巻した武士が三々五々其處、こゝに散つて居ました、何れも皆手鎗を持つて。

どツきりと爲る胸中を充分に包んだつもり、見ぬふりして行き過ぎさうに爲る——果たして、待つたと呼び止めました。中々にわるく騒がず、落ち着いて止まる前後へむら／＼と武士は馳せ集まり、鎗と鎗とを打ち合はせて、じり／＼と詰め寄りしました。

「名唱れ、これ！ 無音で、推参」。早く年齒と見て取つて吳之助を目ざしました。

「これは紀州のもので御ぢやる」、さすが吳之助も落ち着いて。

「紀州——名唱れといふに。問ふたまゝに答へぬか？」

暴言に此方も勃然となり、

「名唱れとは——これでも吾々は武人て御ぢやるよ。姿は御目に御とまりやらぬか？」

なまじ悪く隠すといけぬとの遠慮、肝の太きに幾分か相手の鼻も曲りました。

「何か知らぬが、吾々は吾々の分て替めるのぢや。ならば御名を名唱られい。」

「紀州牟婁郡の端武士山倉と云ふものゝ手で御ぢやる、御聞き及びが御ぢやるか知られど。」

「その手の同姓半之丞秋助といふものゝ妻女の一群れ、岳父の墓まうてに過る頃この國にわたりました。

唯今は歸りの道で、今までに替められたは幾度か知れぬて御ぢやる。聞けば長曾どのと吾々の名と同じな山倉とやらん云ふと合戦に及ばれたとやら……。」

この土地の山倉の落人なら人情として名は是非詐る、それがさうて無い處を見れば、何さま全く他國の人か? 武士もいきほひ斯う思ふ、いくらか胸も靜まつて、それながら猶根問ひました

「岳父とは何て御ぢやる? 墓とは何れのあたりで御ぢやる。」

「岳父と言ふは妻女の親、みそなはず是の馬上に扣へたるものゝ親て御ぢやる。墓は西村の北で御ぢやる。」

「もと何て御ぢやつた?」

「もとは用舎談で御ぢやつた。」

素より土佐に住つた身とて墓の多く有る處も知り、大抵ばうまく行き掛けました。始終を傍て聞く主従はさすが手に汗でした。弓矢入幡大菩薩! 山倉一家の天運がまだ盡きぬものならば何うぞ言ひ脱けさせて呉れ! 問ひは大抵終り掛けた、それでどうぞ済んでくれと願ひ願つた其願ひが——氣に爲る——又もこぢれ

ました。

「その御身の疵口は?」

「昨夜受けた疵で御ぢやる。」 一起一伏、冷淡に脱けました。

「昨夜いづくて、何事?」

まことに愛世?

「何とやらん處は知らねど、落城が御ぢやつたげな。其もよりの通る時、雲霞の勢の側杖うたれて、しげらく防ぎ戦ひました。」

「どうして切つて御抜けやつた？」

「やがて仔細を群にしてやうくに——それから一夜恐ろしさに宿りもせず逃げました。」

兎角不思議に抜けられて、武士も容易に手は下せず、彼是暫時互の間に談合して怪しく無いと見認めを付けて——ても、さても武運長久！

「さう事わかれれば大事無い。とうとう急いで御とほりやれ。」

夢かと喜ぶと言ふだけ無駄、一拜して主従は辛く虎口をや、出掛ける、同時後ろに鳴る蹄の音。問者の漁師の注進に前休んだ松並木の近所の屯が急使を掛けたのでした。一瞬の間、今欺かれた武士のたまりに騎り付けて、

「方々、あの者、怪しう御ぢやる。それがしは山倉の妻女の面を見知つたものぢや。今一應の吟味々々！」

まだ五六歩しか行かぬ主従、その耳を貫くこの注進！ すはと一同仰天する、武士は左様かと騒ぐ體——あゝ切めて一刻早く言ひ抜けたなら！

第十一

進退こゝに谷まつて。主従五人の思慮も分別も唯無茶苦茶となりました。何ものか、山倉の妻女の面を見知つて居るとの言葉、もしもそれが本當ならば——さア切迫つまりました。切迫つまる、其間も無く、はや其騎馬武者が先になつて武士も外に十五六人、むらぐと追ひ付きました。

「面を見せ、馬上の婦人。」

もしも面を見られた上、それと目星を射された日には最う早逃れ果てられまい。それかと云つてなまじひ隠せば直おそれと疑がはれる。無殘、武士は用捨無く馬を菅草に寄せました。たまりかかれた吳之助、あはやと計り身を飛ばせて兩馬の間に狭まつて、よし暫時でも思慮の出る間、

「無……無禮ッ！ 作法が御ぢやる。」



止められて赫として、

「作法？ 武士ぢやと云ふ事か？」

「もとより」。

鋭く言ひ放つてもいつかな明かず、

「武士なら武士で猶の事、疑へばこそ問ひ正すに、何の作法を思はうかい。繰り言はずと其處退き居れ！」

つツと狼背をさし伸べて苦草の襟袷ぐつとつかむ、あなやと斗り面を上げる——ちつ！ きつと見て扱は

とばかり、武者聲するどく、

「すは見る、山倉！」

もう早速命究まりました。敵味方、いづれも片唾を呑んで居た双方すはとばかり刀に手。同時に耳を貫い

たのは其騎馬武者の號令でした。

「兵ども、餘すな、當の敵ぢや。それッ！」

はや一か八かの關所、生死たゞ二つ一つ。きらりと光る吳之助の引き抜いた刃の影、心得たとばかり兵太

夫等三人も抜き連れしました。

「おのれら蟻螂、この期に及んで。」

一氣毒氣を吹くや否や、苦草をむんづり掴み掛ける、それ爲せて爲るものか。吳之助は相手の武者の馬の

前足薙ぎました。

はや血戦と爲りました。命はこゝで最う無いもの、逆も無くなる位なら骨かぎり居つてやれ。勇氣は何れ

も火と燃え立つ、敵の勢は總がり、只幾分か頼みの有るは敵衆の少いこと、大抵三十人でした。たゞし願

つても無い落人、敵も元より必死を期する、揉みに揉むだけ殺傷は凄まじく爲りました。兵馬は既に切り倒

される、七八郎と兵太夫とは流石まだ主人を守つてここを先途と危く防ぐ、これをば目には見ながらも吳之

助は駈け隔てられて助ける事も心に任せず、一手に八九人引き付けて切り脱げやうと喰ひとめる、その間辛

くも目を偷めば、あはや七八郎も眞向をしたゝかに切り裂かれて。

主人の鞆面は唯一人、兵太夫も氣はいらだつ、それながら三面六臂は無し、無残や、敵も馬にかゝる——同じく足を薙ぎばらふ——馬は堪らずとうと倒れる——敵は早二三人ばらくと駈せ寄つて、すはと兵太夫も宙を飛ぶ——そして及ばず、さて大變——なまじひ鞍に結び付けた細引が苦草たちを自由にさせず、敵は得たりと打ち下す、苦草は肩先から腰骨まで手も無くばらりとやられました。同時細引きもぶつ切り切れて、姫と若との兩人は地上へ轉げ出しました。「すはや毒芽も採みこなせ」。

むらがり掛る敵の中へ兵太夫は、一生懸命つと身入れて片手で防いで片手に姫を抱上げる、ところへやうやく呉之助が夢か現か駈け付けました。身に引き受けた七八人をば既に大方切り捨て、漸くに駈け着けて、一心凝ッては大喝一聲、

「兵太夫、出……出来した」。力をつけて若君を自分は片手に抱き取りました。「逃げる、兵太……御子たち大事ぢや。命はしばらく捨てなく！」

一句を吐いたが關の山、若君をかへたまゝ直ばしりに逃げ出して、もう早兵太夫を助けるべき餘力とは殆んど無し、追ひ来る敵を切り伏せて一町ばかり走つた處で、きつと後をふりかへればそもく是は、兵太夫は辛く逃げると思ふ間も無く突き出た岩に乗るや否や身を躍らして海の中へ姫を小脇にかゝへたよ。やれ思ひ切つたと見る目の向ふ、沖をば行く漁り舟、さても機轉な、泳ぎ付く氣か。その儀ならば此身も亦。さうだと早くも思索して、同じく若を背に載せて呉之助も容赦無く海中へ飛び入りました。

其後は言ふだけが涙、疲れ果てた身も忠といふ一念に弾機を受けて、呉之助も兵太夫も抜手を切つて何の高浪、舟に達してやれ嬉しやと助けを請へば一たまりも無く呑まれました。

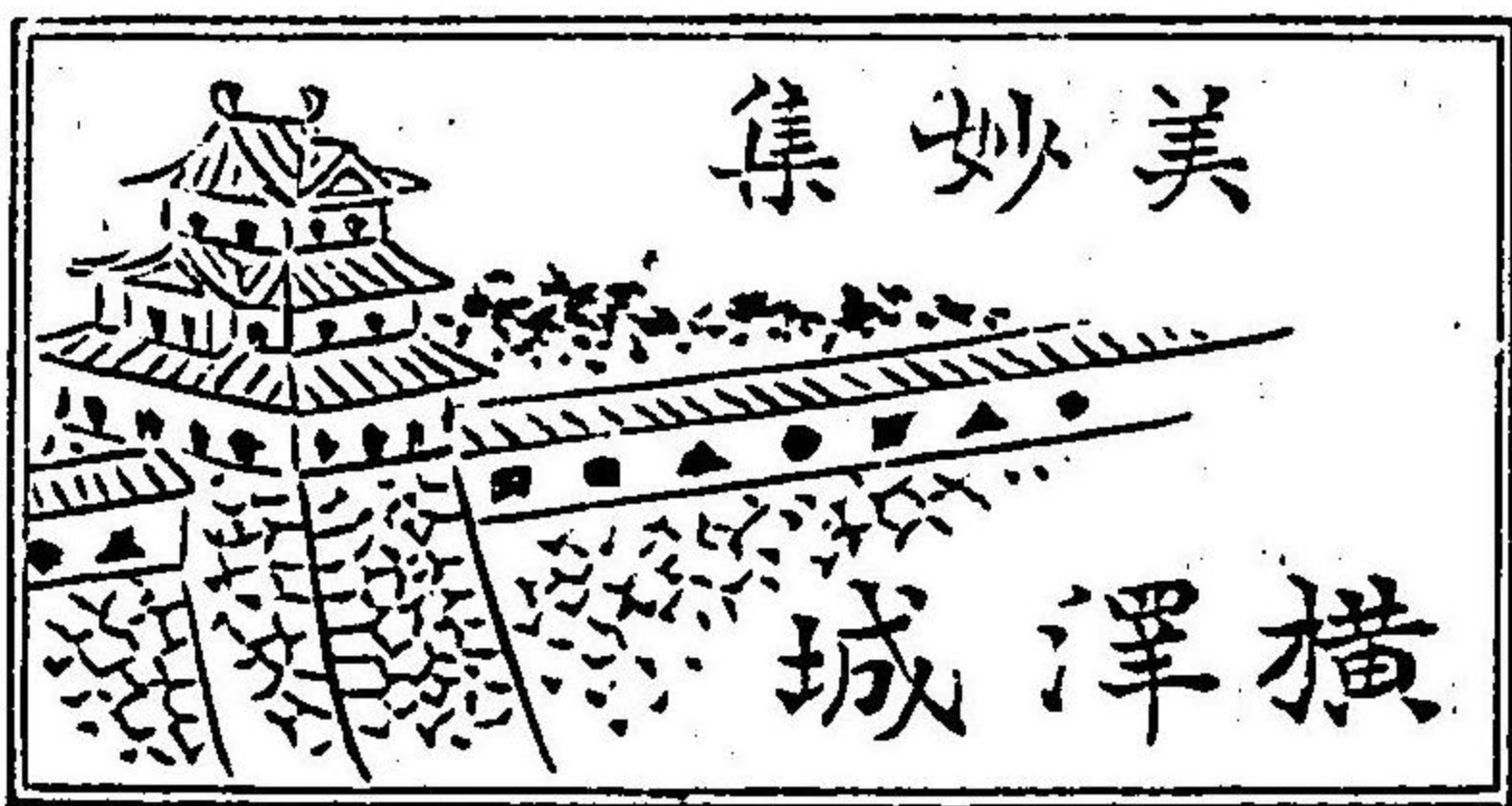
「落人な」と思はしい。「強ひて乗らうと小縁に手、その手を板子で發矢と打つ、よろめいて再び陥る邪見な浪、はては二人が二人

ながら精氣も盡きて仕舞ひました。

或は岸へ歸らうかと無念にふさがり掛かる目を見開いて屹と後を見かへれば、無残、岸からは遠箭の雨！  
あゝ人世の運命のはかなさ。但し其はかなさも、思へば身の分を盡くした處で更に悲しくも無い事です。

薄命に死んだ吳之助や兵太夫、そもそも敵を亡ぼせぬ怨みは盡きぬ、それは兎も角も分を守つて天晴分をば  
欠かずに死んだ、そこを思へば安らかに目も瞑れる事か、冷淡かは知れぬものよ、人生さまゝの行く道に

荆棘もあり、花もあり、吾から荆棘をば望まずとも世の中に得て花は少ない、それを悲しむのは到底は狂愚、  
遇も不遇も觀ずれば只の金環一輪ばかり、其果は無盡無究！



横澤城

右千曲、左屏、熊の甲州勢に犀の越後勢。連年の對陣に落合ひの川水  
も常に血汐の味を嘗め知る川中島、陣鉦の音さやかに聞えて七つまでの  
合戦も済み、雙方が陣を收めて川原を控へて兎角する内に秋の日とて名  
残無く、暮の綱結び付けた梢に鬨時の音を誇る 蝸の聲ばかりして夕日  
は朝日山の陰に沈み、思ひ出したやうに叫ぶ軍馬も寂寥の中征人の馬  
に染み亘る氣色、やがて時刻の移る内に川霧驟々と立ち昇つて新蟾の塵  
ぎ色もやゝ薄いところ、裾花川原の草蔭を忍びながら川傳ひして上の方  
へと行くのは一人の武士でした。

西條山の絶頂あたり、怪しい川の隅々、斥候の熊鷹眼は月さながら絶  
えず見めいたうちによくも掠め過ぐしたこと、川は亂山起伏の間を擦つ  
て川中島の西北小一里の奥、横澤山の脇腹を通る水道、武士が其上に逸

横澤城

るは——おのれ何者？ 横澤山には越後の味方の城、横澤城とは甲州の耳にも聞えた、其處へ忍ぶは越後か  
甲斐か？ 川原には小高い土堤、雑草亂木が叢り生えて甲士百人が伏しても宜ささう、其中を唯一人で而も  
背をかぐめ、足を抜いて走るとはいよく曲者！ こゝに高山藤太が見附けたのを知らぬか、鈍物！  
前の武士を半町ばかりもやり過して土堤の草叢みしみじと左右へ押し分けて現れて出たのも亦武士、半面  
を出して後影を見送りました。曲者は中肉中丈、黒皮づくめの腹巻に三尺もあらうといふ太刀、薙刀を小脇  
にかいこんで、顔ばかりは布で包んで居ました。川原の礫は人の氣も知らず、歩く度ごと音がする、見えが  
くれ、跡の武士も亦拔足さし足、舞黒々と生ひ茂つた卅前後の天晴武士、是も蘆間に立つ白鷺、絶えず心を  
前後に留めました。

送りつけて早十餘町、横澤山の間道から嶮岨を攀づる曲者の體、もう構はぬと跡の武士は次第、く足な  
進めてやく近づいた足音に耳さとも氣のつく前の武士、屹と後方を振りかへッてはッと許りに一大動頭、  
道は細し、横は溪、もはや叶はぬ兎鼠の境遇、思ひ込んだ一念が透らぬなら仕方無い、おのれ寄るなら寄  
句。

ッても見る。薙刀に一唾呉れて道をゆづらす佇立む間も無く早駆け寄つた跡の武士、「何ものか」と只一  
句。

「城の者ぢや」。

「何と名を召す？」

「名は……言はれぬ」。

「城の者なら言ふたとして……おのれ敵、忍びの曲者！ 手捕りにせうかい？」

「何をッ！」

さても卑怯、手捕りにしやうとて組み付くを寄せ付けずに薙刀の水車  
「ならば此方にも心得が……いでその無禮な……其處動くな」。

切り合はせても中々手だれ、二二三合は互角でした。が、處は如何にも阪がりの細道、薙刀をつかふ  
その不便さ、と見る間に、只中から研り折られました。

横澤城

薙刀を折り折られたと見る間横なぐりが肩に一太刀、忍びの武士は裏袂かれてたろく處に駆け入る藤太、  
大手をひろげて偶と組む、直に維木の幾り生えた谷の中に組んだまゝ。さても天運の開かぬ處、谷間にまじ  
出た右に前の武士は臍を打たれて香々無絶せぬ斗り、ぐだぐだと押し付けられました。

しかし心にくい白の覆面、いて引締めて曝して呉れやう。「まあだか？ 名唱れ」と口に言ひく、早  
争ぞはぬ敵の布を一剥き剥いて谷底の臍の中から透かして見れば何か若武者か、やさしい白面、じつと顔を  
近づけてつらく見れば扱も珍事！ 敵と見たのは敵で無く、武士と見たのも武士で無く、残念、是は誰か  
らう、香園の夢を諸共に燦め合つた最愛の妻の女貞！

「そなた……たづの？……」

「わが夫か？」

念力共に呼び合つて萎へた妻の身體が却つて一活、鬼をも挫ぐ藤太の五體がむしろ綿と萎えました。わが  
夫かと言ふや否や早やたばしッて落る涙、女貞は藤太に取り付き、

「無念でおじやるッ……藤太刀禰」。

あゝ道理く、嗚かし無念。妻が来たとは知らなかつた。一心にたゞ敵方の間者と思へば目釘もぬらして

目釘！ 洞房花燭の祝ぎに二人の名を組み込んで藤と女貞との形にした其目釘が今仇がたき。知らなけ

ればこそ、ちエツ身が干切れる、温さながら玉のやうな肌に毒刃食ひ込ませた！

刀禰の身の一大事と思へばこそ知らせに来て、其刀禰に撃たれるとは抑も何事！ 御存じないか、敵の策

略刀禰が横澤の城に間者と爲つて入り込んで表に越後最負の假面を被つて、裏に甲州の脈を通ずる機密が灌

れて今日か明日なぶり殺しにされると云ふ浮評を聞いての身の苦勞、あはれ枯木に残る葉の數ほども悟らず

に居られる事、同穴の縁の糸の一筋で君の危い命をつなぎとめられる物ならばと思ひ立ッたが即ち一念、古

びて塵には爲ッて居ても殿が着馴らしの掛替の腹巻、移はぬ色の黒革をどし、齊眉に縁の小薙刀、護身のた

めと身に引き着けて思へば薙刀は嫁入に持参した品、身を固めて立ち姿を見てほろりと爲る姑どのに運を矢

ッて小道を縫ひ、来た甲斐も無い事か。とは言ふもの、撃たれたとて殿は一筋の心から知らずにした事、い

やく己が早まつたからの事、彼と是ゆすり合ふ恩愛の情念、さても浮世はつらい物の、それにしても事々しい、何のために覆面して…更に問ひ返せばまた同じ答へ、夫婦は盡未來三世の縁、春女が秋士を夢に見て受胎るまで情の通ふ世の中ならばよしや夕暗は動作を包んでも、又よしや黒革は雪白の肌を隠しても冬の夜半其肌てわが毛脛をあたくめてくれた靈氣が何處に潜まうか？ 見損つたが此身の落度、夫らしくも無い冷腸の冷腸とあざけられる腹は夫ながら煮えくり返る。苦しむ妻を見る目も綾、それにしても謀の刃を缺かれたかと思念徒らに牙を噛み鳴らす處で、岨道からむらく寄せる城兵、妻はおびえて谷底へ眞逆さま、あなやと見る間に敵は早前後。爾來谷底の水どすぐろく岩を拍て盡きぬ怨みに咽ぶ聲計りどろく。(畢)

その一しづく上

「いかにせん、頼むかげとてたちよれば猶袖ぬらす松のしたつゆ。此處を木蔭と見立てた甲斐も無く、つれなくも頬にしたる一粟は直に涙と言つても宜いやう、根の下で蟬の死骸を曳く蟻さへも羨ましくなるのが人情。まして命を頼み、頼まれた境界に於ては？ 昨日までは星を掛けたと言はれた兩眼、今日はその星にも雲が掛かつて、そして昨日まで春ともろとも縁を凝らした黒髪も今日は雪と降りかわつて、冬木と共に骨立った四肢五體、その老年に於て杖とも柱ともなるのは誰あらう虫をかぶらせたり、乳房に喰ひつかれたりした我子ばかり。一歳、二歳喰ひぞめ、帯解、親は願ひながら燕になつて子をば鷹と見せたいくが母親の阿今が懐胎以來十六年の今日に至るまで懸はらず抱いて居た宿望、



まつのしたつゆ

念が届いて天晴仕上げの出来た我娘、横から見ても縦から見ても其肉は一切可愛らしさの塊り、目は些世の人が言ふ美人の標本とは違ふやうの物の、じつと母に凝らした時の其やさしさ形は何うでも愛嬌がと今更子のために辯護を新に工夫し出すまでの辛苦、唯なら身體も瘦せる位、たゞ其瘦せをば愛情に償はせて、いざや最う年頃、文學士か理學士か、洋行歸りか財産家か、兎に角立派な婿を取つてやつてと見ぬ内がたのしみ。雲を遠山として待ちに待つた志願が終に天に——嗚呼通じぬとは！ 娘の末子は一ヶ月ほど前から肺病で床へ就いたぎり終に十六の秋を二期として菊よりも早く凋んで仕舞ひました。

娘が萬國史とやらを讀んで聞かせて呉れた時何の國でか昔死んだ後人間を腐らせずに陪はへる法を知つて居たと言つた事の有つたやうな、今更その國が羨ましく、野邊送りに人足が威勢よく来る、そのしヤツ面も憎いやう、坊主、いゝ氣に爲つてよく頭を剃つて、花屋、馬鹿！ 香奩を持つて来る、御佛前へとして贈られた蠟燭、あゝ嫁入りの高張を照らす運を持たず、金子を包む黒水引き、可哀、赤と終になれず！  
それでも慰めてくれる人の有るのが切めてもの心やり、いッそ娘と一處に死にたうまいますと——心から

——言ふものゝ、猶深切な人は坐に有りがたく、繰り言は百度千度言つても同じ事ながら言ふ身には物あたらしい心持もするやうな。

家は紫より後家ぐらし、大した規模でも無いところ、一人の下女は紫處に掛かり切りて取り次は來合はせ居る親類や手傳ひが爲るといふ始末。勝手不案内横町の阿絹さんと阿犬さんを通じる程の埒の無いところ、御免なさいと言つただけを通して音信れたのは近處の小官員の細君阿黄楊でした。見るからが替の奈良人形とても言ひたい小づくり一寸愛嬌の有る顔立ちで、悪く言へば西の市の阿輪女郎が活を入れられて現れたやうな、つばくとした唇から管で吹くやうな聲を吹出しました。が、深切者、眞底慰めて、

「實に何とも申しやうの無い事でういます。けれど、れ貴母、御身體に觸るやうでは又……ですから餘り……」  
阿今は既に手拭を顔、見るまゝに阿黄楊も聲をうるませて、

「御もつと……本當に御可哀さうにいゝ御嬢さんでういましたッけねえ、惜しい事で、本當に」。  
「約束事でも、漸く阿今が「ういしましたらう。とは存じますが彼娘がつねく優……息を引きとります時





貰ひたいと仰つた事が」。

「あゝそれてういます、それぢや全く。そして何てういませう、阿嬭さまには別に御婿さんが大抵御さまりに爲つて居て、それで千塚さまの方なば御ことわりに爲つたのでういませう。」  
「はい左様でういました。御存じの通りあらかた婿も決まつて居りますのでそれて千塚さまの方なば断りましたがそれで」

「てういませう、まつそれが根だと博野さんも申しましたよ。元千塚さまは大變阿嬭さまを貰ひたいと思しめて居ちつしやつた處が、それが思ふやうに爲りませんでしたもので——なんて博野さんの口振りは先左様でういましたよ。ぢや此方さまにも御心當りが御有りの事でういませうね。」

意外と言ふのも言へぬ程の怪しい忠告、虚か、眞か、其處は分からず、しかし言はれただけの事は主婦の胸にも答へました。病人の枕元にあつた藥瓶、それもまだ捨てられずに残つて居る、その方へ目がまつ一向き、向いたばかり、思案や分別をば今嘆きが横へ押し片付けて居る境界、その説の眞偽を考へるよりは唯阿

黄楊が頼もしいやうに思はれました。が、それも唯それだけ、更に其忠告の奥を深く問ひ正す心は混み上げる千萬の思ひに封ぜられて益には立たず、何か死んだ阿末が幻の姿をあらはして我身を掴みに來たやうな心持ち、果ては座に堪へずわづかに一言二言言つたばかり、次の小部屋へ入つて、床を取らせて——それまでが僅に正氣でした、床へたふれるや否や一度にほどばしる涙、其座敷には早入の出入りも否、「うつとしいから些し……」——化轉する下女を泣き聲で思ひ入れ深く叱りつけたばかり、掻い巻きを被つて——跡は掻い巻きが小ぶるひをするのみでした。

阿黄楊が言つた事が本當に間違ひなかつた物なら言はずとも千塚は娘の仇、引きつづいて親の身にもまた七世までも敵、それも何の事、大した生き死にの昔の怨みが有ることか、唯くれる、否やらぬと言ひあつたそれだけが原因で人の——字にも宙にも——掛け替への無い、命とおなじな大事のく娘を、あられも無い、と先きて盛り——あら身も疎とする——殺たとはても何の因果。思へば今が今まで氣も附かず、診察に

来る度毎苦勞に瘦せて指環さへも確とはとまらぬ指を合せ、手を組んで拜まぬばかり、目には涙をさへ——  
 それも娘が見たなら又氣にするだらうと思へば殆んど顔を背けるほどで——溜めて干塚に千言萬語、「大丈夫  
 夫てふいませしやうか。いつ頃なほりませしやう」深籠の破裂に仕方なく板子一枚で浮かぶ者と同じこと、頼み  
 と思ふは唯一法、醫者ばかりが力に爲つて居たものと思へばく口惜しいこと。人ッ！ 垢の他人の醫師が  
 何で可愛からう。何で尊からう。娘を活してくれと思へばこそ。

病氣見舞に貰つた菓子、旨さう高さうと見れば半分を病人に食べさせて、そうして半分をば醫者に裾分け  
 する、それも何故、娘のため、何で只で醫者に食べさせたからう。その外の心附け、来る度には下にも儼か  
 ぬばかり——可愛い娘の花聲でも受けられぬ程の取り扱ひ——手前勝手と言へば言ふもの、唯々それも娘  
 のため。それで、畜生、恩しらずめ！ 殺してくれと頼みせぬものを——人ッ！ わざく殺す醫者が  
 何處に有らう。

夜着一枚、下げ鬘、せきあへぬ涙にいとと厭しく、皺の寄るまでに兩眼を閉ぢて——そして最う入ぬ齒、

齒の根も折れるなら折れる。炎々の頭に熱して目は金色の霧さへ降るやう、一夜で白髪になつたとか言ふ昔  
 の愁嘆はこんな物か。たちまち夜着に小捲きをさせるかと思ふ内に突然と跳ね起きて蒲團の上に座りました  
 が、その顔！

毛が亂れて頸の肉がわなわなして居ました。  
 ほつと吹く呼吸、繪にすれば火炎に彩りさうな。つまり切つて音さへ出難い鼻、餘儀なさに荒々しく口で  
 呼吸をまた二三度、帳るやうな舌うちをしました。

「だが本當か知らん」。阿黄楊の言葉とて元々一方から見た銀の橋、一概に信ずるのは胸の狭い事。人を殺  
 すといふのは言はずとも一大事、その一大事を内弟子が——何か先生に怨みがあるのか知らぬ物の——左様  
 かるくしく人に咄すと云ふのもまた變な譯。と思へば緒手巻きを繰るやうに、宛がら呼び出されたやうに  
 胸の目に映るのは醫者の干塚、その悪人の面——しかし邪心の有りさうでも無い、可なり柔和な。諺にも相  
 は「心をあらはす」。しかし、また諺には「人は見掛けによらぬ」。つらく今までの干塚の案振りに不

糸が有るかど更に向きを變へてまとまらぬ記憶を精一杯にまとめ上げて考へれば、ていつれない、何が無し  
 矢張り何方付かずの材料が備はるばかり、御好きなのを召せと誰かに傍で冷かされるやうな心持ち。われと我  
 を冷かした果ては恥ぢが一度に混み上げてまた前後ほとんど夢中になる。何故早く考へが付かぬのかと苛だ  
 つ、苛だつほど考へは逃げる、泣き顔を娘は隙と見せる、鼻をついて干塚はにやりと冷笑ふ、何うして  
 も重みの傾く處は怨みと邪推との集まる處でした。

後家となつてからは娘が餘命の綱、その綱が人に切れた程の不運の身、思へば行く末さへも案じられる。  
 先き立たれて何がたのしみ、人は命あつての物種とも言へ、娘に死なれた身は娘あつての命。その娘は眉織  
 く終に眠つた、その跡永らへるさへ強面い事、たゞ嘆いてさへ寸分の試し、骨も肉も日にく削られて行か  
 う物を——その命を無いものと思ふのは最う譯も無いこと、たとへ水にしる火にしる何のこはい事が有らう  
 今の處さながらの班女、唯班女はわが子の相手に遇はなかつたため唯悲しんだだけ、それと阿今はすこし違  
 つて相手は見すく近くに居る事、後だ細つても身體が勢づくやう、口惜しさと腹立たしさと惡らしさと

に騙られて、唯蒲團の上に身柱もかまはず坐つたばかり、何か思ひついた體でも有りませんでした。泣きぼらした  
 目に暫時仄に笑みを含んだその妻さ、同時胸ふるひさへしたその氣味わるさ。日は暮れかかりました。窓を  
 向ふ新月は暗殺に用ゐる鎌を研ぎすまして居ました。

謎々か、その新月の鎌も、あゝ果にも用ゐられた——果、しかも、死んだ娘と一緒に見た芝居で爲た、狂  
 言の。それは夫婦の間の嫉妬、是は親子愛惜の怨み。兎に角後家で娘を育て、來た程の老女、くづなれて唯  
 嘆きに蝕はれて居たもの、猶利かぬ氣は有りました。後家世帯で永年世間の無慈悲から意地をつゝかれ  
 た果ては終に平和な天性もいくらか横にねぢられた處、今盲目の怨念が身をせめさいなんだ末は命もいらな  
 くなりしました。

「嘆げとて月やは物を」詩人は澄むとも見る、自分には冷……淡……鐵のやうな月。次第に移る時刻、西山  
 に名残の色を血色に掠めて、今は星も銀粉をこぼして誰かほじり出してもしきうな空合ひでした。頭り氣は  
 愛想にも無く、おれつたそうに時々あばれる般風——風、このやうな風の時には昨日までは娘と共にひび薬

をつけた事もあつたものを。

苦痛のために天地は定まり、恨みのために身は出来たやう。千塚から来た薬瓶、その貼り紙も小癩にさはる、むしろ瓶共にたゞきつきたい。たい鼠に投げる器、その瓶にも娘が飲んだ薬が有つたかと思へば……あゝ涙!

眠りもせぬ内ながら宛然夢うつ、心だけ身を脱けたやうな心持ち、處へたちまちその茫然となつた耳を胸と共におどらせた音!

「打ち付た半鐘の音。おやと思ふ間、何やら違つた近處の様子、われ知らず中腰にやゝ立ち上がりさうになる處へ更に耳をつらぬく人聲——「近い!」

急にかわる人の足音。家内に來て居る人も一度にざわ立つ……窓を明けて……見るといへぬ間……其邊は一面の紅!

「こりや近いんだ!」誰云ふとも無い一様の言葉。胸ふるひ! 息切れ! 提灯に火を點けやうと思へば幾

度も消える、繩でからげれば繩は切れる、その内に駈けつける知り人。その人の有りがたき、命の親に逢つたやうな。今は嘆きも度なうしなつてか、影も見せず、主婦だけに傳令にいそがしくなりました。わづかの間火元を——見る間もなく——聞き定めれば三軒ばかり風……あら……! 上の家からとの事。土蔵は無し、荷をば運び出す事、阿母さんは荷の番にといたはつて忠告されても流石に愠て家をば去りかねて……

米櫃の中へ洋燈を入れるやら、つまらぬ物を大事そうに持ち出させるやら、引き出しを落として火鉢を出させるやら、鍋を掴んで手に草紙をこしらへるやら、その中でも第一の物は金子、愠だけはすこぶる正氣、胸巻きにして腰へと付けた間、兎角手傳ひも少くなつた體、袖を引かれて氣がつけば火がついたから早く逃げろと。おやと總毛立つて家をば飛び出す、出て思へばさあ大變大事のくの娘の位牌を忘れました。

「これ何を……阿母さん」。あわてゝ火の中へ飛び込もうとする阿母をおさへて親類が叱りつけても返事はなく、「わすれ物が」と只一言。「わすれ物なら私がつて來るから、婦人はあぶな……」

言ふ間もある事か、ふりもぎつて戸——既に火でそりかへつて居る——戸をばねのけて……同時に追ひすまつのしたつゆ

がる親類、たゞ追ふばかりでいつか家の中へ……

はいッて見れば急忙の折ながら、あゝ目にもつく、娘が病んで居たそのまゝの座敷、薬瓶、見舞ひ物、こればかりといふ意氣こみて腕をのばして振いつかみ、やゝ僕へ入れる間にも、位牌の金泥は側の猛火をてりかへして涙に重い目に見り。

やれうれしいと思つた物の、見れば火は既に天井にもかゝつて節無しの杉をひらくと這ひ渡る凄じさ、その間右ひだりから噴く金粉——あつと思つたのは最初の内、早もうそれらの感じも無し、たゞ咽せまいと思ふ一心、這ふやうになつて歸りかけて一面の烟で戸まどひするばかり、多分一途にはいつた親類、此方へと力をまわめて引くやうな現の心持ち——その間、發矢、猛火、風が加はつたか車をまわすやうな炎のいたけり、はッと思つたやうで、そのまゝ……

うつらくとした心持ち、どんよりとした目をかすかに開いて枕元を見れば、笑ひ顔をして坐つて居たのは醫者の干塚でした。

「いかゞです、御容體は？」音つた聲も寸分ちがはぬ干塚、おのれ仇敵と、疲れた身體ながら怒みて目は一杯。

「飛んだ御危難でございましたが、もう大丈夫です。御氣を御丈夫になさい。」

それにしろ、何うして干塚に自分が世話になる事やら譯は更にわからず、わからぬ儘不審の目を四邊へめぐらせば、おや！親類たちも側に居ました。

身をかへりみれば布で縦横に巻かれたばかり、片頬はひりひりと痛むばかり、何故にかう爲つたのか、此處は冥途かそもく娑婆か。

「おツかさん」、聲をかけたのは親類の一人でした、もう御氣を御大事に……まア御喜びなさい、あなたの命はこの先生に救はれたのです。

「阿末さんの御位牌を御出しになるッて、貴母が焼けて居る中へ飛び込んで、そしてその内に火がまわって實に貴母は倒れて御仕舞なすったんです。が、好い願梅に千塚さんが其處へ……」

「で、是はッかりは素人わざでは行かぬ事、貴母はもうそのとほり箒りまくって片頬に火傷を爲さったばかりか、それで氣絶まで爲さッて……それから直に、出した壘へのせて先生の此御宅までおくりとつけて御療治を願ひましたので……」

何處やらちがった家と思つたのは矢張り本當、それではこゝが千塚の家か。

「まづ命に別條なく斯う御恢復に向ひましたから最う安心してす。實に重ね々先生には御世話になりました」。

あゝ何事！ 昨日までの仇かたきが！ 聞いたばかりで、身が身で揉まれる、兎に角うらんだ内心、あゝ口惜しくもあり、恥しくもあり、阿今は涙に溺れて火ぶくれの手をあげさせたばかり、平伏て唯一聲、――

「も……もツたい……」

(をわり)

### 第一 味方の影武者

黑白等分に合はせた處で上品な鼠が出来るとの染物師の説明、それにも思へば道理は有り、冷温平等に交ぜ合はせれば怪我人も遣入れる程の快い湯が出来るとの三助の口傳、それにも同じ理屈は有り、むづかしく言ひ直せば「中は兩極の和、足利十何代といふ天下、それでも惑心に持ちつゝけた根本、廻ッて見れば尊氏直義二人有ッて始めて足利といふ天下も有ッたといふ丈の事、足利の天下は尊氏の黒に直義の白を混合して何か鼠らしい物が出来あがり、兄の温湯に弟の冷水を調合して湯加減が出来た丈の事、兩極の二人が陰陽相調和してはたらいいたのが王家に取つて實は飛んだ災難でした。つらく考へると餘程の不思議、翻業は古に短く後に長し、頼朝の天下わづかに一代、折角の水たまりが一朝



乾いて、跡を王家の水が占めぬ間、再び第二の覇業が代つて北條の天下は流石に九代、頼朝の比へては八代が儲け物でした。泰時の默然嗟然、時頼の行脚三昧、慈は子孫の末をも思へば鎌倉の火攻骨骸の埋つた上を敵衆に踏み躪られるのが苦勞と有つて夢にも稻村が崎からの寶刀獻納をば思はず、替々として後のため北條の天下萬々歳と希つた末、馬鹿を産んで烏天狗に迄魅込まれ、九代目でぼっくり倒れて覇業の水たまりが又も乾く。それ此圖だと清水濁水、王家の清水も擾亂の餘とて忽ち濁つて濁水と分別付かず、泥氣の強い方が反旗を取つて再び其所で足利の十三代、即ち北條に比へて四代、頼朝に比へて十二代の儲け物でした、但し無理こぢつけの十三代、十三代の中の精分は先祖二人の兄弟に集つて、残つたのは何れも出し殻、連の潮に御茶を濁して、出来合ひの打ッ付け普請、根太が抜けたたり、天井が落ちたり、やれ大内が暴れるの、やれ赤松が風に鳴るのと其苦勞で日がな一日、果は八方からのむしり取り、根太板を持ッて行ッて細川どの、屋根板をめぐり取ッて去ッて山名どの、釜の下焚付から縁の下芥垢まで洗ひざらひ手あたり次第持ッて行つた盗賊どもが體のいい顔した何の何殿、群雄とか諸豪とか形容上手の後世に評されて、何の死んでも残り

をしくば！それからして織田信長、八分どほり成功して、赤松玉と諸共に身上までも潰して仕舞ひ、小利口の猿而冠者が都合ひから小股をすくつて威張り過ぎて力負けし、三河萬歳がとほけて出て来て、濡手で泡の十五代、足利に比へては又二代方の徳川とは名からして何さま考へたもの。何にしる餘程の不思議、残りものに福が有るか、末つ子だけに智慧が付いたか、覇業は後世に及んで壽命が長く、頼朝の總領順縁、兄は愚慢、弟に負けて、足利が兎に角無理算段でも十代以上に漕ぎ付けたこと、感心ともい言へるなら感心なこと、不思議といへば不思議な事實、それも是も大頭の只中人野氏兄弟の力とすれば、全く二人も馬鹿でなし、自然の性質よく分擔して撞着せず、衝動せず、黑白と冷温相救ひ、しかも時機の彈機にかいつて、見る所丸二つ引きの旗じるしも遂に東山おろしに吹々麻かせたまで！

天下やうやく定れば、つれば物哀れな秋も今は引かへて花々しく、故郷へ着る錦の紅葉、萬代の香を吹く黄菊白菊、ことしの京洛は秋に一點のさみし氣も含まず、恩賞を受ての俄分限。何處の馬骨か知れぬ武者も長陣の束ね髪、わいた儘に爲つてゐた半風を昨日今日は淨衣美食、櫛とかいふものさへ奢つて梳つての高わ

らひ。飯の上の蠅、蜜に寄る蟻、京洛の繁華に此處ぞ賭け時と賭方から入り込む、出處あやしい美人の群、それに引ッ掛かつて無け無しの分配一夜の夢に空と爲らせ、野太刀で刺つた髯の刺り痕、阿嬌に見えたなつかしい其夜の紀念とばかり残り残られて、つる／＼と撫て、氣抜けした顔色なのもなかく、やゝそれより立ち優つた部類に至れば、一夜だけの花妻、一夜にしかも四五人おこつて、いたいけな白魚の緘指に、何の生意氣な沙汰、牛の背皮其處のけといふ肩を揉ませて「肩癖でおちやるから」とは野斜張つた言ひ草。一里さきの敵陣煙塵漠々といふ風の日に眺めるかといふやうな目付き、鼻ばしらの土壘から曲げて掛つて、目を細くして女をながめて引き招き笑ひに日を送れば、麝香しいたづらに早く進んで、浮世の五十年、人間の生命といふもの、其變な、脆いやうな、また脆くもないやうな生命とかいふものが此秋に限つて盡つた。

ひとり下人ばらのみて無く、然るべき何の何某、金金物づくめの太刀を佩く位身分でも同じく柔弱な遊びを専一として、曾て讀まなかつた歌とかいふもの、それも戀歌から味を覚えて「悲しき」「戀しき」で頭痛持の配下を憐ませ、血みどろの陣幕にはかに懸つて軟障香帳とも爲れば、血腥い香よりほか鼻の無かつ

た戦武者が袖の伽羅の可否さへ観ぎ覺えて、美人に褒められてのぞく／＼喜び天下の大半が押しなべて是、それ故に碌な政事は行はれず、哀れ藤房は野暮と名を替へ、正成は客と呼ばれて、宴席に亂舞の手振り武々しいといふよりは柔かいといふ方が褒められて、恩賞吟味の評定所でも晩夕氣の目蓋重く、吟味最中同役と欠伸を噛みながらの惚氣三昧。百貫の土地、人に遣るよりは自分が取りたし、自分が取つて思ふ御人に呉れて遣つて、其ぶり／＼した細の頬に笑際を出させても見たし、何の雜兵が何なくと／＼と、死首でも拾まはつて居たらうに、まだ恩賞が此方にまはらぬとは虫の好過ぎる、其手には乗らぬと頑固を徹せば、一時は非理も理となつて、それだけに怨みは皇家に掛かる。下人ばらの情無き、一團に此依怙を禁裏からの沙汰とも思へば、敬愛の氣よりは憤怒の情が勝つて、哀れ風雪を叱咤する大家儀も現はれる、機會に乗つて離反して、此恨みかへして呉れやうものなと密々の共談議。蚊の聲も集れば雷で、地下のぶつくさも流石殿上により／＼聞える、それながら一方は空腹、自尊は堂上の常の癖とて耳にも止めず、耳にとめたがる藤房は苦勞性と冷かされました。



二日三日降りつゞいた物哀れな秋の雨、今日は久しぶりで晴れて、天地まるで活き返つたやう、打ち惱まされて萎れ顔の村萩も泣き顔ながら首を擡げて、夕日に露の簪をいろどり、塵も取れて一際紅、紅葉の色目もまばゆく、漫ろ歩きには肩寛といふ日の下、夕陽に身の影を長く引かせて、睦しく晰しながら角屋敷の横を過ぎて来た二人の雑兵が有りました。年の頃はいつれも似たり寄つたり、戦場を経た肥後か、一人は跛で、足元が本人より却つて傍目に危ぶまれる程、さり乍ら血氣の人物、物語る音聲は極めて太く、下知の取り次ぎには錢で雇つても遺憾はなし、高笑ひをするのが好きで、今一人とは全く反對、一人は小音で稍弱び聲、色も小白くて愛敬たツぶり、人形食ひの被衣連にはちやほやと言はれるやうな、何れも年の頃は三十足らず、素はだして泥を踏んで彼一句是一句、人に聞かれても構はぬ顔付き、聲の太い方がせしら笑つて、「さもさうず、さもくく。天下ふたたび亂したい心でや恩賞も拒むであらうよ。何の、生あない公家づらが！ 生あない面して片腹いたいわ、評定沙汰、例非評定が何にならうよ。吾儕にくまれて牛車の妹許がよひの道すがら此又食はされぬ用心が要ちやわ」と言ひ訖つては例の癖、委細かまはぬ高わらひに、一

方も笑坪に入つた彌梅、足までも傷つけられて、は、恩賞も無い哀れさよ。喃和郎の口にしたたかなるに、思ひ知れ、それも報いと——口は叩くまいものぞ」と隔てぬと見えての冷かし文句、聞けば聞くだけにまた高笑ひして、投げ節にして歌ふ小唄も時節がらとて殺氣満々、——

「血しほ吸りて

血しほすゝりて

血しほすゝりて、

酔ふて舞へば、

太刀もいつしか鞘ばしる、

鞘ばしる！

阿修羅王でも

胎ぢやえ。

来いよ、つばもの

一太刀かざせ！

春はあけぼの、

眠りざまし！

口拍子で面白さうに語り澄ませば、おのづから足並も揃ふ小氣味好き。思はず知らず興に入つて、吾知らず佩刀をさへ抜き放して、發矢とばかり勇ましい掛け聲道傍の立木を片手なぐりにした、それ迄の勢ひ、そ

れにさて似ぬ手の内、無残や又は幹に食はれて引いても動かず、をかしさに又高笑ひ、やうやくの事でもぎ放して、振りまはして行く埒の無さ、最前からして後ろから同じく歩いて来た四人ばかりの是も雑兵始終の様子を見て坐るにをかしく、一兩人われ知らず同じく高笑ひを合せました。

始めて心付いて、前の二人はたちまち屹と後を見かへり、しげくと四人を眺めて、笑ひ顔で言葉を掛け、「御身たちは何處でおぢやるの？ 評定所の歸さて御ぢやるか？」

打ち解けられて一方も、

「仰せやツたく、評定所の歸さて御ぢやる。呼ばれた故に出で、來れば人を何と、御聞きやれ、鎌倉入りの合戦に一人で首六つ七つ揚げた吾々たちを神妙ぢやと言ふたばかりで追ひまゐるとはつれない沙汰ぢや。少なくとも黄金いくらか首一つを一枚づつと定めても、喃、六枚七枚は有るべいものを。世は未ぢや、詮無う御ぢやるわ。」

休戚を共にすれば懐かし、前の雑兵も身を入りこませ、同じ失意の段を喋々すれば、いよく雙方の話

しの種は盡きず、とても是では天下も定まるまい、何ごとも世の運命是非も無いと、彼も是も音ふところは異口同音、果は物語りは益々進んで誰か一旗なびかせたらとの下馬評にさへ移りました。前の二人の雑兵は北島から蕪出た奥州武士で、後の四人は新田方とか、併しながら銘々の地位については何れも甚しく不満でした。今こゝで反旗をひるがへして天晴名望も有り略も有り、成功の望みの有りさうなのは誰であらうかと一人がいへば、撰定の評論もそれからほしく湧き立つ、北島親房は忠誠で有るが歴々だけ、顯家は才子だけ目方が輕し、義貞は名望もあるが愚圖の方、赤松は遺手だが意地が悪るし、正成は正直で評するほどの地面は無し、さて誰だらうかと流石にまよへば、後の四人の中の一人が冷笑して、さもく心得た顔付でした。

方々は足利を知らないか。吾々は現在義貞の手、頭人をわるく言ふては無いが、器量に於ては逆もく義貞は尊氏に及ぶものでなし、門閥の同じである丈、大抵名聲も相似てゐるが歸する處は名前ばかり、もしも尊氏にうんと兩足を踏ん張られた日には中黒(新田の紋處)の旗風決して吹き哮つたもので無いと理を割つて説かれて見れば、何さま一應の道理はあり、さういふものかとつくづく考へて、其氣になれば如何にも以て言

はれるような事實は有り、面白いからもつと評論を聴きたいと強ひて勸めて最早百年も馴染んだ狎兒、前の雑兵は後の四人を自分の許に誘ひました。

第二 奥殿の密語(上)

前の二人の雑兵に誘はれて後の四人の雑兵も其宿まで行く道すがら又さまぐに足利兄弟の人物を喋々する有り様、正に臙附を解剖して、蛔虫の所在まで見せるばかり、感に堪へて前の雑兵も志しはほと／＼動きました。

四人の雑兵の言葉によれば、尊氏兄弟は不世出の人物でした。腕が有るか、能が有るか、其邊は言はぬとしても士に下るといふ事が二人の獨特の長技であつて、此段から言つた日には恐らく今日義貞だらうが、正成だらうが、とても及ばぬとの事でした。慾が有ればこそ攻城野戦死屍をさらす迄も奔走する身、そこへ持つて來ての的樂は厚遇優待を受るとの一事、それに優る力は無し、尊氏兄弟の獨得が士を愛するといふ處にあると聞けば、また今が今現在恩賞を朝廷から拒まれて失望して歸つた矢先、焼け石に水、油に火、一も

二も無く感心しました。

それは是する内やがて宿所、前の二人は自分たちの溜りまでやゝ來たとて粗酒一献酌みかはしたいからと頻りに勧めたものゝ無駄でした。後の四人は何の仔細か何といつても承け引かず、御志しは忝けないが、もはや彼は日も暮れた事、定めの際限に歸陣しなければ、また大目玉を頂戴しなければ爲らず、それが否に早くかへる、重ねてまた來て其時と一向に辭退しました。刻限といふには強ひられず、猶いろ／＼伺ひたくて、此儘別れするのは残りをしいがそれならば重ねて又貴意を得る事にしやうと懇ろに言葉をつがへ、二人は四人の者に名をさへ名唱り、やうやくの事で右と左り、二歩三歩はなれたと思ふ間に四人の足は俄に早く、おやと言ふ間に宛然飛ぶやう、夕月の影のまだ薄くほのめく、忽ちの内に姿を隠しと遠ざけました。

跡は溜りへかへつて來て聞いたまゝの取り次ぎ、云々との事を説き誇れば一同も亦感じ入る、それにしても足利兄弟、二人の人氣を取る事の上手なのは豫れてから聞いても居たが、實際どうかと思つて居た矢先、誰もかれも萬口一致、さう言ふ處で考へれば、何さま身を寄せても細み甲斐の有りさうな譯と一人が言へば

一人も同ずる、見まはりが来て、「騒がしい、何をほざく」と叱るまでは村雀の共さへつり。が、思ひもつかぬ事、何ぞ料らん、前の四人の雑兵その中にも而も現在のその尊氏兄弟が交つて居たのてした！

蟻のさゝやき、聞く氣でも一尺上の縁側では聞き取れず、下情を知らなくてはとの注意から近習二人揃へての忍びてした。恩賞の評定所もよりには失意の壯士が群がるとの事に其處を一本鎗目さして来て、案の如く相手を見付けて、それとなく自家製造の引き札、しかも白々しい現在の直義が眞に爲つて自分たちの器量の好さを喋々し、小計ながら圖に中つて、怨の餌は早く下郎の胸を噪がせ、粗酒一献とまですゝめられて、やがて秋を分ちました。すなはち顔を見られるが心配、幸に前の二人には何とも心付かれなかつた物の、溜りへ行けば安心ならず、それ故に見切りました。

さすがに主従の間から、同様に打扮つた四人ながら、主人兄弟は先へ立つ、それら二人の人品はさすがたゞ見ただけでも一癖は有りさうてした。尊氏の顔付きは溫和な方、直義はしまつた方、尊氏は太り肉、直義は瘦せぎす、目は雙方ともに普通な方で大きくは無いもの、一方は並で一方は稍目尻が兄よりは上つた方、

日に焼けた段に於ては雙方いづれも怨みツゝ無し、而も下司下郎と違はぬばかりの色の黒さ、よくも似たも

の二人ながら鬚は薄くて、其邊に威嚴は些しもなく、唯こゝらからして見た處ではつまりらぬ平凡の人物でし

た。

前の二人の雑兵と秋を分つてから姑くは主従一切無言でした。後に立つた近習がなり／＼さも心配さうに後を振りかへる位なもの、殆んど走る計りに爲つて元來た方の道へと急ぎました。兄弟二人は立ち並んで歩く、歩きながら時々は何かわからぬ片言をせはしい息の中から應答して、御互にはそれでも分かるか、ともすれば忍んでのくすくす笑ひ、兎角して五六町、前に過ぎた評定所の横手へやがて來かゝるや否やたちまちに四人の足並は菫にかへつて靜かになる、夕月の光りやうやく濃く、まだ乾きはてぬ木の枝草の葉は揃つて白銀の玉を綴つて、無情な風の吹かぬこととして、折角のかゝわい玉をもぎ落されず、立ちまよふ夕霧の色は月魄を吸つて蒼白い統の帳を張り、虫の聲ばかりして人足も無く、風情といふ事を知らぬ身にも扱こゝるよく見えしました。

もはや人目も絶えて安心といふ體、そろく交はる言葉もよく辭を成して、それに足並の遅くなつたのもその證據、ゆるやかに尊氏は弟を見かねて、早くから言ひたかつた胸中今はやうやくといふ氣色。

「眠くるしいばかりの御身のたくみ。聞く身も大方冷汗をおぢやつた。忍びありきとは知りつれど、あれ程の事があらうとは更に夢にも知らなんだ。」

幾分か此方直義は得意な顔付き、冷汗であつたとの言葉に笑ひ出す近習二人、その方を尻目てじろり、同じく自分も微笑して、

「たゞし巧く中りました。あの後の評判、そののみ聞きたうはおぢやるが忍びの事とて人多き溜りには参れず、聞き落して残りをしう御ぢやる。さり乍ら雑兵どもの受け答へても正しく吾々の名前に焦がれ出いたと見えまいた。」

「はじめ御身が彼等二人の雑兵見とめて、の、云々の計謀を仰せやつたが、その時尊氏は心にもとめなんだ。何の淺々しい女々しい企圖、小き刀で首刎れるやうな企圖で敗いた處が相手は新兵、さしたることになる

べうもあらぬ。と思つて心とめなんだ。御身が頼りに心進むまに、さらばと其儘に爲つて居つたに、餘所目まばゆいばかりの、喃、…且つはしらしく聞く身のをかしさ。改まって御身が餘所事めかいた始終には坐る思ひも付かぬ放鷹した。」

「は、放鷹！ 珍事御ぢやつた。小き刀で首刎れるが如き小き企圖とは仰せやれど、蟻の塔より堤とやらん、人を手懐くるは些細からの事御ぢやる。假面かぶらいては先程のそれがしのやうな白々しい言葉は扱言へたものでは御ぢやらぬが望みある身はさばかりの事厭ふてはならせぬよ。」

「は、例の…例の癖ぢやな、直義の。細かきたくみを御身は好むよ。」

いつか科立たぬ間に邸宅の裏門、無難で忍び歩きを了つて流石それでも一安心、まづしばらく寛いで休息して行けと勧められて、直義も同意し、兄弟二人連れ立って、わざと人目を避けて大くどりから中へ入り、無難に奥へかへりました。奥書院に兄弟只二人、近習をさへ遠ざけて、残して置いたのは僅に一人の端履從ぐらゐのもの、子供だけに眠がツてこくく、居ねむりをする體、それも見て見ぬふり、むしろ安心といふか

の右様、二人膝をつき合はせて、密話が切りに濃やかでした。

こゝで尊氏兄弟の前の應答に立ちもどれば、正にそれだけの言葉にも二人の性質は現はれました。例の癖で直義は細かい企圖を好きだと言つた尊氏の言葉、其言葉は一言二言の物ながら直義生まれてから死ぬまでの特色をよく言ひあらはしました。

兄の尊氏とは形を變へて、小刀細工をするのが好きで、則ち直義の生涯は小刀細工で埋まりました。心の綿密に行き渡るのは何と形容していか分ならず、物の形を知るに方ッては須らく其成分を見ろといふのが直義の持論——と言ふも過大ながら——何しろ平生抱いた考へ。それ故か、何事に當ッても直にそれを碎いて見る、其儘にして置いて見る事は決して出来ず、自然すなほち内面のいろく、善も悪も損も徳も一樣に目には入る、それ乍ら碎いた丈に後で纏め上げると言ふ事がまづ仕悪い方でした。一人の新舊の武士が來て始めて見参に入る、すると直義の目に掛つたが最期、左からも右からも四方からも八方からも色々な糸をあやつり出して、其性質をたしかめやうと櫛々に揉みこなされる、右で詐つたのもいつか奔命に疲れてやがて

左りから見やぶられる、それからして見破ッて直義自身その人間を一まづ自分と比べて見る、此處はどうで、彼處はあゝだ、やれどうだ、やれあゝだと詰る處は其相手を大抵は呑みだけてした。曾て正成の盛名を聞いて竊かに心に烟たくおもひ、而胞の出る程逢ひたがり、一度逢ッただけで其後は忽然としてまた忘れたやうに口くされ正成ときへ言はず、怪んで尊氏に問はれると、せうら笑ッて、太々しくも呑みに呑んだ返答、馬鹿律義の雛形だけに此世へ生れて來た人物に幾度も逢ふには及ばぬとの言葉、さすがの兄も一言の下に呆れ果て、笑ひもされず……

第三 奥殿の密話(下)

小刀細工を直義は好む、好むだけ又上手でも有り、失策は大抵無からうが、それでもいざと言ふ場合ひ、大刀一斷といふ目ざましい手の内と太刀うちしてそれが勝てるか覺束無い、己れは左様おもふ、とは尊氏が折りく〜に弟に加へた訓戒でした。併しながら、何にもならず、大刀一斷がいといふ其本人その人はどうかと云へば、口さきだけで果斷の實には乏しく、言行が一致し得るといふ處迄は中々遠し、言はゞ行へずに

音ふだけでしたの。それを見るだけ直後らひるまず、兄が鹿爪らしく勿體ぶつて訓戒を言ひ出せば、こらへぬまでに吹き出して、文句も無くてのげなく笑ひ。つひ今鹿爪らしくした人も釣り込まれて笑ひ出す、訓戒はいつもいつも加へたといふ名ばかりで立ち消えしました。或は時として直後から逆捻に兄へ取つてかゝる事もあり——大刀一断をいひ張つて、虹蜂取らずになるのが好いか、小刀細工と看板出して虹ぐらゐ兎に角取るのがいいか、牛後よりは寧ろ鶏口、たゞし兄上には、一派かはつて牛後を御好みになる事かと薄い唇をうるほしながら微笑を含んで遣つて掛れば、兄も其時は笑つた計りで無言でした。でも生れ付きは仕方なし、天性は一言二言の珠磨に掛つて、光りを變ずるものでもなし、昨日の兄が一變して今日の弟とはならず、松はやはり縁で、藤はいつも紫、両端に立ち離れて、一方が正なら一方が負、事を行ふに當つていつも議論が無くては濟まず、兄が防げば弟が破ぶる、いつりくそれのみでした。これでよくその結果が満足に出来て、兎に角それら兩極が一味合體も出来る物とは十人が十人ながら常にみとめた事實でした。が、歸する處はそれ丈の原因、即ち兩極を言ひ張りながら、但右へねぢり、且左りへ傾き、さうかうしてゐる内、雙方から

一步二歩づゝ近寄り合ふこと、此一事が不思議にもさらく二人言ひ合はせたやう二人に取つての特色でした。それ故に茶碗と茶碗、ぶつかり合つた丈けに事は破れず、むしろそれがため却つて迷はず、はては好い中和を得てどうか旨く纏まりました。

人を解きほどして見て爪の垢まで見すかすだけ有つて直後らに感ずる人氣は尊氏より少ない方で、人氣取りの理には通じた人がいつも儼いて自身に之を専有し得ず、狗竹折つて腹に取らせ、つまりは尊氏のものとしてそれを爲てしまふ、實はつまらぬ役目でした。たゞしつまらぬと自身は知らず、皮相からして觀察して天晴自分が集めた人氣は矢張り永劫自分に屬くと心から信じて居れば、いさゝかも愛憎僧越の心は起さず、一意足利といふ家の興す事に志しは傾くばかり、すなはち知らずくの間に分擔して兄と相對して一方に立ち懸當に齟齬してゐました。

兎角する間に夜も稍更けて奥書院に人語も絶えて、木がらしの音のみ聞える最中、宵の間の狂言の引きつき、兄弟膝を集めてのひそく、嘶、あら天知らず人まだ知らず、目を貫くばかりの大望、毒龍が目を見

張ッてあはれ一雨降れと待つ鹽梅、――

兄上は兎角用心ぶかいが、何の恐ろしくも無い世の中。紅粉に眩んで賞罰も正しく無し、一般の人の心が既に再亂を思ッてゐる矢先、こゝに今一つでも事が起れば、それを界として天下は定まる。赤心から言へば人には聞かせられぬ筋ながら――此度の北條退治について拔群の手柄の有ツたのは斯くいふ吾々兄弟足利の部類ではなし、吾々は尻馬からお茶を濁して、いはゞ死首で功名を詐ツたも同じ事、その賠償として内裏の雲深い邊、淑房のあたりへ手をまはし、美人の手に太鼓を叩かせて、どうだらうかと結果を待てば、譯も無いもので吾々兄弟が筆頭第一！ 多くいたゞいて悪く云ふのは些虫の好過ぎた筋ではあるが理屈を言へばそんなもの。何の恐ろしくもない當世。今にもあれ然るべき風雲に誘はれたら、それを黙ッて看過すところてなし、愚圖の義貞、馬鹿正直の正成、杓子定規の藤房、生人形の親房、どれも守成の任に堪へる大度量の人物で無いものな。

大度量で無いとは言ひ過ぎたらうと兄が横合から口を挟めば、せゝら笑ッて些しも快まず、まだ小度量で

はないか、吾々のこれらの密謀、いくらか様子でも分りさうなものを知らずに居ればこそ平氣で居る。其くらゐのぼんやりして守成の任がつとまらうか

けれど、さう言ふな、烟ッたいのが外に一人有るでは無いか、と兄が問題やうの言葉を出して、さも解けと言はぬ計りに詰り込めば、それは疾うから承知したといふ顔色、それは此方も知ッてゐる、例の大塔宮が只一人これが些しと云ひ掛ければ、兄もさもこそといふ有りさま、それだくくくと二聲三聲、熱心が籠ッて来て目もやゝ涙ぐむ、それを片光りにしげく眺めて、いくらかこちらは反身の氣味、仰山な仰やりやう、高が宮一方どうでも爲ると一句の下に叩きつぶして胸をたいて、「喃、こゝの方す」。

第四 櫻狩の狼藉

天を刺す大木は一年の雨露で出来る物で無し、山を碎き、海を覆へす大逆亂は五日六日の評定で定まるもて無し、逆亂の若芽は既に吹きながら、誘ひ出す春風もまだ吹かず、空裏の中に一年過ぎて峰の紅葉が櫻とかはれば、浮れ立つ人心今年ばかりは都の春といひ優柔の氣が狂ひ立ッて、無殘や風流を知らぬ田舎武



士も借着のやうな狩衣打扮、名陸自那と笑はれながら馬ばかりは稀有の若駒、奥州馳で候ふの、三歳駒で候ふのと櫻狩りの道すがら懸か並べ合つての比較三味、果ては咲いた櫻にそれをも繋いで、花を散らして大笑放吟、これを泰平のしるしと言へばいふ、埒も無い春が催しました。

「今日見ずば明日は雪とぞ」……花に嫌はれても悟らぬ猿河似、俄立身に大袖づくめて着飾って歩きたさ、同じく無風流蕪、若駒にゆつたり駒つて、黒谷もよりを打たせる一群れ、肩で風を切るとはおろか、花見に來たのか威張りに來たのか往還を我物顔にして大浪のやうに打たせておました。一群れの人數は六人ばかり、主人と見えるもの兩人に之に従ふ家隸が四人、しかも何れも騎馬でした。主人二人、其一人は年の頃廿二三、薄緑りの狩衣に萍草の地紋大きく匂はせ、白銀作りの太刀を佩いて、梨子地の鞍にゆつたり騎り、いくらか刺毛で値を下げた桃花色の馬の鬃のふさふさとした立敷な微風にふはく浪うたせて居ました。一人は年の頃廿四五、濃朽葉らしい狩衣に、同じく太刀は白銀づくり、馬が泣きさうなどツリしした螺鈿の黒鞍に日を射つて栗毛の馬に駒つて居ました。顔色の黒いところて一日に紫生もそれと知れる、いづれ武者から出た人

物、鎧の着こなしには馴れても居るが、殿上ぶりの長袖には一向不得手といふ有様、背筋も曲つて帯も亂れ、手綱さばきの凜としたには似ても似つかぬ身のみだれ方、しかも酒に酔ひしれて、四邊かまはぬ放言漫吟、つき従ふ家隸どもまで何れも顔は熱柿と爛れて目も口も一處にとろけ、相手はしやといふ體で、右へよろよろ左へよろよろ、是ばかりは正氣な馬を酔に托けてのやたら實、今を盛りと咲き重つて枝を垂れて居る櫻を見れば、さながら敵でも打つ懸梅、武者聲するどくやツと叫んで、みりくくと折るや否や哀れ落花微塵！其儘み早速の鞭。花びらのあへなく散つてひらく虚空に狂ひ立ち、恨みの精か、蝶か、花か、風にもまれて翩翩となるのを見て、してやツたと高わらひ、取りかへ、引きかへ、枝を折つて狼藉に狼藉極めました。さすが此日を樂しみにして被衣の奥に花油を秘め、わざく逆歩を移して來た亂人たちもはるかに狼藉を見ずはやと警戒、殊には此日頃武者の亂暴しばく耳にも聞かざな、出逢つては面倒と素早くも道を變へて、さすがに亂世には馴れたもの、早く姿をかくして仕舞へば、跡に殘たは男ばかり、雑色の背さむらひか、取るにも足らぬ人間の、其方に取つては大仕合せ、相手になりさうな物も無く、さすが獨相撲で狂ひ立ッた爲

武者どもの精氣も稍盡きました。酔は相手を待って高ぶる、さて面白くも無くなりかゝって、この度はその思々しきまぎれ、當るに任せ枝を折って、駒をひねって發矢と一うち、駒は痛さに飛び立てば、蹄をからく鳴りひびかせて廣くもない道を縦横無盡右左りとなく荒れまはった矢先も矢先、曲り角で忽ちばつたり出逢つた是亦花を觀る一むれ、はつといふ間に避け損なつて足腰の覺束ない一人の老人がしたしかに蹴られました。一むれは何れも公家、徒歩だちの忍びあるまで、同伴も青侍二人よりつれず、老人は親と見えて之に従ふ若者が一人有り見るからが氣高い身の様で、今この親の蹴られたには思はずはつと一聲叫んで、青侍ともく立ちかゝって抱き起す途端、それなる狼藉者めときつと其相手をみれば、腹も立つ、あやまりもせず、また逃げもせず、ふりかへつて冷笑してゆるく打たせて行く姿に、此方も血氣、くわつと爲る、あれ引きとめよとの烈しい言葉に青侍もかしこまり、追ひすがつて引きとめれば、己れ不作法、老獺の家の子か、小獺なと計り、公家と見受た、當座(詠歌の事)を所望ぢや、此の折枝で詠んで見よと冷笑しながら枝の鞭で、引きとめる青侍の手を發矢とばかり、理屈も差別も無い狼藉、扱も無念と青侍も血は喉ぐ、怪し

からぬ、管つとは何事——管つたがわるいか、しれものめ！ 人の鞭づらなどに引き止めた——引き止めたく、問ひ正すべき事の有る故。などで主君を蹄に掛けた？ と打たれながらも一生懸命、争つて離れぬ青侍おのれ物々しいとばかり相手の従者共も四人一同に取り巻く途端、折枝で主人は馬をはたく、たまらず馬も飛び上がれば、無殘そのはづみに青侍も亦胸さきを強く蹴られてうんとも言はず倒れました。如何に規律の無い世でも人二人まで蹴たふして其儘に済む所以はなし、すはや而倒に爲り掛けたと心付いたが最、武者どもは早く逃げると互に目くばせ、一鞭馬にくらはせれば、馬は蹄を鳴らして飛び立つ、それを此方からはるかに眺める蹴られた方の身の無念。親を蹴られて介抱最中、また青侍迄蹴られて仕舞つて今更相手に逃げられては重ねくの恥といふもの、何の公家とはいへ、いつまでも優柔にしてゐるものか、おのれら何として逃がさうかと、今親を介抱する手、その手を拂つて若い公家が立ち上がつて追ひかけ出す、それ追つて來たと中々に弱身が有れば逃足早く、いよく一方は馬に鞭、無念徒歩だちの足は及ばず、くやしきまぎれに大音聲、かにかくと罵つて彼是二三町の間、無情な事には道行く者もさしとめて遣らうとは言はず、

助けてくれるものもなし、果はむざ／＼小路大路、右左へとまがる間次第々に駆け抜られて——何處へか見失つて仕舞ひました。骨身がひしげる程のくやしき、吐く呼吸も朦朧と毒に爲つても出さうな遺憾、しばらく足を止めた後も拳を握つてつツ立って、前後の思慮にも當惑しました。併しながら氣に掛る親の身の上、臍腹を蹴られて倒れた計りのところ、思ひ出せば苦勞でもあり、恨みを呑んでそゞろ涙、また一散に取つてかへし、苗の處へ立ち歸つてふた／＼びつら／＼親を見れば、無残！呼吸は絶えて居ました。黒山のやうにたかつた見物、さてさてそれらの畜生香氣な、いま／＼しさに聲あら／＼げ罵り飛ばし、親の身置へむしやぶりついて辟かぎりに呼んでも答へず、脈さへすてに絶えたとは！おのれ、やれ、惡徒武士！打ち捨てしある櫻の折枝、それも敵の片われとて、拾ひ取つては微塵に挫いて——ちツ、この恨みどうしてくれやう！人手が少な／＼におめ／＼逃がして名も素生も知れずになつたもの、何の一念徹らぬものか？人もあらうに宮の昵近、今上の皇子と申し奉れば海人が子迄も御名を仰ぐ大塔の宮の昵近衆、その昵近衆をも憚らず、物も有らうに胸の土足、仇をうたずに誰が置かうか！

すなはち此蹴られた公家は、大塔宮附の昵近衆重頼といふ人で、さて蹴たものか誰と言へば、即ち直義の手のはした武士、大多和三郎、寺西酒介といふ山賊あがりの武者でした。はした武士にしては過ぎた身形、梨子地の鞍の、同伴ぞろひのと如何にもそれは過分の行列。成り上りの常威張つて見たさ、主人からわたつた恩賞の量のたんまりとして居た證據には借着をしての一日大盡、春を一刻の夢と見て綺羅を飾つて出たこととて、この一つでもそも／＼分かる、足利の手につけば如何な詰らぬ人間でも他よりも俊れて用ゐられ當の功でも有れば榮利大抵望みの儘との風聞決して嘘でも無かつたもの。

酔も何もさすがに醒め、一目散に邸へかへり、口を縫つて何とも言はず互ひに彼是いまして、何食はぬ顔して澄ました居ても可なりの珍事とて京わらへの浮評とり／＼傳はり行く體、あはや露敵して直義の耳に入るることかと心もそゞろに心ならず、今中殿中の亂暴身を賣めて、それに又前後二人迄たしかに蹴倒した覺えもあり、どの口からか破れが出来て、こゝと突き止められれば爲れぬかと思へば思ふ丈けに不安心、肝の無性質とてその後はこの事のみ屈托して所請る同病相憐れみ、より／＼大多和と寺西と兩人が膝を並べて

ひそひそばなし、かれ是夕方となつた頃、突然として使が有り、殿が召すとの言葉でした。

不時な御召、すはや直義の耳に入つたと二人は顔を見合はせて胸どつきり、これ何と言開かうかと今更生眞面目な顔して談合しても、扱相手は目から鼻へ抜けて生煮の胡麻化しぐらぬておい夫と爲る人でも無し、襦袢の出さうな嘘は言へても、體裁のいゝ方便は無く、まゝ諦らめると時間に急かれて、おづ／＼として御前に出れば、これは如何、小座敷へ伴はれる、其處で見れば直義は唯一人綱にすわつて、白かされの身紐も體裁よく、やがて恐る／＼平伏する兩人を近くと進めて、はやにこ／＼と淋しく笑へば、なまじひに笑はれて面目もなし、はづかし、白ばくれては澄まされず、身がすくむやうにも覺えて下を向いてゐる處、耳を破る殿の聲、「其許たち生命は惜しいかの？」そら初まつたと思ふものゝ、空漠な問ひでうツかりは返辭も出來ず、冷汗で平伏してゐると、また直義は笑を帯びた聲、重ね／＼の五分だめし、「どうぢや命は惜しいかの？」

第五 別製の手筈

時と場合とに因つては何の脆い命を惜しましやうと肝を据ゑて遣りかへせば、開て直義も微笑を會む、「今そなたら兩人の命取るが惜しうは無いか？」

「今……今でぢやるか？ 今でも主君の仰とあればさらさら未練は申しませぬ。なれども所以も心得ずては」。

「言ふにや及ぶ、おんても無い。命取られるべき事ぢやと知つたら必ずともに惜まぬか？ 惜まぬと盟ふた喃？ 盟ふたらば、所望せうぢや二人の命をこゝて望まう。命を捨つる覺えは有らうに——所以無いと言はせぬぞ」。

すはこそ果して珍事の顛末耳さとも聞き知られた。大抵それらと推察しても、中ツて見て碎けるまでは凡夫の心に未練も有つたが、もう知られては仕方無い、無念の相手は氣狂水、今更怨んでも甲斐無い仕儀、狗死に同様に死ぬくやしき、たゞし詰め寄られてびくつくのは武士の名に對しても後めたし、どうなるものかと決心して二人一様に口を揃へ、平伏して叩頭して、

「恐ろしき迄の御仰せ、身にしみて一言も申す處は御ぢやらぬ。未練に包みは進らせぬ、よう御聞き取り下され」。

語りかけるのをしつと止めて、「おろか、それを其許に聞かうか。聞くほどならば死ねとは言はぬ。いつはりも無く聞いたが最期、二人とも今日までの命と心から観念せよ。黒谷もよりの櫻狩、人の命を取るとは何事、しかもく其人は誰あらう、上の御おぼえ極めて愛てたい宮方のものでは無いか？ たとへば如何程酔ひしれて目までもくらめばとて、その差別も得見えず、膝にかけたとは何事か？ さりとて言ひ解く言葉があるか。宮方には手も付けなと示しおいたを忘れたか？ それ程の過ちして此處へ呼ぶまでおめくとして知れじと思ふて居たがなかしい。言ひ解く言葉もあるまいに……餘りの心さまの幼なき、弄びてくれうづものなと故さらに此處まで呼びよせた。未練がないならとうく死ね！ さりとも言ふべき筋があるか？」

「もはや微笑の色も浮かまず、一心籠めてたしなめられて、穴へも入りたい心持ち、姑らくうづむいた儘の無言、思へば返へず言葉も無し、未練では無いが気が利かぬ、狗死とは情無し」と云つて口には云はず、直

磯の音ふ言葉に「々道理も有るものを今更どうとも延引ならず、

「心得て候ふ！」

きつぱりと唯一句、すぐに相手はまた切り込む。

「心得たらば處はきはぬ、とうくこゝで潔う……」

餘りといへば輕卒な？ 退きませずに直死れとか？

「こゝで御ぢやるか？」と不審を凝せば、

「情けにこゝで死なせてくれる。

「さらば此儘服もかへず！」

「言ふ迄もない事と知らぬか？ 介錯は己れがせうづ。生前の手柄に愛で……この床板其許の血に塗ら

してくれうづものを。悪びれずしてとうく死ね！」

さもく勇んで死なせるかの風、罪は有るとは知りながら情無さに恨めしくも爲る、今更未練も手傳ふや

うな、まだかくと急ぎ立てられて未練を飲んでいよくの事、もはや駄目だと胸を据えて、心得て候ふと切迫の一句、因縁づくくと観念して、差し添へを二人一途に抜き離せば、たちまち燈光に光りを射つて、横壁の上に金蛇もはしる、——御前はなほだ恐れ入ると流石神妙に挨拶して、刃をやり取り直す、其途端、そもく何事、「待て！」と直義の慌てた聲。待てとは何事とためらへば、身を進めて直義は忽ち側へさし寄つて、「心底は見た。死ぬには及ばぬ。其許たち二人の罪咎は直義の身に引き受けた。」呆れて二人は言句も無い、それをさこそとつらく眺めて、

「二人の罪は引き受けた。引き受けた、大事無い。許す！ 刃を納めませい！ 刃を鞘に……さうぢや……とうく……いぶかしむも道理ぢや。ことわりぢやが、苦しう無い。天晴の二人の心底、直義つくづく胸に染みた。深くはこれからいふて示すに、まづく刃を納めませい。」

甚だしい抑揚頓挫、死にかゝつた二人の五體もぐづくにこぼかれて、今更張り合ひも抜けた鹽梅、しばらく躊躇もして、さて強ひられては背くも異なもの、跋のわるさを辛くも忍んでおめくくと刃を納めれば、

じつと見澄して直義も何か大に安堵した體、さし招いて近うと呼ぶ、呼ばれてするく、膝で進んで、何ごころ無く見上げた目、見ればそもく是はいかに、直義の目にはいつの間にか霞きあへぬ涙が一杯。これはと駭く二人を見て、きつと涙を拳でぬぐつて、

「直義、生命も入らずなつた！」

「直義、生命も入らずなつた！」と二度ばかりまた言葉を重ねて、「其許たち二人の心底見えた。さほどまでに罪を悟り、直義の身に厄難のあらぬやう死なうとは扱見上げた心ぢや。今其許たち二人死ねば、上へ對しての直義の申し譯はそれで事も無う立つものぢや。立つものなれど……嗚、これ如何……二人の命を穢にして、一人の申し譯を立てて天晴な武士に狗死をさせられうか、さて爲せられまいか、思ふて見れば胸も張り裂く。直義この身に徳は無い。源家の嫡流とは云ひながら隠淪してあれば龍も蛇、今兎に角兄もるともこの今の身に爲つたのも其元をと言へば外では無い、天地神明の御加護と其許たち武士どもの精勤ゆゑぢや。」

いよく聲は涙にうるんで、且沮み、且躓き、感が極まつて語が充分にもまとまらず、「其許たちの精勤ゆ

「ふ、それを何ぞややみく〜と、其精勤二心ない其許たちを——如何に進退谷まればとて、いかに此身の難が恐ろしいとて——この、この現在の目前で己が見て居ておめ〜と死なせられるものが、これ！」

膝を叩いて説きかけられて、感動は特に聞く方に深し、聲を放つばかりに爲つて「勿體無い」も口の裡、兩人ひとしく衝き上げて来る涙、その雫には五尺の全身も浸へて、ふるへて、下を向いて只齒を噛む體、右送り左迎へて直義の方も變はらぬうるみ聲、

「死なせられぬ！ 死なせられぬ！ 天地くつがへつても死なせられぬ！ 直義の身に引き受けて何とでも救ふてやりたい。親王家に狼藉した罪、そこらはいふ迄も無う其許たちの脱落では有る。たゞし罪ぢやと後悔して、争はず、辞まず、狂ひさわがず、一念たゞ其罪に身を中て、直義の身に難なかれかしと差し添へ抜いて斯うよと見えた——うッ、うッ、うい奴！ それ、忝けなく無うて何ぢや、これ！ 直義眞實胸にしみて、よしや其許たちと諸共に死ねばとて其許たちのみは死なせられぬ。よッ、これ、二人、心得たか？」

それ程までに情が有るか、それ程にも〜深く臣下を愛する事かと、前うらんだ身が恥かしくさへ爲つて

来れば、いと氣の毒がまた加はる。これ程の明主の命令、草一本でも王家の物には狼藉を加へなと言ひつけられたのをうッかり背いて、果は此程に仁慈の君に涙さへ流させる事に爲つたとは、畜生！ 我と我ながら身をかきむしつても遣たい程、申し譯は微塵も無い。ことには奥底の知れぬ迄に臣下を愛される主君の御心、それ士は己れを知るもの、爲めに死す「直義、いのちも入らずなつた」の一言は今や死ぬ身の二人に取つて冥途へのよい土産。御馬前て捨てるのも乃至平和の時に抛つのも主君のために益に立てば士の一分は立ッたといふもの、「其許たちのみ死なせられぬ。天地くつがへつても死なせられぬ」と扱も何たる深い情か！

中々にもう未練はなし、蛆にも均しい二人の命、それ捨て、賢明仁慈英俊の主君の難儀が無くなるものならば何の惜しんで好いものか？ 感涙に溺れてたやすく利けなかつた口、やうやくに屹と爲つて、二人そろつて異口同音、——

「身に餘つた御情——」と只それだけ。涙に大抵かきませせて、

「かほどまでの御仁愛、承まれば承まはるほど身の腑甲斐無さが思ひ知られて——發矢！ 何たる不肖の

身ども——とてもく此上はおめく——と面を曝いて、生き永らへては在られませぬを。御なさげにはほとほと吾々、御酬いの言葉もおぢやらぬ。

言ひかけるのを手真似て止め、「又しても」とたしなめて直義は頭をふって、

「又しても女々しい言ひ草、それ聞かうと誰が望まう。」

「仰せをかへすは恐れあれど、女々しいとは心得がたし。御情にいとしく身を責めくして斯うと思ふを……」

見上げる處をきつと睨んで、「狂ふたか、かばかりの小事に當つて其許たら二人は心まで？」 狂はぬならば、

なぜ言ふた？ なぜ死なうとかき口説く？ はか無き事に狗死して、士の一分が立つと思ふか？ 女々しい

といふたがあまりか？ 狗死だにせし上は情を知つたと思やるか？」

あらく吹いても仁慈な風、いよ／＼胸は情に挫ける。當惑して俯向けば、また一方は聲をうるはせ、

「たゞ死ぬばかりが能ては無い。直義一旦口外した、生命に代へても其許たら二人をやみ／＼とは死なせぬ

と。魚心あれば水心、徳とても無いこの直義にさほど迄に盡す忠義そも何として仇に爲らうぞと

勿體ないと手を掉るのをしげ／＼と眺めて嘆息し、

「何もく時の運ぢや。運が盡くればそれ迄ぢや。觀念して運を待つ。二人とも然思へ、直義は其許たち二人と運を荷ふて立つ心ぢや」。

「運を荷ふて御立ちやるとは？」 不審顔して二人が同音。

「運を荷ふて立つといふは……あなそこたちに悟れぬか？ 國重頼を蹴殺いたのは其許たち二人と人も知る。

さらばやがて程も無く親王家から事の趣き問ひ正しに直義まで御使ひも立つてあらう。立つが最期、直義が

其許たちの罪のほどを一身に荷ふて立つのぢや」。

聞けば聞くだけどツきりともする、思はず二人は膝を進め、

「さればこそ館の御難儀……」

「難儀とあつても詮は無い」。



「これは仰せとも思はれぬ、詮ない事はおぢやるまい。取れて辱きやうなれどもさればこそ二人の生命……」  
「狗死ぢや。しッ、辱いわー！」

「狗死では全く御ぢやらぬ、館の御難儀無うなれば」。

「又しても繰りかへす！ そないな事を聞きたう無い」。

二人はたいし力痛、火炎を吹くまでに啼り立って、はげしく頭を左右へぶり、

「かうなれば、殿！ 館！ よしや如何程御心に背くとも思ふ心を申さいては！ 申さいては、喃館！ 館！  
恐れながら御言葉に背くは心得ず」。

「何を？ 過言ぢや。心得ずと？」

「館の御身とわれ〜といづれが大事と館は思す？ 館！ ……この涙で御ぢやる。千金の御身をかろく〜しう二人の下田の爲めに捨て、天下で何と申さうか」。

「何といふても怪しうは無い。臣下を愛して死んだとあらば直義こゝろ嬉しいわー！」

たまらなくなつて辨武者が聲忍び切れずに泣き出して、進退きはまッての當惑、どうしたものと身も世もあられず、有りがたき、忝けなさは骨身にしみて、且つは分かりの悪い主君とは思ふもの、それだけに感佩口にもいへず、千思萬惑は麻を亂して、末が本か、本が末か、思ひ迷ひに迷つた末、わづかに考へついた手段、せめて少しでも主君の身に禍ひをかゝらせまいとばかり、この心まことに實の實情、やうやくに涙を拂ッて此上はもう是非も無し、死ぬといへば許されず、たいしおめ〜してはゐられず、兩端を取ッての一思案、御聞き済みになるかどうかは分からぬもの、言ッて見なければ其處も知れず、

「いかにとも詮無う御ぢやれば、此上はせめてもの御願ひ、いかでわれ〜兩人に是ばかりは御許しあれ、死なず、活きず、中右の境」。

「とはまた何か？」

「世捨人て御ぢやる」。

第六 腹中の機關

斯うても無い、あつても無いと右ひだり相手の言葉をはぐらかして、とうとう世捨人とまで煎じ詰めさせて、内心直義は思ふ坪とひそかに喜ぶの色にも見せず、しばらくは思はせぶり、返答に當惑した體で有無いづれとも蒸えさらず、黙然として下を向いていつか父はろりとなれば、大多和たち兩人も同じく愁ひは頻りました。

促がすのも異なる事ながら、さて黙つても居られぬ仕儀と二人はやう／＼胸をすく、恐る／＼主君を見上げて

「せめて此御願は御許しあつて、いかで何れにせよ、館の御身に係累ひ無きやう…下郎どもの一生の、外ならぬ願ひて御ぢやる。」

思ひ込んでいふ面色、何さま熱心もあらはれて、又更らに他念も無い體。つく／＼と視て直義は坐るに洩らした溜息の二つ三つ、沈思黙考、さて容易には答へもせず、やう／＼にして目をしば叩いて、是非も無いと思案投げ首――

「忝ないぞ、其許たちの心の程、いよく直義骨身に染みたる如何とも最う詮無い喃。其許たちの願聞き入れた。」

「これは、飛び立つばかり、御ゆるして御ぢやつて、喃。」

「まことに是非も無いことぢや。」

二度三度目を押しぬぐひ、力無さ／＼と二人を眺め、

「喃、これ能う開けの家臣の光迫を見す／＼見ながら知らず顔するは何ぼうか直義に取つて無念の至りぢや。数ならぬ身を然程までに深う思ふ其許たちの心底、いよく運を共にする心にも爲つたなれど、それとて叶はいて如何ばかり本意無いか知れぬのぢや。天晴望みの有る武士、無残や圓頂黒衣に逆さする事かと思へば、喃……」

また涙ぐむ二人の體、直義もまた涙の器氣、「それとても浮世の義理、喃、詮無いと諦らめよ。今は早や其後の事ごとく直義この身に引き受けたれば必らずとも心を残さず、勇み立ツて家を出てよ。」

咽びかへッて平伏する二人の傍へさし寄ッて、「饒けに言ふ事こそあれ。まだ折も無かつたれば、しみく其許たちを兄の君(尊氏)の見参にも入れなんだが、忠實やかに仕へたと直義から兄の御前もかれてから取り做して在るほどに、せめて別れに一度なりと目どほりして後秋を別かて！」

行き直ッた人氣取り、二人の全身は有りがたさに唯ひしがれて縮ともなる、いざと急ぎ立てられて涙を拭ひ、それにしても高貴への見参、この顔てはと辭退すれば、「諱いことを」と叱り飛ばして、手を取らぬばかりにして自身も立上り、扈從を呼んであらかじめ兄の處へ今直義が行くと知らせ、自身先きに立ッて長廊下、廊下つゞきに右へまはり、左へうねり、やがて尊氏のゐる處まで至りついて、二人とも直に續かせ、用意して近習を遠ざけさせて、事の趣きを言葉みじかに物語るといふ、打ち解けて打ち解けた有様。何と挨拶をして好いか、其處ら分らぬまでの二人の胸中、かしこまるばかり平伏して見上げられもせず、且は恐れ、且は恥て、坐るに涙に暮れて居れば、扱も兄弟よく揃ッたもの、尊氏も亦氣は軽く、綱を半分がたすベッて此方へさし寄り、鷹揚に一言二言いたはりを言ッて、それから又、折角の武士を出家沙門にして仕舞ふのは

残念な沙汰との趣き、しんみりとして語りました。

一座しばらくは言葉も無く、濡り切ッた奥殿の夜半のもの淋しさが一入加はり、感慨はいづれも胸を衝く。

「運ぢや、詮無い、喃、直義」と思案に餘ッたらしい尊氏の言葉、聞いて「まことに」と同じました。

「心ばかりは惜しめども浮世の道とて甲斐は御ぢやらぬ。いつまでか斯うて御ぢやらうか。いてや二人とも、よしや出家になつたればとて一日も武辨の心がけおろそかにはなるまいぞ。」

「かしこまッて候ふ。」

「や、耳に立つ言葉ながら、喃、二人、今世の中は時津風枝を鳴らさぬ太平となつたれど、これいつまでかつゞきはせぬな。」

シツとさし止める尊氏を直義は心得顔て見て動ぜず、

「是けしたり天下は安らかと思ふが誤まり。北條の餘類も尙多きに、枕を高くは寝られぬ世ぢや、喃。」

「仰せ洵に御ことわり。」

「今にもあれ、いつ波風が吹き立たうかも知れぬ世ぢや。よしや圓頂黒衣に様をかへでも武事は脱からず心掛けよ！ 翌日とも言はず、又其許たちに歸參して欲しう思ふ折もあるも知れず……」

兄は傍聴して居て幾度か胸ひやく、たまりかたて、「直義不吉な言句は言ひな」と睨めるやうに窘なめれば、冷笑ッて受け附けず、飛んでも無い、又人をどきりとさせる挨拶、

「水鳥の音に弱腰抜かして平家は富士川で散りまいた！」

「何ぢや」と聞き直す兄をじろりと眺めて、

「なまじ恐れると、肝細うなるて御ぢやる！」

尊氏に勤めて大多和たち兩人に路用の金まで賜はらせ、残る限なく心付けて直義はいざとばかり二人に暇を與へた抜目の無さ、唯々として二人は涙に掻き暮れるといふだけ、搦武者男が坐るに命も入らなくなるほど胸をうたれて、咽びかへッて御前を這ッて立ち出しました。その夜即刻人目に掛らぬ内に早く逃げるとの命に二人はたゞ言はれる儘、元よりさしたる身分でも無し、ことには二人とも無妻の身の上、白拍子あがりの

伽の女に事のこゝろをわづか得させて、家を畳むにも譯はなく、其夜時を移さず二人相伴ひ、飄然として出掛ければかり、やがて行雲流水、行方も知れずなりました。

そも、此直義の細かい慈悲沙汰、散々に搦武者の心を強酩で揉んで仕舞った仔細、それも尋ねれば山でした。營々として人望を取れといふのが直義の持論、其處へいつもの細かい處が加はッて何から何まで残る限なく心を配りました。乗すべき風雲の機会が有ったならそろそろ手を出してもいゝとは尊氏兄弟の間に既に成り立ッてゐる計畫、營々として——むしろ婦人の仁ながら——人氣を集めるに苦心してゐた、是等も即ち其一例でした。

大多和たち二人を送り出して後、さすがに尊氏はいくらか氣に掛る體、直義近うと呼び近づけて、重ねて委細の事を深く尋ね、つくづく又弟の細かさに感じもし、從ッて又をりなり弟が口走ッた、冷々するやうな言葉をしたしなめても見ました。

「壁に耳のある世の中に、さりとては痴にも似ぬ疎忽な言葉、今にもあれ、吾々が謀叛くはだつるかのやう

に口走るとは心得ぬ」。

「またも例の直義の癖、冷笑して抗論するかと思へば案外、この度に限って其やうな體も見せず、軽く笑つて頭を擡で、」

「心いさんだ儘でおちやツた。まことに端ないこととおちやツた。さりながら大多和たちに夫となく心得させるは斯程にいはずは叶ひませぬ」。

「斯ほどに言はてとは？ 如何に、大多和たちはそれほどの白痴でもあるまいに」。

「いかてん、恐れながら御言葉とも覺えず。何の、彼ら大多和たら、惜しいほどの武士では御ぢやらぬ。彼等の如き武士どもは、破の眞砂の數々御ぢやるわ。」

人を手遊にする言ひ草、さも大事さうに見參にまて入れさせて路用の金まで取らせて、郷重に郷重を加へて送り出して、そして跡で何をいふかとおもへば、更に惜しい武士でも無いと。いつもの癖とはおもひながら呆れて兄は心を得ず、しげくと弟を見つめれば、弟は何處を風といふ體、餘りの事にさし寄つて

「心得ぬ事はいふ人かな。惜しい武士でも無いものを、などであれ程に手厚うした？ 破の眞砂と知りたらば益無き事を爲まじきを」。

たしなめ顔で詰り掛ければ、

「その事で御ぢやる。惜しい武士でも有らればこそ様々にもてなして諸國行脚の出家と爲せて、われくの威徳の程語りあるく役にしました。また思ふても見そなはせ、惜しいほどの武士ならばあれほどに心さま脆いもので御ぢやらぬを。こゝに此手につけおいてもさしたる甲斐も無き二人、この度の事を機會として表ばかりの恩を著せ、放し飼ひしたて御ぢやる。雀ならば口も聞けず、雀よりは稍勝つた人間といふもの、甲斐に美事われくの恩義の程をそれとなう諸國を回りて語り歩くこと御ぢやる」。

奥底の知れぬ御武々々しさ、今更兄も苦わらひ、

「直義、とても角ても痴は、唯、尊氏よりは悪人ぢや」。とゆるやかに評論すれば、扱奪めるか、悪くいふのか底意のわからぬ言葉には一方も稍ただるぐ體、これも爲う事なしの苦わらひ、

「何であらうが直義は……」

屹となつて目を据ゑて、意氣目を貫くといふ形相、

「思つた事は爲とげまするを」。

つツと飛ぶやうに擦り寄つて、

「さり乍ら、喃、兄上、大塔宮の昵近殺いた一條は近頃大事で御ぢやらぬか」。

大多和たち二人を送り出して後、其夜尊氏兄弟の間に夜更迄もたゞ聲低く、しんみりとした密々話、何ご

とか、事の仔細は昵近の扈從すら遠ざけられた事として更に分らず、扈從も窃聞したもの、相たがいには耳打

ちて應答することとて更に窃聞の甲斐もなく、それこれするうち薄眠くもなり、うとくとしてゐるうちに

いつか夜は早や曙けました。おやと思つて何へばまだ兩人は藪のまゝ、やがて日がやいさしのぼるまでは一

向同じ體でした。

日が昇つて後直義はやうやくに辭して去りました。辭して去つて朝飯をほんの形ばかりに掻き込み、たゞ

ちに禮服に改まつて、伴ぞろへも極めて略し、何處となく飄然と出かけたぎり、夕暮まではかへつて來ず、

残つてゐる近習同士も何處へ主人が行つたことやらあらかじめ秘密にされた事として更に分ならず、餘氏との

昨夜の閑談を思ひ出して、いづれ何か仔細があらうと唯々不思議を抱いてゐました。不思議を感じたのはこ

れらばかりでもなく、尊氏の昵近や扈從も同じく眉を寄せました。常はさして喜怒を顔色にあらはさぬ質の

尊氏が今日に限つては頗る變つた體でした。何となく物思ふ風情、ほとくうツとりとする工合ひで、折り

くは溜息さへ吐いて、眉は閉ぢ合つてさらに開かず、目の寄る處へ玉、権略の下につく袈袢した若い近習

もそれと無く御機嫌取るやうな、吹き出しさうな嘸しをして試みても笑ひ顔はあらはれず、何でも大事件だ

と見當をいたづらにつけるぐらゐ、たゞく不審を凝らしました。其中に晝となり、未となり、申となり、

日影はやうく傾いても、いつも好きな後園の散歩を試みる氣色も無、また不斷から好む田樂舞の謡さへ今

日に限つては口に乘らず、そして深殿の一間にひとり籠つて、何をしてゐるか、とつらく見れば、何の用か

將士の名簿を取り出して心を潜めて數へる體。

いよく不思議だと目ひき袖ひき、口さがない近習の常としてはしたなく嘸いてゐる處へ若侍が一人来て直義の訪問を告げました。人の氣も知らぬ夜ふかし好きがまた来たかと口の内に呟いて、其足で廊下はたばた、尊氏の處まで到り着けば、噂いッた人は己でないといふ計りの有様、改まって直義の入來の趣きを告げました。

告げるや否や、引きかへて氣色のたちまち變る尊氏、「來た？」と言はほとんど隨輕に言ひなぐつて俄に直す居三昧、さもく待つてめたかの様子、はゝアなるほど何か昨夜の引き残り、内相談のある事だと近習も大方心を待て、席を遣ぬかうかと尋ねれば、如何にもとの果して察した儘。入れ代つて直義は入つて來ました。

入つて來るや否や、尊氏の心配らしい目に早くも止まる直義の満面の喜色、さては旨く行つたなと一方もまづ安心の小口を開く、とくくと近くへ近づけて、「どうぢや、事の成り行きは？」聲を潜めて、慌しく問ひ掛ければ、いよく一方は見せる笑顔、「思ふたよりはよう御ぢやツた」。

前後を見かへつて人は居ぬかと手眞似、臆てそれと答へれば、つツと又直義は兄の稱のすぐ側まで其身を近づけて、

「はゝ、世の中はこないに容易いもので御ぢやるか、喃、兄上。朝とく女御の方へまゐつて、昨日の顛末を詳に述べ、よろしう頼み聞えました」。

「頼み聞えて、彼方にも御うなづきやツたか、喃？」

「美ン事御うなづきて御ぢやツた。素より女御の御方では宮と御仲よろしからず、このたびの事なんともそれ故に直義が最負こそすれ、夢にも宮方とは爲らせられれば、こゝらは事無う済むで御ぢやらう。さり乍らこの事よりいよく宮は吾々を憎ませらるゝ事なるべければ——たゞし、それ故にこそ此方にも手は有り、女御の方よりの御口ぞへにて是よりより手なまはし、恐れ多い事ながら今上と宮との御仲を悪しうせでば叶ひますまいに」。

「いかにも」。と尊氏もうなづきました。

第七 雲の上の切諫

それからより、人を忍ばせ、昵近を殺されたに就いての大塔宮の御感觸を探らせば、果して妻まじいとのことでした。

宮は音に聞えた勇猛の御性質、意氣は地軸も噛み砕かれるの御勢、いやしくも一分を枉げられれば山が崩れても捨て置かぬ御肌合ひだけ、この度の武士の狼藉、而も其武士は誰有らう、かれてから悪らしく思ふ足利直義其人の手に付くものと聞くにつけ、尊憤が積つて骨々も砕ける苦しみ。

おのれ阿曲の小人、人も有らうに僭上至極！こゝらわたりの昵近蹴殺いて知らず顔する肝ふとさ！かねてから、一癖有る足利、心許せぬと目は附けても、僭上が是程の處まで高じ至らうとは今が今まで夢の夢にも知らなんだ。何の！機密魂膽の大悪謀、この黒い目が睨みそこなつたと思ふか？より、婦人の仁を施し、敗肉に集まる五月蠅は同じ虫同士、小人が小人を馴らし近づけ、何と無く時を待つかの姿、それすら尤も不思議の至りと既に目は附けて居た矢先も矢先、はたして暴雷のやがて出る證據、一光り大空をつ

らぬく稲妻のするどい鋒尖。奸といへば奸、曲といへば曲、倭と言へば倭、猾といへば猾、およそ悪賢といふ悪賢の筒條書に一點も洩れぬ足利兄弟、おのれ嫩葉のうちに対らすば！君子の利用するは道と徳、小人の利用するのは色と慾、淑房の權威のをさく盛なのを利用して、手を回し、目を配つての種々の計畫、思ひ知れ、天爵！護良の目にかゝつたが最期、護良の目の玉のきらめく間、何として非望を逃げさうか！この邊の昵近蹴殺いたのも好機會、これを口實として詰りつめて——詰りつめて、己等兄弟！己等兄弟の鼻柱引ッこすツて哭れやうづ！

と、一時は火のやうに爲つて狂ひ立ッて、常の凜然とした御顔に一入の凄味を加へ、どうしてくれやうか胸一杯、身をもたえて居られた折しも折り、何ごとか、忽ち禁裏からの御召し、勅使かと伺へば決してそれ程の際立ッた御召しでは無いもの、兎に角入らせられよとの命令に、それならばと計り支度もそこ、深殿に伺候すれば、直に主上の御前まで程近く導かれて、いざ打ち解けて物がたりも爲たい故、禮に及ばず近づけとの仰せ。



この數日前實は國家を思ふあまり閨房や佞臣の害毒を滔々と御前で申し上げ、それがため宮も主上の御勘氣を幾分か蒙つた氣味合ひ、その揚句に思ひも附かず突然と召されたのみならず、而も天顔うるはしく、打ち解けてよとさへ仰せられて、殆んど意外の思ひもしました。

仰せの儘に迂り出れば、主上は常より天機すぐれて、寒暖の御挨拶それさへも懇に、やがて段々との咄しの中から——如何にも多分さうとは思つた——何を仰せられると思へば即ち例の一條でした。物事は平和が好しとあらかじめ地を付けられて、其上で題へ入り、「こゝろよくも有るまじきが、朕に免じてゆるして」と、扱も勿體ない御言葉。宮は心中いと又燃える計りになりました。

さては女御の口添へか、事々しく萬乘の御身の上には程御苦勞掛ける事かといと又腹も立って思はず宮も御膝を進める、——

「恐れながら事の顛末はしう明し召されてや、さきに法印良忠の事さへ有り、今又それと事も同じくやみやみとして家臣を殺させ、一言の言葉さへも無く、面たかくして在らるゝ事心外の上や候ふべき。この儘にやはかおめおめ——道は道、正すが道、誠良無念盡きず候ふ」。

吾を忘れるほど、怨みを凝らして叫ばぬ計りに論ぜられるのを聞きはて、騒がれず、大方は笑さへ含まれ、「道を言はば然る事ならんと朕も思はざるにあらねども……誠良何も堪忍なり」。

「恐れながら堪忍も時と事により候ふ。諄きは甚だ憚り乍らこの程も聞えし如く嫩葉のうちに刈らされば斧を用ゐる大事有り、怪しと目星のついたるもの無残や打ち捨て、虎を育て、天下萬人の禍招くは末代の聞えも心ぐるし、見そなはせ、此度の狼藉、如何さま小事に似たれども、事のかゝる處は小事ならず、僞上の限り、王家の尊きなも思はざる振舞には候はずや」。

但し心をとめては聞かれず、

「言ふ事一々ことわりながら、又さほどはしたなう人は疑ひ思はぬものぢや。一言齒より洩れたが最期、駟馬も及ばぬとは常よりして其許も言ふ事なるに、何事ぞ、はしたなく——堪忍！ 猶よく考へ見ませ。はした無うは爲ぬ物ぢや」。

幾度言ッても同じ事、無念はいと宮の胸に衝き上がッて吾と吾手も掻きむしりたし、巧言や艶色たゞそれ丈で成る世と思へば堪へかねての男泣き。よしや御勘氣被ッても！

膝も進めて、又くりかへし、兄弟の奸曲を口の儘に述べました。虎の眠るのは鋭氣をやしなふため、今や足利兄弟は乗すべき機會の無いために止むを得ず我慢するもの、兄弟の人物やみくあの儘で居る性質で無し、今にもあれ、雲雨が蒸せば毒龍は池に潜むと思はれず、こゝらの寂慮はいかゞと申し上げれば、御耳にも猶とまらぬ體一はした無うは爲ぬものぢや。

決してはした無うは致しませぬ。護良が斯う狂ひ騒ぐはたゞ一人の家臣のものを殺された怨みばかりの故でも無し、家臣を殺されたのは悲し、たゞしそれより猶悲しいのは是程までの武臣の亂行、斯うも朝威を侮るかとつくづく想ひ浸みた時の胸。

下を叩いてにじり寄り、「亂言寂慮をそなたも恐れは有れども思ひ付た事申さいては。渠等奸佞が謀叛くはだつる事、よしや打つ體は外るゝとも護良の是のみは外れず候ふ。頼朝のかた朝威有るか無きかに爲り、

武辨の無道に怨みを呑み來れる十何代、やうやく天機、に然し、神風の吹きかへて辛くむかしに立ちかへッて、延喜天曆を復たふたゞにに見やうとする處で、又も武門に權を奪られて何の甲斐の候ふべき。これを思ひ、彼を憶へば、不肖ながら護良は切めて微力なりとも腕をかためて逆賊の邪覺をせうとも思へば、肌さむき夜半の禁裡に振鈴の聲の微になる頃さまぐの懐胸を衝いて腸も煮えたりれ、目睡めもせず、哀れ成る事ならば賊臣兄弟の素首を引ツ干切ッてもくれうづ物をと佩劍握りつめた事も度々。

たゞ此度の事は家臣の一人殺されしのみ事、その方には諦らむる術もあり、いかにしても諦らめられぬは朝威を無みせし事、この事。朝威を無みせし大賊臣、天津日に唾吐きかけた逆賊を其儘にさしおく時は天下萬乗の威も無うなりて冠も履も同じなるべき。天津日のふたゞに匿れて、浮雲また湧き出でなば口惜しさ抑いかばかり、今よりして思ふだに心ぐるしうこそ候らへ。あはれこゝらに聖慮の程を。

赤心にかき暮れて一意に國を思ふ熱心、さすが御親子の間から、大抵は思ふ存分述べ立て、そこに又一理の無くは無し、御勘氣も一時は有ツた程ながら、胸中を推察あッては逆鱗といふ處にも至らず——たゞ何

事も朕に免じて今しばらく待てと計り、其上それでもとは流石に言はれず、仕方無くしぶしぶ黙ッて「たゞし努々足利には御心を許させられず…」と最期の念を押しただけ。断行の出来ぬ無念、鬱々として宮も退出しました。

處がこれが手に取るやう、是等始終の一伍一什は、無残！直義からの間諜兒に殘る隈無く聞き取られて、則ち足利兄弟の耳へ有りの儘がその儘そっくり。心に、い、護良め！わろこすい悪座主め！よくも此方に目星つけた——眼力は扱しほらし、しほらしいだけに捨て、は置かぬ。この仇思ひ知れやと計り、大事にかゝる支度として兄弟が心血を絞りに出したのは宮を押し片付けて仕舞ふといふ事。

「與ふるを取るなる」といふ古人の言葉を其儘に取り用ゐる足利兄弟、最早大塔宮といふ目の上の大瘤を取り除かうと決したからに、其以後と云ふものは宮に對する二人の舉動が前と打ッて變はりしました。宮が主上に向ッて滔々と辯ぜられた時の二日後、突然として宮の館を直義が音信れて、館一同の肝をつぶさせました。しかも正門からして入らず、食を乞ふ狗同様、わざと差し扣へて小門から入り、人を以て辭を

卑くし、御かに御わびいたしたい筋の有ッて伺候いたしたと云ひ入れました。

時はまだ正午の前、宮は疾くに床を離れられ、一人の扈從を相手にさまんくの大刀を取り出させ、手づから夫等の塵を拭ッて、凜然とした光芒、それを御自身の氣象に比べるか、獨りしづかに娛しんで居られた處、突然として別當一人が伺候して直義云々と申し上げれば、扱はと宮も點頭されました。御顔色もすさまじく、何か暫らく思案して、

「何事の用事で來たと云ふた？」

御答へする身も汗、

「懼りて明々地には申されど此頃の珍事について親しう御説び聞えたさに參ッたものと思ひ候ふ。わざと小門よりくゞり入ッて……」

「小門よりくゞり入ッて？」と宮は訝えかへッたやうに語を押ししました。

「さん候ふ」。

好物め、今と爲ッて頭を下げての小門まはり、其手は食はぬと冷笑ッて、

「其許はそもく何と思ふ？」

些し此方はたぢろいて、「さん候ふ。御詫びとは言ひながら心憎き沙汰で御ぢやる。今と爲ッて日數経てや

うやう御詫びに参るとは面白からぬ節かと計り臣等は竊かに思ひ候ふ」。

「其許の言葉現にも道理、身に於ても然思ふを——いかで不思議の好物を門内一步の中なりと阿容々々許す

法や有る。疾く急ぎ立て、追ひ候へ！」

些し激だと、頭を低げ、

「御ことわりの御言葉ながら、追ふといふは如何なるべき。彼も足利の重きもの、身を下りて参り来しから

に、數ならぬと臣等なりと一席の言葉を交へて歸しやる方穩なるかと……」

聞きも終らず宮は大音、

「それなば其許に聞きは寫ぬ。心に染まぬ事も在るを、誰かは護良の門内を狐の足に踏ますべき。穩なるも

穩ならぬも時によりては用捨有れ。疾う、彼を追ひ候へ。護良來意の趣きを聞く耳は持たずと云へ」。

常の御々象がら、固く執ッて五分も動かず、もはや此上はと諦らめて争はず、やがて御前を迂り出て、宮

の令旨多少の斟酌を附け加へ、直義に傳へれば、道理！ 其一群の同勢は聞くと均しく氣色ばむ、直義自身

が進み出て、何と仰せらるゝと改まつて詰め寄りました。

「御來意の趣きも明かならねば」。

「常座の楔子を打ち込めば、」

來意明かならば其儘に異儀無う吾等を御通しあるか？」、と期を押ししました。

「御來意の筋により」。

「必らず異變おぢやらぬか？」

「金打の沙汰でおぢやる。」

「勇ましや。さらば申さう。御詫び言に参ッた直義、恐れながら兄の身にも代り、また己が身は己が身づか

ら斯うは参ッた事て御ぢやる。」

「その儀ならば御門内へ……」

一期の大事と屹として、「一步も御入り許せませぬ！」

さすが直義も氣色が變はる、佩劍の柄われ知らず碎ける計り握りつめ、

「是は近頃稀有な御言葉、其仔細承はらう。」

「宮の令旨に候へば仔細の程は知れ申さず。」

「いしくも言はれたるものかな。仰せ無くばそれ迄として直義も御門内土砂一粒も踏むまじけれ。それにて御異存ましまさぬか？」

「緊よりの事て御ぢやる。」

と、争論は極めて手早く是丈で果と爲ッて、無念をありく顔に示して直義主従の供揃ひは「行け」と計りに號令一聲、一旦小門から出さうにして、又傳はッた下知と共に一同俄に足を轉じ、此度は肩て風を剪ッてあ

はや正門、おのれ、そこから出る氣かと手に足握ッて覗みつめ、まだ口を切らずに見て居る老臣、その方をふりかへッて直義は些しく冷笑、又一令を傳へ直して、正に是調戲顔、小門からして出て行きました。

これを陸から透見して宮も無念に足摺りして目の色も變る勢、事の様子を傳へに來た當の老臣に向ッて口氣猛火を噴きました。重ねくの借上沙汰、詫びに來て受けられず、猶手をまはして詫びやうともせず、あまつさへ調戲三昧、何處まで皇家を見下す事かと流石勇猛な御性質だけ、意氣は一際鋭くなッて、恐れ入ッて平伏する別當も慰めたてまつる手段に盡きて是とて怨みを呑む計り。

あやまつて來た處を一旦荒肝を挫かずばと故さらに強顔した宮の御處存、見事がらりと的を離れて、なまじひの外矢却ッて此方へ飛びかへッて痛憤骨身に入りました。今は最う最後、容赦勘忍、そのやうな間だるい事を口にされたものでも無し、頼む處は眞、正成、親房もあり、長年もあり、此あたりを脱き付けて藩屏を造る用意が肝要。おのれ、足利覺えて居ろ！

思ひは同じ足利。甘言を以て甘たれ込み、體よく詫びて宮を賺かし、充分に御心ゆるさせて、どうか其内

に手を回し、陥れて仕舞はうとの策が意外にも真向から殺竹わりに研り裂かれて、もう此上はと爲りまし

た。右左道は遊ふにしる、歸する處はやはり一つ、宮を押し片付けると目射すからには、破れかぶれ最う岡行  
くも田行くも道は一つ。料る處、宮の返答木で鼻をくくる工合ひ、あれ程に暴いからには最早此方足利に對  
して萬一の用意をばよりより懸へ出した譯、油断すべき處で無い。

第八 碓氷峠の旅僧

彼も是も睨み合ッて時機を見料らッて居る内に快くも年は改まつて、翌れば改元も出来た建武元年。上部  
だけは同様以て「君が代は千代に入千代にさわれ石」の平和安静の世界と固まり着いて、春は正月頃から  
大内の普請もはじまり、金が無いとて楮幣を代用する遺練算段、何のための見得かと言へば、所以は別に無  
いとこの咄し、それを苦々しく睨み付け、天晴油俗に捲き込まれず、一言が一言出る度に警醒の意を含ませる  
藤房の罪は政まれて、其説を聞く人も無し、浮漣輕噪の濁水が壁々と高浪ラッて日本全體を呑むかの勢、そ

れ利用する人も有れば唾を吐き掛けぬばかり獨りて氣を揉む人も有り、野心の芽や非望の花、齒ぎしりの胡  
麻女魚や泪羅の吟、是等兩極の異分子が衝き當ッては捫擇しました。

位だふれと後も言はれた丈有ッて兎角は人心の背いた原因その重なる處は公家の舉動、この方にもありまし  
た。頼朝以來何十年、美事鎌倉蝦の強くて動もすれば皇家の鋒先を引ッばいた反動、北條の零落に生面  
の長袖が虚名を貪り、年來の怨み思ひ知れと計り、小利口なのが小股をくゞッて武士は蹴押される事も有り、  
足利とか、新田とか、然るべく時めいた手に屬く者は特別ながら、其餘の無所屬連に取ッては思ふ程の賞も  
無く、徒らに公家にもみ威張られて無念に腦も煮えました。やがて色々な否な風聞、やれ藤房も羨んで落ち  
た、やれ殿上に怪鳥が出たのと、極り文句のやうな種々の取り沙汰、ことごとく皆人心をいらだてる計りの  
矢先も矢先、忽然として又一つ天下公衆の側てた耳を貫いた意外の風聞、兵部卿の宮護良の親王が馬場殿へ  
監禁の身となられた！

天下既に亂を思ッて、棚に鼠の騒ぐ音も一撥の兆かと思ふ處で、人も有らうに今上の皇子武勳第一の宮が

傷ましくも縹緲の恥辱に掛かれた趣き、扱浮評とも言へぬ浮評、聞くよりも噂の傳はりが早い程、瞬く間に人橋掛けて殆んど全国に行き亘つた、時は建武元年冬の十月。

こゝは上野國碓氷峠の中程、岩にさし掛けて結んだ道端の小家に腰を掛け、休んで居た行脚の法師がおりました。笠深くして居た事として顔は分からず、それ乍ら聲の工合ひや身體つきで料る處廿四五を越えぬ年輩、頼る面を包むと見えてそのためには低い小家に笠の動もすれば塞へる不自由、それさへも我慢して言葉少なにして居ました。落ち合つて同じ處で休息をして居る別の一群は處のもよりの馬子と見えて、始めの内は馬の嘶し、いつは何處に市が立つの、いつは何處で競馬のと、流石又聞く身には物めづらしい應答でした。馬士の中の鐵中鎧々、てツぶりと肥え太つて東持たくましく頬を埋めた、色の小白い、卅恰好の男が是等會話の焦點で、而も一群の銘々に推尊される體でした。

「おどれら」と一目づらりと見わたして、

「馬のよく賣れるは願いたよ。仕立つれば仕立つる儘羽生へて飛ぶやうぢや。」

「は、馬に羽生へるか。ならば鳥は足で翔るべい。」

相槌一人が打ち込めば頭はいと興に入つて、

「此二月は一入ぢや。何に用ゐる馬かと思へば、これ唯軍の心がまへで、血脈さい風などがまだ吹くらしい空と見える。」

首へば一人が進み出て、肩を齧めて身ぶりもをかしく、

「それ、それ、それは何處の果も同じ姿で御ぢやるげな。此程陸奥へ下つた時馬買ひの多さ願いた。いづれも武家が買ふばかりで、軍馬へい賣れたげな。」

「軍馬へい？ 訝かしよ喃。世は定まつたと云ひながら。買ったのは誰どのぢや？」

「聞かずあつた故知りもせず、さり乍ら武士の言葉つき腹からの東男では御ぢやつた。武藏下野あたりかの？」

同時旅附の笠の庇が此方に向いて上りました。が、一方は心も附かず、語り進んで来る親玉、

「こらわたりは新田領とて、いづれの馬もく新田殿の手に上がるが、念無う怪しい事ともぢや。世は又やがて亂るゝか」。

にはかに心付いた工合ひで、

「お、それ、已等も知らう、皇子の、あの、大塔の宮、何事の在すか知られど御憐ましやあの御子が閉ぢ籠めの御身と爲つた噫」。

「それは又」と詰め寄る相手を勿體らしく手真似て制し、

「鎌倉から来た男がさだかに聞いて来た事ぢや。鎌倉殿の練りとやら、をさく人の言ふ趣き、思はぬ事の有る世、噓」。

得意に爲つて語る體、最前から心を潜め、聞かぬふりして聞いて居た旅僧もこゝに至つて堪りかねてか、つと計りに立ち上がつて此方の側へ近づきました。

笠の庇に手を掛けて、

「卒爾なれど御ものがたりの面白い儘打ち付けなる事、いかに仰せらるゝやらん、大塔の宮が御幽閉？」  
笠の上からしげく眺めて、

「と言ふ噂聞いて御ぢやつた」。

「何時？」と重れる短兵急。

「程も無い前と言ふ事て……」

法師の顔さし覗き氣味で身を寄せれば、法師はずつと身を反らせ、

「たしかな筋より御聞きやつたか？」

「たしかとは思ひます。和僧は旅の人と見ゆるに露も御聞きやらんでか？」

「露ほども聞き知らず——今信濃よりまゐつた計り、心附かねば心も附けず、今し御物語り承つて坐に敷き入て御ぢやる」。

「驚きは誰も同じ、小可どもまで肝に答へた。法師は何處の人やらん、小可は此近いわたり馬飼といふは名



のみなる言は、野武士の群をつくる悪戯ものの身で御ぢやる。」

さも愉快らしく高く笑つて、其處の仲間の馬子を示し、

「是等も小可どもに出入する野武士かたく馬子かたく、人の面した鬼で御ぢやる。」

思つたよりは面白し、法師も共に笑坪に入つて阿々と笑ひだせば相手は人を好む性質か、思ひ附いた様に手を拍つて、

「法師は是より何方指して御出てやる。此上野を御通りやるか？ 急がる、旅で御ぢやるかの？」

「急がぬ旅でも御ぢやらねど、上野を経て鎌倉までまゐらんと思ひ候ふ。」

言つて日脚を仰いて見て、「鈍やもう昏近し。」

「秋の日とて名残も御ぢやらぬ。今宵御宿せまほしう小可は思ひ候へどー心ばかりの回向も有るに——御坊の御心如何で御ぢやる？ 御款待は非に無けれど、御宿り賜はらば佛も喜ぶ事御ぢやらう。」

見掛けには似ぬ不思議の快辯、外貌に因らぬものと法師も坐る感じました。が、思ふ所も有り、願ふ心す

ると見えてさうかと直に承け引かず、

「忝けない事では御ぢやるが、言つて何か一思案。」

「差しあたつて俄に又思ひ付いた事もあれば。」

「御泊りやらぬか？」

「然よ、喃、今は。」

急ぐと有れば是非も無し、施行善根とかいふ事を身分柄に似ず好む性質が頗る失望は爲た體ながら流石に

それを無理には言へず、「さらば御泊りは何處にて？」尋ね出した言葉法師は耳にも留めぬ様子、咄しは忽ち

前へ戻つて、卒然として、

「宮についての世の噂は唯それのみで御ぢやるか、喃？」

よく穿る事と怪しみながら馬子は言葉に城府を設けず、聞き込んだ儘の洗ひ浚ひ、それでも聲を低くして、

「くはしうは知られども然るべき方の計らひより斯くは陥されやツた事と覺えて、聞けば無残の沙汰で御ぢ

「やる、宮の御近衆三十人は……」

法師は膝を進めました。息を呑んで詰め寄れば、

「御近衆卅人は揃ひも揃って押へられて……」

「押へられて、げに揃って？」

「揃って而も何れも皆」

顔をしかりて吃として、「縛り首の無残の最期！」

「縛り……首！」と應じた聲、さも厭いた工合ひでした。此方はいくらか溜息まじり、

「大塔宮御叛反のよー奏上に及ばれて扱、そ宮の手足は切られ、宮は御監禁と爲られた趣き、これ只噉ては

御ぢやれど深い遠ひも御ぢやるまじけれ。九重の事は興ふかくて下界で洩り易かられど、馬などの賣れ行く

事といひ、今また是等の沙汰と云ひ、安からぬ様で御ぢやるよの。」

巷談街説とは言ひながら事件が事件としてしんみりして中々に今は輕口も出ず、二人話し込む姿をしげく

と馬鹿な顔して見つめる馬子共其口のげっくり開いたのも時が時とてをかしくも無し、開き了った儘で法師

は無言、笠の傾くに思案投首のしるしも見えて、此方の馬子も多少の不審。其様子凡て無し、宮の一斑か、

敵黨か、思ひ入って根堀り葉堀り聞く處、如何に踏み倒して見たにしろ、木魚念佛二三味くだらなく世を渡

る旅僧とは思はれず、要するに非當今のはやり物、圓頂黒衣に姿をやつして笈の中に血みどろの連判狀、錫

杖のがらめきは仕込んだ鍊鐵の音で聞かせて、陣幕と同じ反から切つた地太麻の還染の袖、文の裏に武を孕

み、生り陰に死を包むそれらの類と見たは儼目か！ 自身は慕無い馬飼、名は不仁の野武士の巨魁と言

ふもの、公明の心事はなさをさ天地日月に對しても恥かしからぬ處も有り、元弘の亂、血氣は腕に痛を立

たせ、同臭の荒くれ者を寄せ集めて、心ばかりの忠義、義貞の手に従ひ、鎌倉に押し寄せて、朝葉が猛火に

燃える中、相應の功名もした人間、天下一旦治って後、慾を知らぬといふ證據に恩賞を辭して受けず、義貞

から貰つた感狀、それ丈は流石にかへせず承け納めて、自然退隱しても幅が利き、上野國碓氷郡峠の裾に

腰に据ゑて動もすれば國の守護の手助けともなる身の上、看板から見せ掛けた俠といふ一文字のためには百

年の生命刀の刃と消しても可し、所以有りさうな法師を見て坐るに甚はしい念も起る、泊るのを辭まれて失望して、わづかに仕方無く名を告げました。

「強ひてとも申されれば此儘袂をわかつて御ぢやらう。なれども和僧も旅の御身、亦こゝらわたり御通りある日の必らずしも無くてやは。さる時々は御心置かず。」

頭を下げる法師に釣られて俄に自分も頭を下げ、

「小可みづから名を申すは甚だ無禮の至りながら。」

「いかで〜〜望むところ。」

「碓氷の五郎と仰せられなば大方人も知った身の上、汚きは申す迄も無けれど雨しのぎの屋根は有り、立ち寄って御泊りあれ。法話流石に小可どもには折り、の目ざまし樂、御聞かせあるも功德で御ぢやる。」

僧氣の無い言ひ草と法師も幾度か頭を下げ、

「行き直つて濃な御言葉は何とて空に思ふべき。又こゝらわたり過ぎん日に御手数敷には預るべし。されば御

名を承りながら仔細有つて愚痴の名申さぬは無禮の沙汰と思し召さんが、俗界外のものとして願はくは御見ゆるしあれ。」

一言が一言はじよめり改まって二人均しく敬ふ氣味合ひ、又いよ〜心許さぬ工合ひ、それも此處が果と

有つて話しの種も盡きました。最早名も知れて、馬飼ては無い碓氷の五郎、名残をしいが然らばと云ふ體、

四の峯に入りかゝる夕日を眺めて塵を拂つて立ち上がれば、外の馬子も用意する、「いざや御僧」と挨拶すれ

ば、法師に於ても残り惜しい、是もわざ〜立ち上がつて姿だけの念佛三昧、合掌して見送るを、振りかへ

り〜五郎も峯を下つて行つて、右左り上下まがりくねる嶮岨の山路、程も無く姿も無くなりました。

五郎の後影を見送つてやがて其影は無く爲つても法師は茫然と考へ込んで溪底の枯木五分も動かず、小

の男が怪しんで抜き足して傍へ寄る處で屹とふりかへつて氣も附いた様、茶代いくらか掴み出して投げ附け

るやうに置きました。禮を云ふ男の言葉半分ほどで打ち消して、吾知らず獨り言、「返さうか？ 扱行かう

か？」何か自分に言はれたのか「えッ？」と聞き直す男の聲に舌うちして物をも言はず、彈機が急にかゝッ

た足付き、やはり五郎の跡に続いて峯を下り出しました。

第九 喜憂の交代

連れ立って出掛けた果實の狼が稍済んで、眠らんだ腹、靡さへ鋭く、そよ／＼そよ／＼峯をわたる千疋狼。溪の岩隆水音のかすかに石を噛むあたり、形は隠して只聲だけ哀れに黄金の鉢を摺る鹿の聲。山は瘦せ、木は細り、乾びついた葉の稜々、今過ぎた雨の痕まだ乾かず、競ひ立つ亂雲の隙間から、や／＼沈む夕陽の光りを描いて五色に雲を彩る壯觀、風は牙え、氣は澄んで嵐一つ飛ばぬ秋の山路の清らかさ。十重二十重屏風をめぐらし、襖を累れた山又山、實物の樹や紅葉、眩い計りの鉢の色を造化の筆で描き出させて碓氷峠三里が間は何んな山媛仙女が住むかと計り怪しまれる程錦繡の天地でした。たま／＼聞える名も知れぬ鳥の聲、一坪かそこら根の中へ抱へ込んだ土を命として崩れかけた絶壁と共に岸から宙づるしに爲った木の下蔭の何處に其身を潜める事か、太古の見本此とほりと宛も諦ひ試みて而も自身その歌の調子を味って居るかのやうな工合で丁度引きづるやう、呼吸を殺すやうに聞き做される鳥の聲。峯かと思へば澤、澤かと思へば峯、今で

こそ平な途、馬車が何うの角の角と贅澤熱を吹くもの、其むかしの碓氷の難所は山の神に生命を奪られぬが幸のくらゐ、兎もすれば切れたがる葛藟に千金か一萬金むゝる値も知れぬ尊い身體を托する計りの勢でした。上信二ヶ國の道ながら、通るといふ程人は通らず、吾儘に生ひ茂った草木、おの／＼さま／＼の贅澤を盡くし、張るだけの根を張り、出すだけの枝を出し、上下共に一致してどんよりと暗闇を造り、仰げば僅に葉の隙からの燦と輝いて見える一點の空、其の星かと思はれました。梢から一筋の薄煙を引く丁合ひでぼんやり垂れ下がる猿尾草に絶えず凝りたがる露の白玉は孱弱く見えても中々こぼれず、其四邊の暗いだけにいと際立って背か紫背ふに背はれぬ光りを射るのは宛然月宮殿の碧瑠璃、山媛が忘れた首かさりか。目に見える風物の見れば見る程面白いのも物思ひの身にはなまじひの感慨の種、あたりの景色に目も止まらず、思案に冪る頭を下げ、途を拾って歩きながら、魂中有に迷ふ工合ひ、果は遂に思ひかれて苦だらけな岩角にどツかり腰を掛けたのは前に碓氷の五郎と酷しをした旅僧でした。そも／＼此旅僧の素生は何？ 凡庸の雲水修行か？ それとも武士の忍び歩行きか？ 忍び歩行きならば